師範學校
歷史教科書

# 外國歷史

東洋篇

（大正七年改版）

東京
合資會社
六盟館

43059
教科書文庫
4
220
51-1918
20000
74178

資料室
教科書文庫
4
220
51-1918
2000074178

I am assured that he is innocent. I persuaded that
peace will come I am assured that he is innocent
viewed in its essential qualities viewed
essential qualities apart from its s ing
apart from its surrounding put u ly
The door opened of itself self-conceit
Ignorance is a bliss in itself. name
say against say for it. self-conceit
self-conceit. ignorance ignorant.
ignorance Ignoramus ignoramus
Ignoramus. Ignoble Ignominy.
Ignominy ignominy. Ignominy.
ignominy ignominious. ignominious
ignominious. ignominious
看下ス look upon, look down
upon, = despise, look up to = respect.
look up to = respect.

He could not resist the pathos in him
He could not resist the pathos in him
pnelicide pnelicide pnelicide
Incise incisor pnelicide pnelicide
look upon, regard look down upon
despise despise look up to = respect
The proposed armistice was rejected.
The intended excursion was adjourned
parallels out of curiosity curiosity.

5a
220
大7

大正七年三月五日
文部省檢定濟

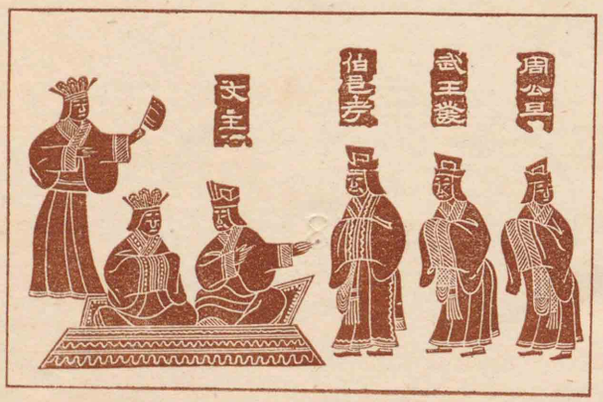
校學範師
書科教史歷

# 外國歷史

## 東洋篇

大正七年改版

峯岸米造編




東京
合資會社
六盟館

# 例言

一敍述、簡明にして散漫ならず、記事、趣味ありて乾燥ならざるは、歴史教科書に於て、最も必要なる條件なり。これ、編者が本書を述作するに當り、特に意を用ひたる所なり。

一行文の良否は、歴史教科書の適否を決するの一條件なり。編者は、また、十分、この點に注意したり。

一歴史教授に於て、繪畫は、實に大切なる材料なり。蓋し、これに由りて、確實なる理會を助け、史的興味を喚起することを得ればなり。これ、編者が特にその選擇に注意したる所以なり。

一紀年は、すべて皇紀を用ひ、その紀元前なるは、一一、前何年と記したれど、紀元後なるは、略してその數字のみを記したり。



広島大学
教
74178
図書

広島大学図書
2000074178

一系圖は、特に重要なるものを擇び、本文の間に挿入したり。その輪廓外に記せる數字は、その王朝の始終の年を示す。





# はしがき

本書は、文部省の師範學校教授要目に準據し、支那を中心とせる我が東洋の歷史を略述したるものにて、その目的が、師範學校の教科用にあること、いふまでもなし。

抑、東洋史の教科は、本邦文化の源流を知らしめ、また、邦國の治亂興亡に關する形式的智識を與ふること、甚だ大なり。然るに、中等程度の諸學校に於て、これを教授するに當り、生徒をしてその學習に甚しく困難を感ぜしめ、延いて本科の課業を厭はしむるが如き傾向あるは、教育上、頗る遺憾とする所ならずや。

惟ふに、東洋史學習の困難なるは、一には、東洋史そのものの性質にも由ることとなるべけれど、一には、その教科書の罪も、また甚だ大

ならざるを得ず。蓋し、從來の東洋史教科書は、あまりに學究的なり。普通教育上、さまで必要もなき支那史上の史的名辭を、そのまま記載するが如き、東西交渉の蹟を知らしめんとして、專門學者も尙難しとする西域諸國その他の關係史實を過度に重んずるが如き、卽ちその例なり。これ豈普通教育に於ける歷史教授の本旨に合するものといふべけんや。

編者、深く在來の教科書の通弊に鑑み、敢て本書の述作を試みたれども、志、徒らに大にして、事、意の如くならず、成果の殆ど觀るべきものあるなし。庶幾くは、大方の示教を得て、益〻本書の改良・整備をはからんことを。

大正六年九月

編者識



師範學校歷史教科書

# 外國歷史 東洋篇（大正七年改版）

目次


第一篇 上古……（自一頁 至一四頁）

第一章 上代の支那……一

第二章 夏殷周……五

第三章 春秋戰國……六

第四章 周代の文物 孔子……一〇

概括……一四

第二篇 中古……（自一五頁 至八六頁）

第一章 秦の統一……一五

第二章 漢の統一……一八

第三章　武帝の大業　四夷の服屬……二三
第四章　前漢の衰亂　後漢……二七
第五章　西域との交通……三〇
第六章　印度　佛教の東流……三一
第七章　兩漢の文物……三七
第八章　三國　晉の統一……三九
第九章　胡族の侵入……四三
第十章　南北朝　隋の統一……四八
第十一章　唐の創業……五三
第十二章　玄宗　安史の亂……五八
第十三章　唐の制度　文物……六一
第十四章　宗教　南海の貿易……六六
第十五章　唐の衰亡　五代……七〇
第十六章　宋・遼及び西夏……七三
第十七章　南宋及び金……七九



第十八章　宋代の文物……八三
概括……八五
第三篇　近古……（自八七頁　至一二二頁）
第一章　蒙古の勃興……八七
第二章　元の世祖　宋の滅亡……九一
第三章　東西の交通……九五
第四章　元の衰亡　諸汗國の盛衰……九六
第五章　明の統一　帖木兒の雄圖……一〇一
第六章　明の衰運　滿洲の勃興……一〇六
第七章　莫臥兒帝國　葡萄牙・和蘭等の東洋經略……一一〇
貿易及び宣教……一一九
第八章　元・明の文化……一二三
概括……一二三
第四篇　近世……（自一二三頁　至一六六頁）

第一章　清の統一……一三三
第二章　聖祖　清・露の交渉……一二五
第三章　邊外の征服……一二八
第四章　清の制度　學術……一三〇
第五章　英國の印度經略　鴉片戰役……一三三
第六章　長髮賊　英・佛軍の侵入……一三九
第七章　露國の滿洲經略……一四四
第八章　露國の中央亞細亞經略　伊犂事件……一四八
第九章　佛國の印度支那經略　清・佛戰爭……一五二
第十章　清國に對する諸强國の壓迫　清の滅亡……一五六
概　括……一六五


師範學校歷史教科書　外國歷史　東洋篇目次終

師範學校歷史教科書　外國歷史　東洋篇（大正七年改版）

峰岸米造編

# 第一篇　上古

## 第一章　上代の支那

苗族驅逐

### 支那の起源

支那は、世界最古國の一なり。今より凡そ五千餘年前に、西方より黃河に沿ひて、北支那の平原に移り來れる一種族ありこれ卽ち支那文明の基を開きたる漢族なり。漢族は、先住種族苗（交趾支那族）を南方に

漢族の土着と太古の萬邦

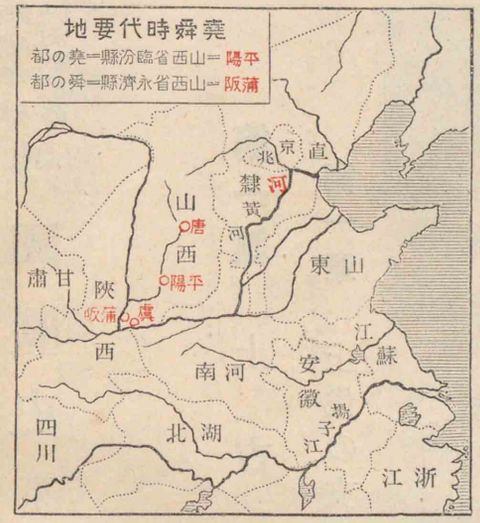
逐ひて、その地を占領し、多くの部落に分れて、各處に散居し、遂に所謂萬邦をなし、その長を群后といへり。

天下一統の始め

**黃帝の業**　傳へによれば、太古、黃帝といふ英雄あり。よく群后を服し、更に四方を征して、始めて一統の業を成し、黃河の流域より揚子江邊に至る大帝國を建てたりと。當時、既に耕織の業開け、宮室を營み、舟車を作り、市場を設けて、百貨を交易し、また文字・曆・算等を發明・創制せりといふ。

當時の開化

**堯舜の世**　後、堯、天子となり、德を修め、民を懷け、曆法を定む。晚年、孝悌を以て聞えたる舜を擧げて、政を攝せしめ、遂にこれに位を讓れり。舜は、賢能の士を擧げ用ひて、








よく天下を治め、また苗族をも南征し、文德・武功、共に著く、漢族建國の勢、愈〻定まれり。これ實に今より約四千餘年前の事なり。後世、治をいふ者、必ず堯・舜を推し、理想的二大聖主となす。

禹の治水

禹の廟

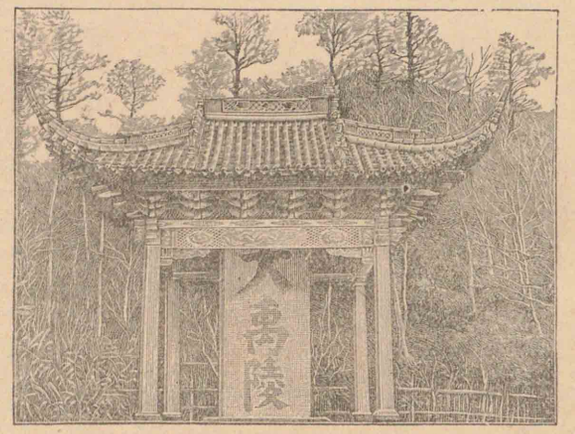
國號の始め

禹王の治

禹吾無間然矣。孔子

## 第二章　夏・殷・周

**夏の盛衰**　禹、心を民政に用ひ、力めて民力を休養す。民、皆禹の德




浙江省紹興縣に在り

**禹の業**　堯・舜の時、黃河の大洪水あり。禹、これを治め、辛苦經營すること十三年、功、始めて成りぬ。舜、これを嘉し、百官を率ゐて、天下の事を攝行せしむ。既にして、舜死し、禹、位を踐み、始めて國號を建てて、夏と稱せり。

堯の即位前一六八〇年頃
舜の即位前一六〇〇年頃

頃 1540 前

夏（一七世　四〇〇餘年）

禹[1]—啓[2]……桀[17]

頃 1100 前

王位世襲の始め

桀王の無道

に服し、その死後、子啓を立つ。王位の世襲、こゝに始まり、相傳ふること十七世、四百餘年に及べり。その最後の王桀、無道にして民望を失ひ、遂に群后の一人湯に滅ぼされたり。時に前一一〇〇年頃なり。

周公成王を輔佐する圖

湯王

**殷の盛衰**

湯、天子となり、國を商（後に殷）と號す。その子孫、相つぎて王たること、三十世、六百餘年、暴君紂出づるに及び、民心、全く離畔せしかば、西伯（西方群后の長）姬發（文王の子）、太公望（名は呂尚）の計を用ひて、殷を討ち滅ぼし、紂に代りて、天子となる。これを周の武王と

頃 1100 前

殷（三〇世　六〇〇餘年）

湯[1]……紂[30]

頃 462 前

この圖は武氏祠堂石室内面の畫なり武氏祠堂は東漢末に築造したるものにて山東省嘉祥縣の東南武翟山下に在り

中央の臺上に立てるは周公にして一人は成王なり中二人は召公と公望なり左の三人は王天子なり其の左の王は南面して立てるものなり右に立てるものは皆不詳　そのこと圖に驗すべし

詳成王は東面し古人は西を以て上となし臣列東向を尊とすること





殷の滅亡

以レ暴易レ暴分。不知其非。伯夷叔齊

封建制度

周公の輔佐

文物の進歩

て、殷を討ち滅ぼし、紂に代りて、天子となる。これを周の武王と

文王—武王—成王

周公

なす。時に前四六二年なり。

**周の極盛**

武王、都を鎬京（長安、今の陝西省長安縣）に奠め、大いに一族・功臣を封じて、群后間に配置し、公・侯・伯・子・男の五爵を設けて、封建の制度を確立したり。王弟周公旦、賢にして才藝多く、武王及びその子成王を輔佐し、禮を制し、樂を作り、制度を更定し、文物、始めて燦然たり。この頃を以て、周の極盛時となす。

天子の直轄地は、方千里（千里は、我が百里内外に當る）これを王畿といひ、鎬京より洛邑に至る黄河南北の地なり。また公・侯の國は、方百里、これを大國といひ、伯の國は、方七十

夏殷周三代要地

都の夏＝山西省夏縣＝夏の邑

都のめ初の殷＝河南省商邱縣＝殷の亳

都の後の殷＝河南省偃師縣＝殷の安

周室の漸衰と諸侯の專横

夷狄の侵入

平王の東遷

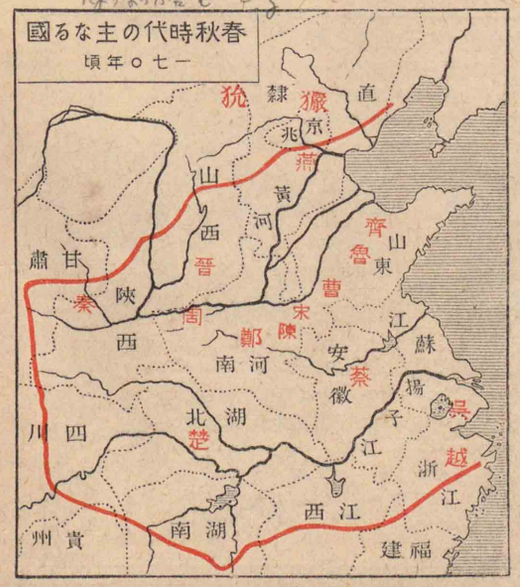
周室の衰微

里、これを次國といひ、子・男の國は、方五十里、これを小國といふ。而して、その地の方五十里に滿たざるものは、これを附庸と稱して、諸侯に隷屬す。

**周室の東遷**　その後、失德の君ありて、周室衰へ、諸侯、漸く專横なり。しかのみならず、四夷、跋扈し、犬戎、西方より內侵しければ、平王、その難を避けて、都を東都洛邑（後の洛陽、今の河南省洛陽縣）に遷したり。これを周室の東遷といふ。時に前一一〇年、國初より十三世・約三百五十年なり。

## 第三章　春秋・戰國

**春秋の世**　平王の東遷後、數十年にして、所謂春秋の世（當時の事、孔子の春秋に載す。故にこれを春秋の世といふなり。）となる。その間、實に二百四十餘年、周室、






倉廩實而知禮節。衣食足而知榮辱。管仲

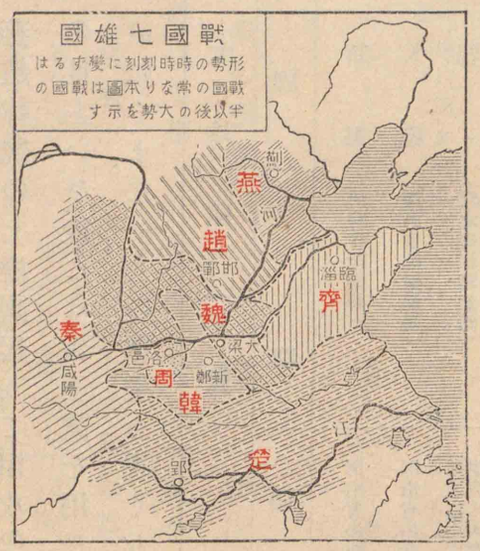
覇者

桓公と管仲

列國の競爭

戰國の七雄

益〻衰微して、王命、行はれず。諸侯、內に爭ひ、夷狄、外に寇す。是に於て、有爲の諸侯、尊王・攘夷を唱へ、諸侯を合せて、その長となり、王命を藉りて、天下に號令せり。齊（侯爵）の桓公、晉（侯爵）の文公、秦（伯爵）の穆公（以上三人、共に神武天皇の頃の人）等は、卽ちそれなり。楚（子爵）の莊王（また神武天皇の頃の人）越王（子爵）勾踐（孝昭天皇の頃の人）等も、また南方より起りて、その威力、一時、中國を風動したりき。是等を總べて覇者と稱す。就中、桓公は、名臣管仲に任じて、國富み兵强く、功業、最も盛んなりき。




**戰國の世**　當時、諸侯は、皆競ひて富國・强兵を力め、相共に戰爭・外交を事とし、强は弱を併せ、大は小を呑み、周初千八百國なりしもの、既に十數國に減じ、後、遂に秦・楚・齊・

燕・趙・韓・魏の七雄國起りて相攻伐すること約二百年、その間を戰國の世といひ、後には皆王號を用ひて、勢を競ひ、周室は、有れども無きが如く、また一人の尊王を說くもの無きに至れり。

**七・雄國一覽**

| 國名 | 國都 | 領地（戰國の半以後） | 滅亡の年代 |
|---|---|---|---|
| 韓 | 新鄭（河南省新鄭縣） | 河南省の中部、山西省の小部 | 紀三一 |
| 魏 | 大梁（河南省開封縣治） | 河南省の北部及び東部 | 紀三六 |
| 楚 | 郢（湖北省江陵縣治） | 湖北・湖南・江西・江蘇四省、河南省の南部及び安徽省の大部 | 紀三八 |
| 燕 | 薊（今の北京の地） | 京兆地方、直隸省の北部及び奉天省 | 紀三九 |
| 趙 | 邯鄲（直隸省邯鄲縣） | 直隸省の西部、山西省の大半 | 紀三九 |
| 齊 | 臨淄（山東省臨淄縣） | 山東省及び直隸省の小部 | 紀四〇 |
| 秦 | 咸陽（陝西省咸陽縣） | 陝西・甘肅・四川三省 | |

秦の強大

**秦の富强と合從策**

七雄國の中、秦は、最も西方に位し、地險にして、人强く、孝公（孝安天皇の頃の人）に至り、商鞅を用ひて、國法を變じ、大いに國力を養ひて、漸次、東方に進出し來り、將に列國を壓倒せんとせり。是に於て、周人蘇秦、合從（從とは縱なり。南北を縱といふ。故に合從とはいふなり。）の策をたて、楚・齊・燕・趙・韓・魏六國を聯合して、以て秦に對抗せしめたり。

**連衡策**

既にして、魏人張儀、秦に仕へて、連衡（衡とは橫なり。東西を橫となす。故に六國合せず、各〻秦に連和するを連衡とはいふなり。）の計を運らし、六國を分離して、各〻秦に服事せしめんとしけり。これより策士說客、續續あらはれ、頻りに四方に遊說せり。

**秦の强盛**

かかる間に、六國は、或は合從し、或は連衡し、また互に攻伐を事として、その方針、一貫せず、徒らに國力を消費して、以て自ら疲弊せり。これに反して、秦は、益〻富强を加へ、昭襄王（孝靈天皇の御代）の時、范雎の遠交・近攻策を用ひて、大いに六國を弱め、四〇五年（孝靈天皇の御代）まづ周を攻めて、これを滅ぼしたり。周は、



寧爲鷄口無爲牛後　蘇秦

合從策　連從策

治ヲ亂ニ持ツ主義

蘇秦の合從策

張儀の連衡策

策士說客の續出

六國の無方針と疲弊

秦の遠交近攻策

周（三七世　約八六七年）
武王1……平王13……威烈王32……赧王37
前462　405

周の滅亡

六國の滅亡

滅ニ六國ヲ者六國ニ也。非レ秦也。杜牧之

武王よりここに至るまで、凡そ八百六十七年、世を傳ふること、三十七なり。

**秦の一統**　周、既に亡びて、秦の東侵益〻急なり。然れども、六國は、內外相助け、表裏相依りて、以てその鋭鋒に當ることをせず、遂に皆秦王政に攻め滅ぼされ、天下、始めて一に歸したり。時に四四〇年（孝靈天皇の御代）なり。

| 秦（諸侯たること三一世） | |
|---|---|
| 襄公1……穆公9……孝公25—□—昭襄王28—□—□—王政31 | 前100 |
| | 始皇帝 440 |

朕為ニ始皇帝一後世以テ數ヘ二世三世至ニ于萬世一傳ニ之無窮ニ　三皇五帝ノ皇帝ヲ取リ帝ヲ称ス

周以前の教育

周の學制

孔子

その教科

## 第四章　周代の文物　孔子

**周の學制**　堯舜の時、既に力を教育に用ひしが、夏殷を經て、周に至り、その制、益〻備はりて、大學及び小學の設あり。大學にては、己れを修め、人を治むる道を授け、小學にては、洒掃應對、進退の節を教ふ。その教科は、主として、禮樂射御書數の六藝なりしが、殊に禮樂は、治國の要具として、最もこれを重んじたり。

修身齊家治國平天下（教政法道德）

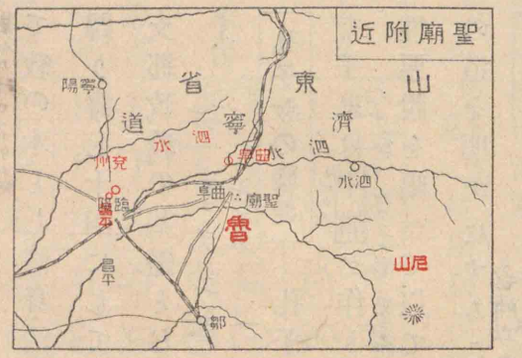
孔子の廟

思想の自由と學者論客の輩出

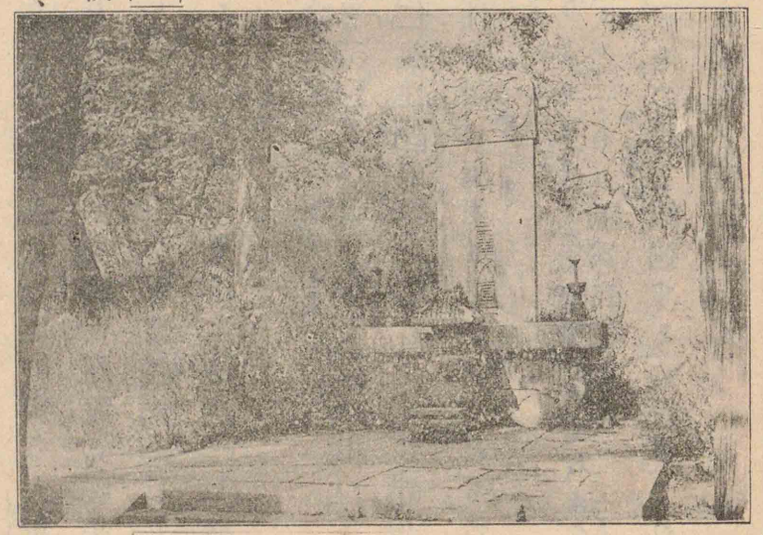
孔子　孔子ノ大哉。孔子。孔子ノ大哉。孔子。孔子以前。既ニ無レ孔子。孔子以後。更ニ無レ孔子。孔子孔子。大哉孔子。序米芾

禮樂射御書數

孔子の廟




**孔子**　春秋戰國の時、天下、大いに亂るるや、思想の束縛解けて、人智大いに活動し、學者論客、雲の如くに輩出せ



山東省曲阜縣に在りて廟側に孔子の故宅現存せり。これに接して孔子の子孫居住し以て孔子の廟をまもる

孔子の生年及び生所
教義の大要
孔子の年齢
子思と中庸
孟子と仁義性善説
荀子と性惡説
老子
列子莊子

り。就中、最も名高きを孔子とす。孔子、名は丘、字は仲尼、一〇九年（綏靖天皇の御代）魯（今の山東省内）に生まる。學德、兼ね高く、多才多藝、通ぜざる所なし。仁を以て教の本とし、修身・治國の道を唱へて、以て列國に周遊し、晩年、魯に歸り、壽七十四にして歿したり。その教は、卽ち所謂儒教にして、啻に支那政教の基礎となれるのみならず、實に東洋道德の一大本をなす。

**孔子教の發達**　孔子の後、子思（孔子の孫）及び孟子（名は軻、戰國の中頃の人）相つぎて出で、子思は中庸を作り、孟子は仁義・性善の説を唱ふ。つぎて、荀子（名は況）性惡説を唱へて、以て孟子の性善説に反對せしが、いづれも皆孔子の道を明かにすることを力めたり。

**道家**　孔子と同時代に楚人老子あり。無爲・自然を唱へて人爲の禮制等を排斥せり。後、列子・莊子、その説を祖述するに及び、これを老莊の學といひ、その道を奉ずるものを道家といふ。

楊家
墨家
法家
兵家

**諸子百家**　右の外、楊子（名は朱）は、自愛説を主張して、甚しき個人主義を唱へ、墨子（名は翟）は、兼愛説を立てて、極端なる博愛主義を説き、商鞅・韓非は、治國の本は、仁義にあらずして、法術にありと論じ、孫子（名は武）吳子（名は起）は、用兵の法を述べて、各一家の言を立て、支那思想史上の壯觀を極む。世にこれらを總べて、諸子百家といふ。

**文字の變遷**　支那の文字は、黃帝以後、幾多の變遷ありしが、總べてこれを古文（または蝌蚪文）と稱す。秦の天下を一統するや、古文を略して、

| 古文 | 篆書 | 隸書 | 楷書 | 行書 | 草書 |
|---|---|---|---|---|---|
| 上 | 上 | 上 | 上 | 上 | 上 |
| 下 | 下 | 下 | 下 | 下 | 下 |
| 左 | 左 | 左 | 左 | 左 | 左 |
| 右 | 右 | 右 | 右 | 右 | 右 |
| 日 | 日 | 日 | 日 | 日 | 日 |
| 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 |
| 山 | 山 | 山 | 山 | 山 | 山 |
| 水 | 水 | 水 | 水 | 水 | 水 |
| 鹿 | 鹿 | 鹿 | 鹿 | 鹿 | 鹿 |
| 馬 | 馬 | 馬 | 馬 | 馬 | 馬 |
| 魚 | 魚 | 魚 | 魚 | 魚 | 魚 |
| 鳥 | 鳥 | 鳥 | 鳥 | 鳥 | 鳥 |

楷行草三體
書寫の材料
毛筆の起り

篆(テン)書と隸書とを作らしめ、文字、漸く進歩したり。然れども、楷・行・草三體の使用せらるるに至りしは、なほ後の事なり。また、書物は、竹木を編(ア)みて卷となし、鐵筆を以てこれに字を刻し、または漆液(シツエキ)を用ひて、書寫の料とせり。その毛筆の始めて作られしは、秦の天下一統後の事なりとす。

## 概括

太古より秦の一統に至るまでを上古期とし、四四〇年以前、即ち孝靈天皇以前に相當す。この期の初めに、漢族、黃河の流域に移り來りて、支那文明の基を開き、漸次、諸蠻族を征服驅逐して、その勢力を擴め、終に支那本部の大部分を統一するに至れり。その間、黃帝が、始めて一統の業を成ししより、堯舜の世を經て、漢人の國本益〻固く、夏・殷・周三代に至りて、政治の發達、文化の進歩、一層觀るべきものあり。

## 古

| 殷 前1100—前462 | 周 前462—440 | | 春秋 | 戰國 |
|---|---|---|---|---|
| 前一一〇〇頃 | 湯の卽位 | | | |
| 前四六二 | 殷の滅亡 | | | |
| | 前四六二 | 武王の卽位 | | |
| | 前一一〇 | 周室の東遷 | | |
| | 前二五 | 齊の桓公立つ | | |
| | 一六 | 管仲死す | | |
| | 九八頃 | (神武) | | |
| | 一〇九 | (綏靖) | 釋迦生る | |
| | 一七六 | (懿德) | 孔子生る | |
| | 一八二 | (懿德) | 釋迦入滅す | |
| | 二八九頃 | (孝安) | 孔子死す | |
| | 三〇〇 | (孝安) | 孟子生る | |
| | 三二八 | (孝安) | 秦の孝公商鞅を用ふ | |
| | 三五〇 | (孝安) | 蘇秦六國を合從す | |
| | 三七二 | (孝靈) | 張儀の連衡策成る | |
| | 三九二頃 | (孝靈) | 孟子死す | |
| | 四〇五 | (孝靈) | 阿育王の卽位 | |
| | 四二九頃 | (孝靈) | 周の滅亡 | |
| | 四四〇 | (孝靈) | 阿育王死す | |
| | | | 秦の一統 | |

# 年表（一）

年代は皇紀に據る

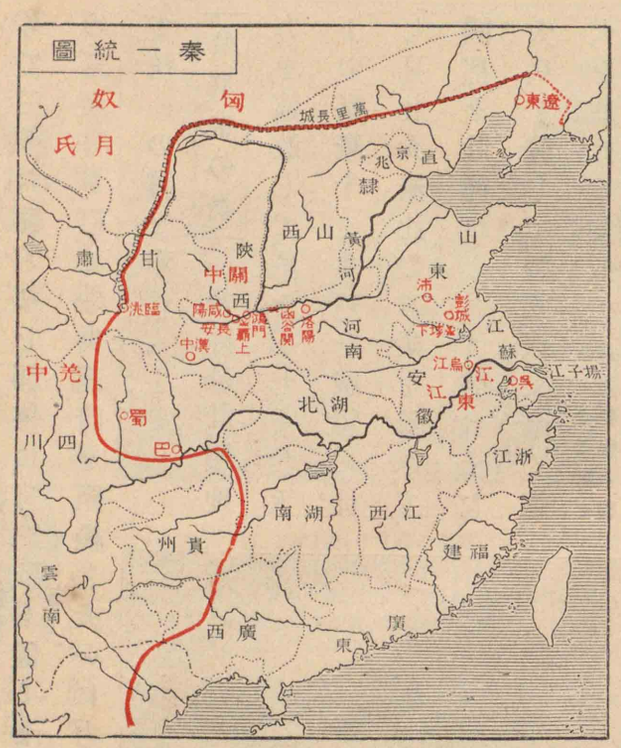
| 時代 | 王朝 | 年代（天皇） | 重なる事蹟 |
|---|---|---|---|
| 上古 | 堯 | 前一六八〇頃 | 堯の卽位 |
| | 舜 | 前一六〇〇頃 | 舜の卽位 |
| | 夏 前1540頃-前1100頃 | 前一五四〇頃 | 禹の卽位 |
| | | 前一一〇〇頃 | 夏の滅亡 |
| | 殷 前1100頃-前462 | 前一一〇〇頃 | 湯の卽位 |
| | | 前四六二 | 殷の滅亡 |
| | 周 前462—440 | 前四六二 | 武王の卽位 |
| | | 前一一〇 | 周室の東遷 |
| | | 前二五 | 齊の桓公立つ |
| | | 一六（神武） | 管仲死す |
| | 春秋 | 九八頃（綏靖） | 釋迦生る |
| | | 一〇九（綏靖） | 孔子生る |
| | | 一七六（懿德） | 釋迦入滅す |
| | | 一八二（懿德） | 孔子死す |
| | | 二八九頃（孝安） | 孟子生る |
| | | 三〇〇（孝安） | 秦の孝公商鞅を用ふ |
| | | 三二八（孝安） | 蘇秦六國を合從す |
| | | 三五〇（孝安） | 張儀の連衡策成る |
| | | 三七二（孝靈） | 孟子死す |
| | | 三九二頃（孝靈） | 阿育王の卽位 |
| | | 四〇五（孝靈） | 周の滅亡 |
| | 戰國 | 四二九頃（孝靈） | 阿育王死す |
| | | 四四〇（孝靈） | 秦の一統 |

地方制度

皇帝の號

# 第二篇　中古

## 第一章　秦の統一




**郡縣制**

秦王政は、咸陽（陝西省咸陽縣）に都し、その天下を一統するや、天子の尊嚴を示さんために、皇帝の號を立てて、自ら始皇帝と稱し、また李斯の言に聽き、周代封建の餘弊に鑑みて、地方制度に大改革を加へ、天下を分

中央政府の組織

地方巡遊と國都の經營

匈奴

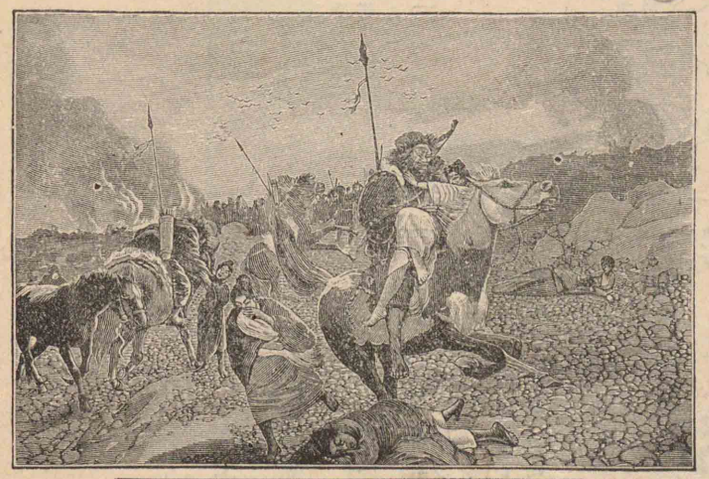
匈奴征伐

萬里の長城築造

ちて三十六郡となし、郡毎に守・尉・監を置く。また丞相・太尉・御史大夫の三大官を以て、中央政府を組織し、大いに力を中央集權に注ぎ、以て統一の實を擧げんとせり。

**始皇帝の業**

帝、性豪壯、屢〻地方を巡遊して、威を示し、また天下の富豪十二萬戸を咸陽に徙し、且、壯大無比の宮殿を營みて、國都を壯麗にしたり。帝は、また、大兵を發して、戰國以來、漸く强大を致せる匈奴（トルコ種に屬せる未開野蠻の種族にして、蒙古地方に遊牧・轉徙し、騎射に長じ、戰陣に勇なり。）を擊破し、北邊に長城を增築して、これに備へ、また南征して、今の兩



ギリシヤ人の描けるトルコ人の想像圖なれども匈奴の狀態を窺ひ知るに足るべきを以てここに掲ぐ



南方征服

重稅及び勞役過度

政法の嚴刻

萬里長城の一部

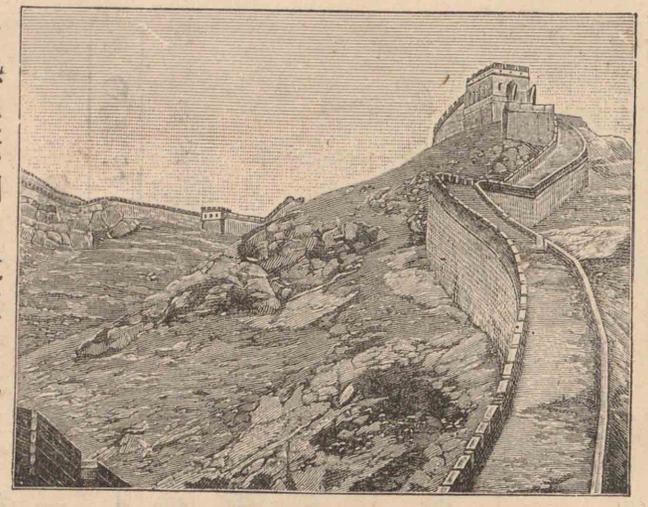
焚書坑儒

人民困弊

群雄蜂起

燕雀安ンゾ知ニ鴻鵠之志ヲ哉　陳勝

廣安南地方をも從へ、疆域殆ど周に倍するに至れり。



長城の築造は着手せしは戰國の時なれども後秦始皇帝に至りて大いに修繕を加へたり。現今見る所の長城は上に瓦を葺き、石を積みて作れり。また關門各處に設け、緩急相援け、路通じて廣く、適宜に應じて相援け、急を救ふべし。

**暴政**

かくの如く、征役・土木、頻りに起りて、民、重稅に苦しみ、徭役、また殆ど止む時なかりし上に、帝は、愈〻驕暴を逞しくして、政法、嚴刻を極め、書を焚き、諸生を坑殺して、新政を非議する者を一掃し、以て天下の人心を壓服せんとしたり。是に於て、人民困弊して、秦室を怨み、六國の遺臣の亂を思ふもの、また頗る多く、帝死して、二世皇帝立ち、趙高權を專らにするに及び、楚人陳勝・吳廣、まづ叛して、兵を

項籍　書ハ足ルノミニ以テ姓名ヲ記スルニ而已。劍ハ一人ノ敵ナリ。不足ノ學ブニ。萬人ノ學ブヲ敵ス。

項籍と劉邦

劉邦秦を滅ぼす

劉邦

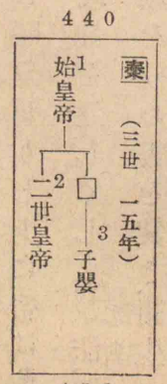
鴻門の會

舉げ、群雄、陸續、諸方に蜂起せり。

## 第二章　漢の統一

### 秦の滅亡

秦末、爭ひ起りし群雄の中、最も傑出せるを、江東より起れる項籍（字は羽、楚の舊臣）と沛（江蘇省沛縣）より起れる劉邦となす。二人、相ともに秦を擊ち、籍、殊に善く戰ひて、屢、その兵を破りしが、邦、籍に先だちて、秦の國都に迫り、四五五年（孝元天皇の御代）遂にこれを滅ぼしたり。秦は、始皇帝よりここに至るまで、僅かに三世・十五年なり。




### 劉邦と項籍との關係

項籍、劉邦の功を嫉み、鴻門（咸陽の東、陝西省臨潼縣）に陣して、將にこれを擊たんとす。邦、乃ち行きて謝する所ありしに、籍の謀臣范增、籍をして邦を殺さしめんとせり。されど、邦は、謀臣張良の智と、壯士樊噲の勇とにより、その難を免れたり。後、籍、邦に巴・蜀（四川）漢中（陝西省の內）の僻地を與へて漢王とし、己れは、恣に中原の美地をとりて、西楚（時人、吳を東楚となし、彭城（江蘇省銅山縣）を西楚となす。項籍、彭城に都す。故に國を西楚と號す。）の覇王と稱せり。

漢王と西楚の覇王

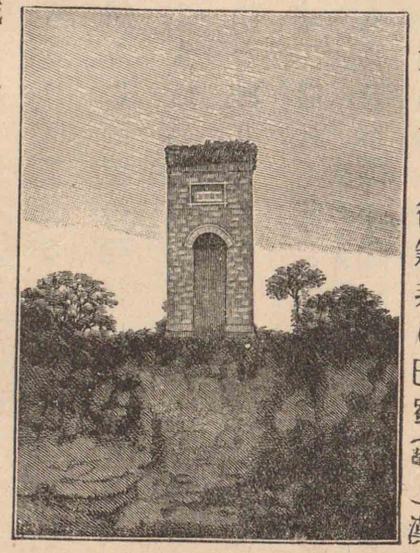
鴻門の舊蹟

漢の三傑

劉邦の卽位

### 漢楚の分爭

爾後、劉邦は、蕭何を丞相として、兵食を蓄へ、韓信を將とし、張良を參謀として、項籍と戰ひ、分爭、數年に及べり。世にこれを漢・楚の戰といふ。その間、形勢、屢、變動せしが、籍、遂に垓下（安徽省靈璧縣の南）に敗れ、やがて自殺して亡びたり。時に四五九年（孝元天皇の御代）なり。邦、乃ち帝位に卽き、都を長安（鎬京）に奠む。これを漢の高祖とす。



### 漢の初世

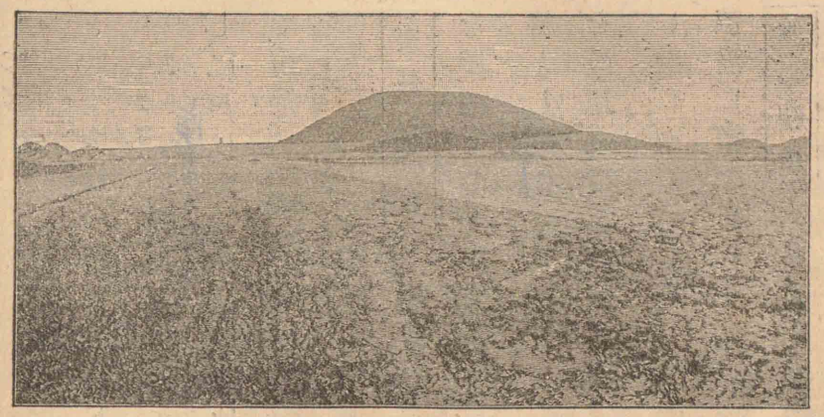
高祖周・秦の興亡に鑑み、封建・郡縣の兩制を併用し、子

高祖の制

景帝の陵

呂后の專權

呂氏の亂



陝西省咸陽縣治の東五十清里にあり臺狀をなし基邊方約二百三十尺高さ約四十五尺あり

弟・同姓を王に封じて、これに廣大の地を與へ、以て帝室の藩屏となし、且、その間に直轄の郡縣を交へ置き、諸功臣の王たるものは、漸次、事を以て、これを誅除し、劉氏にあらざれば、王たるを得ずと定めぬ。然るに、高祖の死後、いくほどもなく、太后呂氏、權を專らにし、高祖の禁を破りて、その一族を王とせしが、呂后死し、諸呂、亂を作さんとするに及び陳平・周勃等、討ちてこれを平げ、文帝を迎へ立てたり。

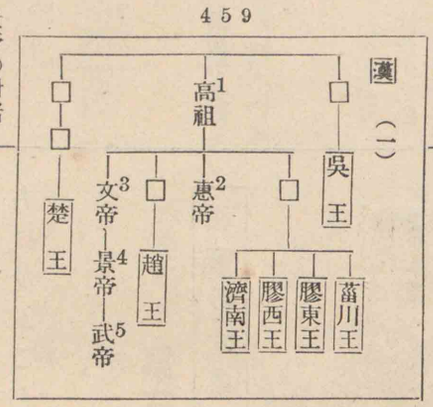
**吳楚七國の亂**

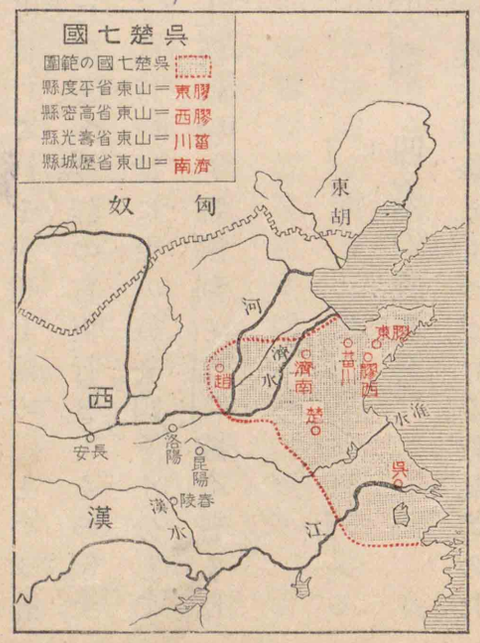
文帝は、守成の明君にして、仁儉の政を施し、民富みて、國庫充溢せり。然れども、諸侯王の勢、强大にして、實力、殆ど帝室に比肩し、漸く朝命を奉ぜざりき。年少の英才賈誼、治安策を上りて、これを痛論し、地を割きてその力を削るべきをいふ。帝、その言を嘉し、これが實行に着手せしが、未だ完く斷行するに及ばずして死し、子景帝立つ。景帝鼂錯を用ひ、その言を納れて、事ある毎に、諸侯王の領土を削りたり。諸侯王、これを怨み、吳・楚以下の七國相應じて兵を擧げ、勢、頗る盛んなりしが、周亞夫の功

文帝の仁儉

諸侯王の强大と賈誼の治安策

景帝の對諸侯王策



亂後の處置

天（周勃の子）討ちてこれを平げたり。世にこれを吳・楚七國の亂といふ。亂定まりて後、諸侯王は、皆京師に留まり、朝廷の官吏、行きてその領土を治むることとなり、景帝の子武帝の世に至り、益〻大國を小分して、その權力を殺ぎければ、事實上、漢は殆ど郡縣制となり、威令、普く地方に及ぶこととなれり。

漢初の文教

武帝の文勳

武帝

## 第三章　武帝の大業　四夷の服屬

### 武帝の大業

秦火の厄、及び、秦末以降うちつづける戰亂等のために、一時、甚しく衰頽せる文教は、漢代に入りてより、漸く復興の氣運に向ひしが、儒學は、尙未だ盛んならざりき。然るに、武帝立つや、大いに儒學を尙び、これを以て、國家政教の本となし、大學を興し、五經博士を置きて詩・書・易・禮・春



武帝の武功

漢初に於ける匈奴の勢

衞青・霍去病等の征伐

烏孫との修好

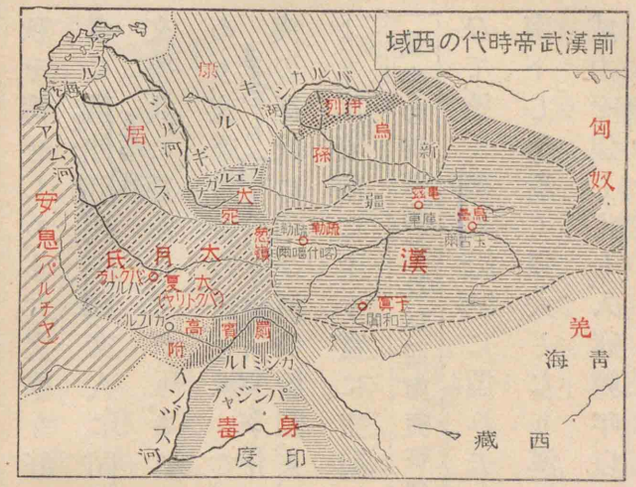
秋を講ぜしめ、また文學を好みて、その道の才人を保護しければ、儒者に董仲舒・孔安國、文人に司馬遷・司馬相如の如き大家輩出し、經學・文學、共に盛んになれり。されど、帝の大業は、文事よりも寧ろ武事にあり、文帝・景帝の後を承けて、國力の充實せるに乘じ、大いに力を四夷の征伐に用ひ、漢の版圖、東、朝鮮より、西、天山南路に及び、北、內蒙古より、南、安南に至り、實に空前の大發展をなしたり。

### 武帝の匈奴南越及び西南夷征伐

さきに秦の始皇帝の大征伐にあひて、遠く塞外（長城以外）に遁れ去れる匈奴は、秦末の爭亂に乘じて、再び南下し、勢、漸く强大となり、漢初の對匈奴策の柔軟なるを侮りて、益〻威力を逞しくし、入寇頻年、以て武帝の世に至りたり。當時、匈奴の領域、頗る廣く、東は朝鮮の西邊より、西はチベットに及びしが、帝は、衞青・霍去病等を將とし、大軍を發して、屢〻これを伐ち、遂に漠北に逐ひ攘ひて、大いに國威を發揚し、後張騫をして烏孫（トルコ種、今の伊犂に居る）との修好

南越討平
西南夷服屬
西域に於ける大月氏
張騫の使命とその遭難

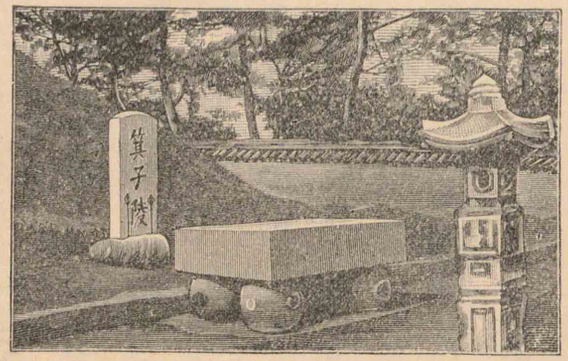
を圖らせ、又、これと婚を通じて、匈奴を牽制せしめ、益、その勢を挫きたり。帝は、また南越（兩廣・安南等の地）を討ち平げて、その地に九郡を置き、四川・貴州・雲南等の夷族をも降して、五郡を置きたり。




## 西域との交通

これより先、漢の初めに、月氏族（トルコ種、或はチベット種ともいふ）匈奴に逐はれ、その占據地河西（黃河以西の甘肅の地）を去り、アム河北に移りて、そこに大月氏國を建て、勢、漸く盛んなり。武帝の匈奴を征するや、帝は、大月氏が匈奴を恨むる由を聞き、東西相應じて、これを夾擊せんと欲し、張騫をして大月氏に使せしむ。騫、匈奴の地を過ぎ、抑留せらるること十餘年、僅かに遁れて、西に走り、大宛（フェルガナ地方）康居（キルギス荒原）を經て、大月氏に達したり。大月氏は、當時、既にその堵に安んじて、また報復の意なかりしかば、騫、遂に使命を果さずして歸りぬ。されど、武帝は、その後、大宛を伐ち、これを

大宛征伐
西域との交通
箕子の陵
箕氏の朝鮮



朝鮮平壤乙密臺の西麓に在り

して朝貢せしめ、大いに威を西域に張りければ、漢と西域との交通、漸く開け、西域よりは、名馬・葡萄及び美術工藝品等を漢に輸入し、漢よりは、蠶絲・絹・漆器等を西域に傳へたり。

## 武帝の朝鮮征伐

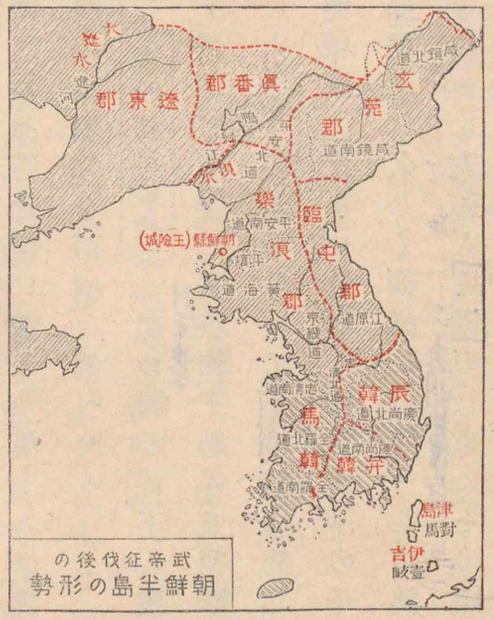
初め周の武王の殷を滅ぼすや、殷の王族箕子、逃げて朝鮮に入り、その王となりて、王險（平壤）に都し、領域、遠く遼東に及べり。爾後、箕子の子孫、相承け、久しく朝鮮に君臨せしが、漢の初めに、支那人衞滿のために、その國

衞氏の朝鮮

を奪はれて亡びたり。これより、衞氏、朝鮮に王たること三世、衞滿の孫に至り、武帝の招諭に從はず、剩へ漢の邊吏を殺ししかば、帝怒り、兵を出して、これを討ち滅ぼし、その地に眞番・樂浪・臨屯・玄菟四郡を置きたり。是に於て、漢威遠く朝鮮半島に及び、その南部なる三韓とも、また密接の關係を生ずるに至れり。三韓は、卽ち馬韓・弁韓・辰韓にして、夙に我が日本と交通せるが故に、我が國と漢との交通も、また隨ひて開け、後には、支那の天子より國王の印綬を受けし西國の豪族などもありき。

武帝の征伐

日漢の關係




武帝征伐後の朝鮮半島の形勢





武帝の失政

宣帝の中興

宦官外戚の專橫　王莽の簒奪

漢（二）

武帝 5 — 昭帝 6 — 宣帝 7

元帝 8 — 成帝 9 — 哀帝 10 — 平帝 11 — 孺子嬰 12

668

# 第四章　前漢の衰亂　後漢

武帝の世は、漢室極盛の時なりしかど、

## 武帝の失政と宣帝の中興

征伐・土木等のために、國用續かず、その晩年には、官爵を賣り、鹽・酒・鐵器等の製造を政府の專賣となしなどしひたすら財利を聚むるに汲汲たりければ、民、困弊して、怨嗟の聲、漸く高く、盜賊、所在に蜂起し、天下、將に亂れんとせり。帝の後、昭帝、宣帝、相つぎて立ち、心を民力の休養に用ひ、殊に宣帝は、賢相・良吏を擧げ用ひて、善政、頗る多く、漢室を中興したり。

## 前漢の衰亡

宣帝死後、また明君なく、宦官、威福を恣にす。既にして、外戚王氏、政柄を握り、權を專らにすること、約四十年。その族人王莽、遂に漢室を奪ひて、帝位に登り、國を新と號せり。時に六六八年（垂仁天皇の御代）なり。漢は、高祖より十二世、およそ二百年にして、一時中絕

吾理天下。亦欲以柔道行之。
光武帝

王莽の失政
群雄蜂起

**光武帝**

光武帝の即位

西漢と東漢

光武の治

明帝章帝の治

したり。

**漢室復興**

王莽、既に位に即き、妄りに古制に倣はんと欲し、政令、煩苛にして、賦税、甚だ重かりければ、人心、忽ち離畔して、群雄、各地に蜂起せり。漢の同族劉秀（景帝の遠孫）また兵を起し、王莽の大軍を昆陽（河南省葉縣の南）に破りて、威名、頓に揚れり。つぎて、漢軍、長安を陷れて、王莽を殺すや、劉秀、やがて、衆に推されて、帝位に即き、漢室を再興して、洛陽（さきの洛邑）に都したり。これを後漢の光武帝となす。時に六八五年（垂仁天皇の御代）なり。長安に都したる前漢を西漢と稱し、これより後を東漢といふ。

**光武以下三代の治**

光武帝は、即位の後、諸將を派して、群雄を平げ、よく意を民治・教化に注ぎ、學術を奬め、節義を勵まし、以て士風を一新したり。帝の後、子明帝・孫章帝、相承け、皆よく父祖の業を守りて、政





外戚・宦官の專權

諸名士の奮起

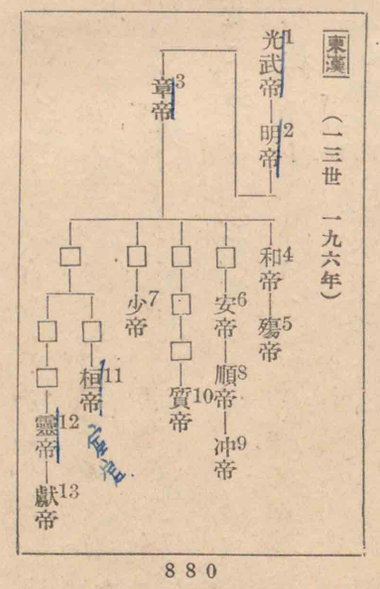
黨錮の獄

宦官の暴横と地方の動搖

に勤め、儒を尚び、學を重んじ、内治・外交、共に振ひ、光武以下三代・六十餘年間の太平を致せり。

**東漢の末路**

章帝の後、幼主、多く位に臨み、外戚・宦官、權を爭ひて、漢室の二大患をなす。既にして、宦官、遂に全く政權を握り、驕横・跋扈を極めしかば、桓帝・靈帝二朝に亙り、李膺・陳蕃等の諸名士、宦官を攻撃し、遂にこれを誅せんとして果さず、反りて殺戮・禁錮せられしもの、六七百人に及び、節義の士、殆ど一網打盡せられたり。これを黨錮の禍といふ。これより、宦官の暴横、至らざるなく、漢室の威令、また地方に行はれず、民心、漸く動搖せり。



# 第五章　西域との交通

宣帝の匈奴征伐

王莽の時の匈奴

南匈奴内附

北匈奴征伐

この頃景行天皇の熊襲征伐あり

鮮卑匈奴の故地を占む

班超の功

## 匈奴の衰微

西漢の宣帝は、烏孫を援けて、匈奴を擊ち退け、西域都護を置きて、烏壘城（今の庫車の東玉古爾）に治せしめたり。これより、匈奴、益〻衰へ、漢威、大いに西域に振ひしが、王莽の亂に、匈奴、またまた叛きて邊郡の患をなし、漢室中興の後も、なほ屢〻北邊に寇しき。既にして、匈奴、分れて南北となり、相互に攻擊して、兵勢、やや衰へ、南匈奴は、遂に漢に内附し、北匈奴のみ、ひとり漢北に據りて、叛服常なかりしが、明帝・和帝、相つぎて、これを擊ち破れり。是に於て、匈奴の餘衆遠くカスピ海（Caspian Sea）の北方に遁れ去り、鮮卑（内蒙古の東邊に居りたる族、今の蒙古種の同族）東方より來りて、その故地に據り、勢、漸く盛んなり。

## 西域諸國

初め明帝の北匈奴を伐つや、その右臂を斷たんと欲し、班超を遣はして、西域諸國を諭さしむ。超、天山南路の諸國を威服





龜茲の都護府

西域諸國の叛服

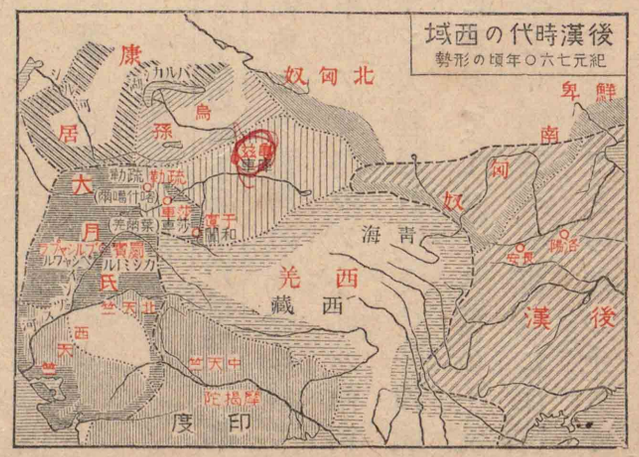
甘英の西行

大秦支那との交通を望む

し、和帝の時、西域都護府を龜茲（庫車）に置くに及び、その都護に任ぜられ、叛を討じ、服を撫し、威、葱嶺の東西に振ひ、大月氏・安息（Parthia）等の諸國に至るまで、皆漢と交通せり。然るに、超の後、都護、その人を得ず、諸國、また皆漢に叛き、都護府も遂に廢せられたり。

## 東西の交通

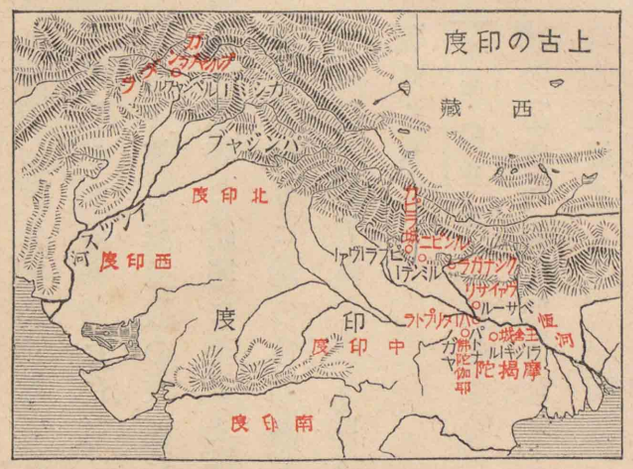
班超、また大秦國（ローマ帝國）の富盛なるを聞き、甘英を遣はし、これと交通せんことを圖りしが、英、條支（シリヤ）に至り、大海（地中海）に臨み、達せずして歸りぬ。大秦にても、かねて支那産の絹を愛重し、支那との直接交通を開かんことを望みたりしが、敵國安息が中間に介在して、これを妨げしがために、その事、遂



ローマの使節來る

に成らざりき。されど、東漢末に至り、大秦王の使節、印度洋より安南を經て、洛陽に來りしかば、これより、海上に於ける東西の交通、漸く開け、支那の商船も、漸次、セイロン Ceylon 島附近に赴きなどしけり。

支那商船の西航




# 第六章　印度　佛教の東流

## 印度アリヤン人の南下とその建國

アリヤン人の起源地

初め漢族が、西方より黃河の流域に移り來りし頃、中央アジヤのアム・シル Syr 兩河間に、アリヤン Aryans 人種起れり。その一派、次第に東南に移りて、インヅス河の上流地に入り、今より約三千年前頃には、恒河の左右に蔓延して、その地の土人を

恒河邊の征服と建國





征服し、以て數多の國を建て、漸次、特殊の文明を開きたり。

## 印度上世の文明

四種姓

その社會は、婆羅門（僧族）、刹帝利（王族）、吠奢（平民）、戍陀羅（奴隸）の四種姓に別れ、婆羅門は、祭祀・教法を掌り、刹帝利は、兵・政の事に當り、吠奢は、農・牧・商・工の業を營み、戍陀羅は、耕作・運搬等の力役を務む。初めの三姓は、皆アリヤン人にして、戍陀羅は、卽ち征服せられたる土人なり。四種姓の中、婆羅門、最も勢力を占め、經典吠陀を研究して、

宗教及び學術

婆羅門の壓制

婆羅門教を創め、また哲學・醫學・數學・語學・星學等を究め、次第に暴威を振ひて、甚しく他の種姓を壓制したりしが、孔子と殆ど同時代に至り、刹帝利姓より釋迦出で、新に佛教を起して、その弊害を打破せんと試みたり。

## 釋迦の一生

釋迦の出家と成道

釋迦は、實名を喬答摩悉達多といひ、中印度のカピラ城主淨飯王（原名スドダナ）の子なり。夙に人生の無常と、社會の腐敗とを歎じけるが、二十九歲の時、家を棄てて、山林に入り、六年の苦行を積

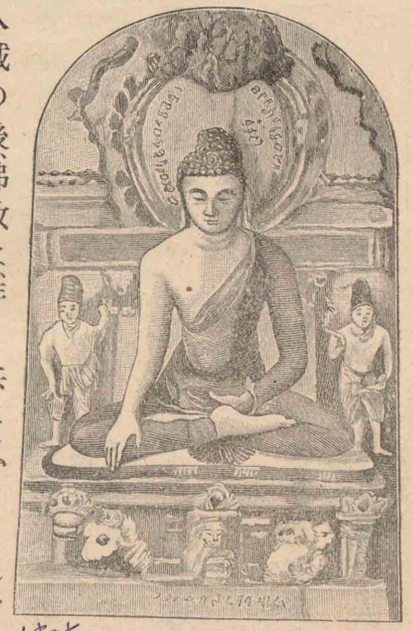
佛教の要旨

佛滅

釋迦入滅後の佛教

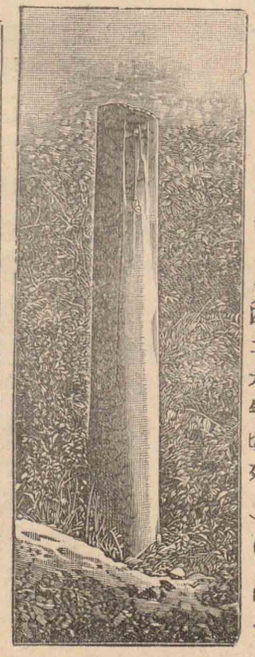
釋迦誕生地ルンピニ（今ルミンディイ）の石柱

みて、始めて佛陀となり、種姓の區別を斥け、四民平等を說き、慈悲・博愛を教ふること、前後四十餘年に及べり。入滅の時、壽約八十、實に一六七年頃（懿德天皇の御代）なりといふ。



釋迦成道の地ブダガヤより發見したるもの

入滅の後、佛教は、年と共に弘まりしが、阿育王（三九二年頃即位、四二九年頃死）の出づるに至るまでは、勢力、なほ恆河流域の外に出でざりき。阿育王は、摩揭陀國の英主にして、秦の始皇帝と同時代の人なり。王は、略ぼ印度



この石柱は我が明治三十年の發見にかかる刻文には阿育王がこの地に來り釋迦誕生地なるの旨を以て覺書する旨を記す

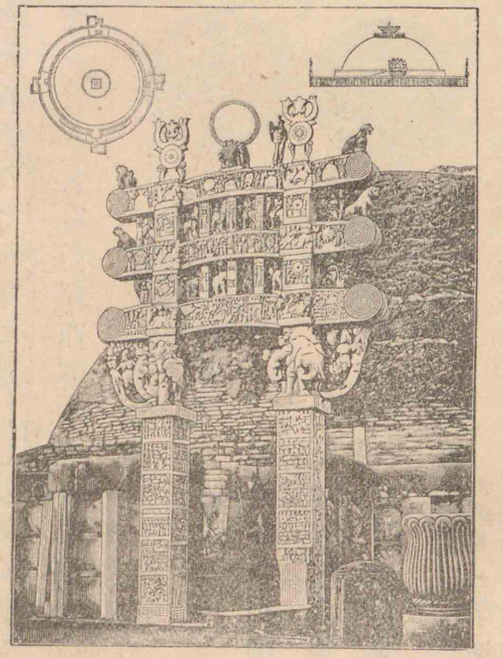
## 阿育王と佛教





阿育王の弘教

一統の業を成し、篤く佛教に歸依し、國都パータリプトラ（パトナ）Pataliputra に數多の高僧を集めて、佛典の結集をなし、或は親しく佛蹟を巡拜し、或は塔を建て、石柱を起しなどし、また僧侶を四方に派して、鋭意、宣教に力めしかば、佛教は、印度域内はいふに及ばず、遠くセイロン・ペルシヤ・エジプト・ギリシヤ等にまで宣傳せられたり。



正面　サンチ大塔の北門　平面

サンチの大塔は阿育王時代の建立なり。ボパール世周の欄及び四の簡の門は約五哩の一小村に加せらるべし。サンチ村の南西に在り。

## 迦膩色迦王と佛教

阿育王の後、摩揭陀は、國勢、次第に衰へ、王朝、再三興亡して、婆羅門教、再び勢を得けれ

佛教の中心大月氏に移る

ば、佛教徒の北印度に徙るもの、漸く多く、大月氏、自ら佛教の中心となりたり。大月氏は、西漢末より、國威、大いに揚り、東漢の初めに、英主迦膩色迦王立つや、都をプルシャプラ(Purushapura)に奠め、國益榮えて、領域、印度西北部より、中央アジヤ一帶の地を包括し、延いて葱嶺以東に及べり。王は、篤く佛教を信じ、力を盡して、これを保護し、また國都に高僧を集めて、佛典の結集をなし、大いにその弘通に力めしかば、佛教は、王の廣大なる版圖內に傳播し、東流して天山南路にも進入したり。

釋迦の像を刻せる迦膩色迦王の貨幣

迦膩色迦王の盛世と佛教保護

明帝佛教を求む

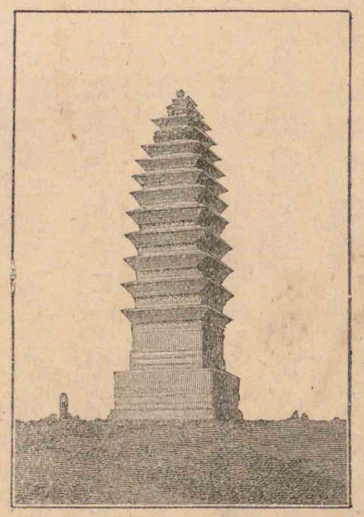
**佛教の東流**　その頃、支那にては、東漢の明帝、位に在り、西域に佛教あるを聞き、蔡愔を遣はして、これを求めしむ。愔、大月氏に至り、佛像及び經典を得、且、高僧を伴ひ歸れり。明帝、乃ち洛陽に白馬寺(經を貢へる白馬に因む)を建てて、これを尊奉せり。

西僧多く支那に入る

白馬寺の塔

朝鮮半島より我が國に傳來す

これより、西域の僧侶、支那に來りて、宣教・譯經に從事するもの、漸く多く、佛教は、年一年に盛んになり、更に東して朝鮮半島に入り、後、遂に我が國にも傳來したり。



## 第七章　兩漢の文物

**儒學**　漢は、秦の焚書坑儒の後を承け、思想界、萎靡して振はざりしが、武帝に至りて、學術、漸く復興し、儒學、再び盛んになれり。然れども、當時は、既に周代と言語・文字を同じくせざる所ありて、古書の文義、了解し易からざりければ、學者、多く字句の解釋に忙はしくして、新思想發生の餘裕なく、徒らに訓詁・註釋等を事とせり。

儒學の復興

訓詁の學

西漢儒者の研究範圍

漢の石經

東漢の儒學

大儒鄭玄

## 兩漢の儒者

されば、西漢の時には、學者、未だ數經に通ずるものあらず、その研究、一經に限られ、各、專門に師說を墨守して、これをその門弟に傳ふるのみなりき。光武帝中興の業成るや、大學を建て、五經博士を置き、大いに儒學の興隆に力めしかば、學者、研究の範圍、次第に擴まり、東漢末には鄭玄の如き大儒出づるに至れり。玄は、衆家の學を兼ねて、諸經の註釋、頗る多く、兩漢の儒學を大成せりと稱せらる。

西漢の末諸儒詔を奉じて六經の文字を正しこれを石に刻して洛陽の大學門外に立てたれば石經は論語の一部にして東亞學術研究會發行「漢學」の藏所氏之正岡田を寫して拓本を載せたるものに據りなるべし孔子號に

道之(以)德
我我對(曰)母違(樊)遲(何曰)
子夏問孝子曰色(難)有事(弟)
人焉廋　子曰溫故(而知新)
端斯害也已　子曰(由誨)女
爲則民服孔子(對)曰(舉直)
書云孝于惟孝友于兄(弟施)
(於)殷禮所損益可知(也)



文帝武帝時代の文學者

司馬遷の史記

班固の漢書

東漢末の形勢

曹操劉備孫權

## 文學

文學は、西漢の文帝・武帝の時、論策に長ぜる賈誼、辭賦に巧みなる司馬相如、史筆に勝れたる司馬遷の如き大家出で、共に絕世の才を以て、古今に鳴る。司馬遷の著はせる史記は、太古より西漢の武帝に至るまでの紀傳體歷史にして、永く範を支那正史に垂れ、筆力、雄健にして、敍事、神に入り、後世、能く及ぶなしと稱せらる。その後、文藝、益〻盛んにして、能文の士、漸く多く出でたるが、東漢に至りて、班超の兄班固、史記に倣ひて、漢書を撰し、漢の高祖より王莽に至るまでの歷史を敍したり。後世、史記と竝べ稱して、史・漢といふ。

# 第八章　三國　晉の統一

## 東漢末の三雄

東漢の末、宦官、全く政權を握り、諸名士、多く除かれて、國政、大いに亂るるや、盜賊、各處に橫行し、群雄、また諸方に崛起せり。就中、曹操・劉備・孫權の三人を、その最も著きものとす。

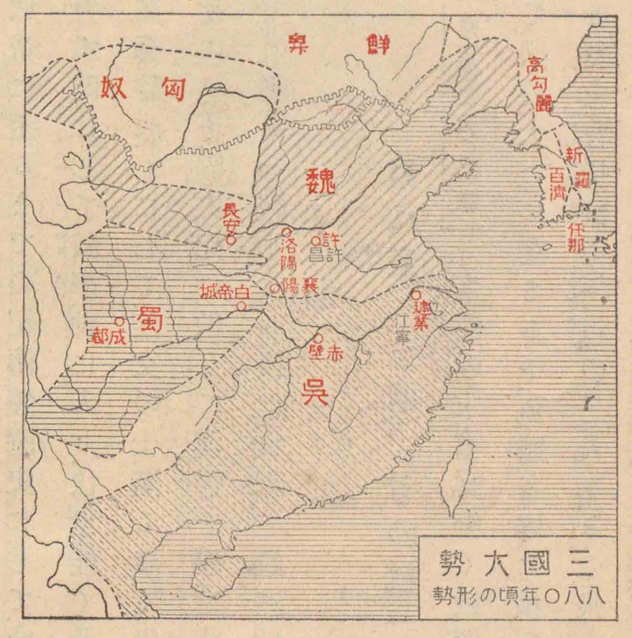
曹操中原を定む

諸葛亮は我が武内宿禰と同時代の人

劉備諸葛亮を得

孫權江南を領す

赤壁の戰




三國大勢
八八〇年頃の形勢

## 三雄の對立

曹操は、最も智略に富み、治世の能臣、亂世の姦雄といはる。操、河南に據り、獻帝（東漢最後の天子）を擁して、四方に號令し、悉く中原の地を定む。劉備は、漢の疎族（遠族）にして大志あり、漢室の興隆を圖り、曹操を倒さんとして成らず、名士諸葛亮（字は孔明）を得て、共に事を謀り、援を孫權に求む。時に、孫權、既に江南一帯を領せしが、劉備の求めに應じ、周瑜を將とし、備と力を協せて、曹操の大軍を邀へ擊たしめ、ヘ六八年（應神天皇の御代）大いにこれを赤壁（湖北省嘉魚縣の江岸）に破りぬ。戰後、劉備





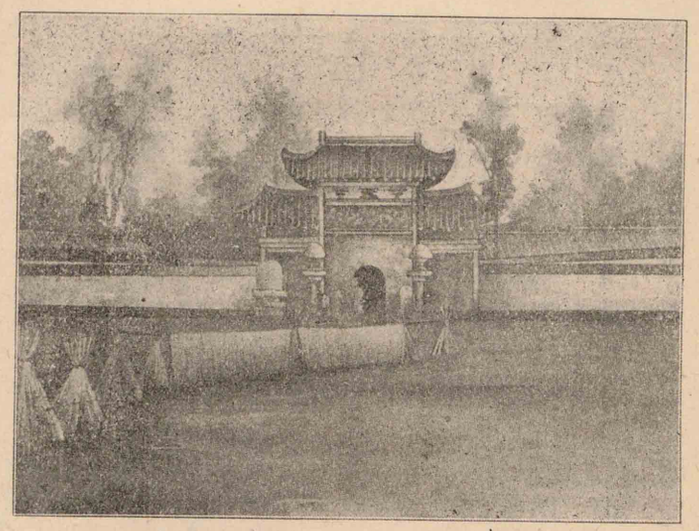
劉備蜀に據る

蜀

魏

吳

諸葛亮の廟



諸葛亮は琅邪（山東省の内）の人襄陽の隆中（襄陽城西北の山）に居す劉備の草廬を三たび顧して始めて亮を見ることを得乃ち亮答ふ天下三分の策を以て備に説く遂に備に仕へ曰く孤の明あるは猶魚の水あるが如しと君臣相得たり在南の日深く寡に稀なる所を見る川四省成都の城南に廟あり

は、西して蜀に據り、江北の曹操、江南の孫權と鼎足の勢をなしたり。

## 三國の鼎立

ヘ八〇年、曹操死し、その子曹丕、獻帝の禪を受けて、天子となり、洛陽に都して、魏國を建つ。是に於て、東漢亡ぶ。光武帝より十三世、百九十六年なり。明年、劉備、成都（四川省）に卽位して、漢の皇統をつぐ。これを蜀漢の昭烈帝とす。後八年、孫權、また帝と稱して、建業（江蘇省寧縣）に都せり。これを吳の大帝となす。これより、魏・蜀・吳の

三國、天下を分爭すること、數年に及べり。

**蜀の滅亡**　三國の中、蜀は、その地、最も偏小なりしが、劉備の寬仁と、諸葛亮の絕世の才器とによりて、よく魏・吳と對立することを得、力を漢室の興復に盡したり。既にして、劉備死するや、亮、よく後主を輔佐し、吳と親しみて、魏を伐つ。その師を出すに臨み、後主に上りたる前後二回の出師表は、共に一代の名文にして、誠忠の至情、字句の間に溢れ、讀む者をして、覺えず感泣せしむ。惜むべし、功未だ成らざるに、身、陣中に死し、蜀の勢、これより漸く振はず、九二三年（應神天皇の御代）に至り、遂に魏に滅ぼされたり。

諸葛亮の忠誠

出師表

蜀魏に滅ぼさる

魏の形勢

**晉の一統**　魏は、中原の地に據れるのみならず、三國中、領土、最も廣く、東の方朝鮮半島をも經略して、漢江以北の地を取り、また蜀を滅ぼして、勢、頗る盛んなりしが、曹操以來、多く同族のものを誅殺せしため、王室孤立し、九二五年、權臣司馬炎に奪はれて亡びたり。炎、位に

司馬炎の簒奪

即きて、晉の武帝となり、後十五年、吳を滅ぼして、天下を一統せり。漢末の分裂より、ここに至るまで、八十餘年なり。

**三國一覽**

| 國號 | 始祖 | 國都 | 代數 | 始めて帝號を稱せし年代 | 滅亡年代 |
|---|---|---|---|---|---|
| 魏 | 曹丕 | 洛陽 | 五 | 八八〇 應神天皇の御代 | 九二五 應神天皇の御代 |
| 蜀（漢） | 劉備 | 成都 | 二 | 八八一 同 | 九二三 同 |
| 吳 | 孫權 | 建業 | 四 | 八八九 同 | 九四〇 同 |

吳の滅亡

武帝の失政

八王の亂

清談の流行

胡族蜂起

## 第九章　胡族の侵入

### 晉室の壞敗と五胡十六國

晉の武帝は、帝室の助とせんと欲して、子弟を要地に分封し、吳、亡びて後は、天下無事なりとて、萬の武備を除けり。然るに、帝の死後、宗室の八王、代る代る起ちて、權を爭ひ、骨肉、相殘害して、晉室の藩屏、遂に空しくなりぬ。しかのみならず、士大夫、徒らに清談に耽りて、國事を憂ふるものなく、州郡の武備、また既に除かれければ、漢以來、塞內に雜居せる胡族、所在に蜂起し、遂に百

五胡十六國

數十年間の大亂を釀したり。その主なる種族を匈奴・鮮卑・氐（チベット族の一種）羌（チベット族の一種）羯（匈奴の別種）の五とし、前後、興亡せる國を大略十六とす。故に通例これを五胡・十六國の亂といふ。

**匈奴の勃興と晉の南渡**

五胡の中、はやく起りて有名なるを、匈奴（南匈奴の後、漢代より支那に臣屬し、劉氏と稱して、山西の北部に居る。）の劉淵とす。淵、才、文武を兼ね、山西に據りて漢王と稱し、つぎて帝と號して、平陽（山西省臨汾縣）に都し、しきりに晉の州郡を陷れたり。既にして、淵死し、子劉聰立ち、遂に晉を攻めて、これを滅ぼし、一時、江北を占領せり。晉の宗族司馬睿、乃ち建康（もとの建業）に於て、帝位に卽き、僅かに江南の地を保つ。これを東晉の元帝とす。時に九七七年（仁德天皇の御代）なり。

劉淵の興起

925

晉（西晉四世　東晉一世　一五六年）

（司馬懿）―（司馬昭）―1 武帝……4 愍帝

―□―□―東1 元帝……東11 恭帝

1080

晉の滅亡

東晉の元帝建康に卽位す

**兩趙の爭**

劉聰死後、漢に內訌起り、一族劉曜自立し、つぎて、都を長安に遷して、前趙を起す。曜の將石勒（羯人）曜と隙あり、襄國（直隸省邢臺縣）に據りて、また後趙を建つ。これより、兩趙、連りに攻戰せしが、石勒、遂に勝ち、自立して帝と稱し、江北の地、稍〻太平を致せり。

前趙

後趙

大丈夫ノ行事ヲ當レリ。曜曜落落如日月皎然タリ　石勒

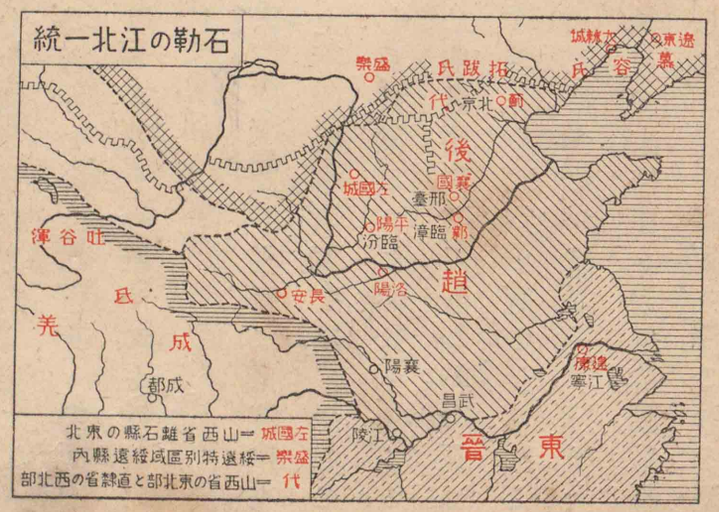
**前秦の一統**

これより先、鮮卑の慕容・拓跋二部、漸く著はれ、慕容氏は、遼西・遼東を有ちて、國を燕と號せしが、石勒死して、その國亂るや、燕王慕容儁、これに乘じて、河南に入り、鄴（河南省臨漳縣）に都して、帝と稱し、氐酋苻健は、長安に據りて、前秦國を建て、爭亂、いつ果つべしとも見えざりき。既にして、苻健の從子苻堅、前秦王となり、王猛を任用

慕容拓跋二部興起

石勒死後の爭亂

苻堅の業

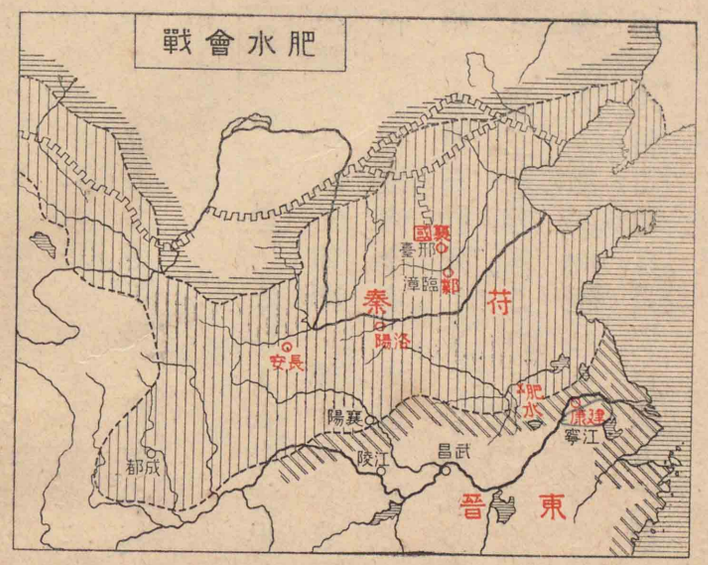


南渡以後の晉

謝玄の功

以テ吾ヲ之衆ヲ投ズルニ鞭ヲ於江ニ足ル斷ツ其流ヲ　苻堅

して、國治まり、兵強く、遂に江北を定め、東夷・西域の入貢するもの、六十餘國に及びしかば、更に進んで東晉を伐ち、江南をも併せて、以て天下を一統せんと欲したり。




**肥水の戰**

東晉は、南渡以來、上下、中原の恢復を以て念とせしが、武備、これに伴はず、加ふるに、內亂續發して、國勢、轉た振はず、ひそかに秦の寇の至らんことを憂へたり。然るに、適、苻堅、大擧して來侵すと聞き、擧朝震駭しけるが、名將謝玄等、これを肥水（安徽省壽縣の東）に邀へ擊ち、大いに秦軍を破りて、奇勝を得たり。時に一〇四三年（仁德天皇の御代）なり。苻堅、倉皇、逃げ歸り、いくほどもなく、その國は覆り、その身は、部下に殺されたり。

肥水の戰の結果

**江南に於ける宋**

東晉の滅亡と宋

肥水戰後、東晉は國勢、稍〻恢復せしが、一〇八〇年（允恭天皇の御代）その將劉裕、位を奪ひ、國を宋と名づけたり。これを宋の武帝とす。元帝の卽位より、ここに至るまで、十一世、約百年なり。

**江北に於ける後魏**

拓跋氏の江北一統

江北は、前秦の覆りし後、四分・五裂して、また全く統一する所なかりしが、鮮卑の拓跋珪、この際に起り、都を平城（西山大同縣治）に奠めて、帝位に登れり。これを後魏の太祖道武帝となす。これより、後魏、漸く强大となり、道武帝の孫太武帝に至り、遂に江北を一統したり。時に一〇九九年（允恭天皇の御代）なり。是に於て、群胡の紛爭、始めて止み、江北と江南とに、二大國對立し、所謂南北朝の世となれり。

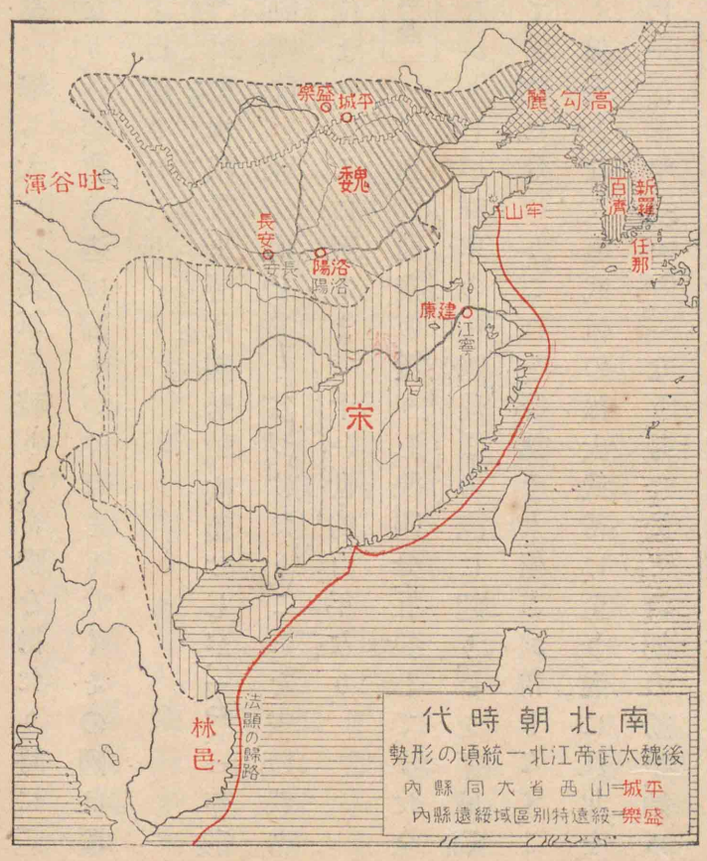
南北朝

對立約百五十年

簒弑廢立頻繁

# 第十章　南北朝　隋の統一

**南北朝の對立**　南北朝の對立は、約百五十年に亙り、その間、各、數朝の興亡あり。簒弑(サンシ)・廢立の頻りなること、前後に比なく、總計五十四帝の中、その終りを全くせしものは、僅かに二十人に過ぎざりき。



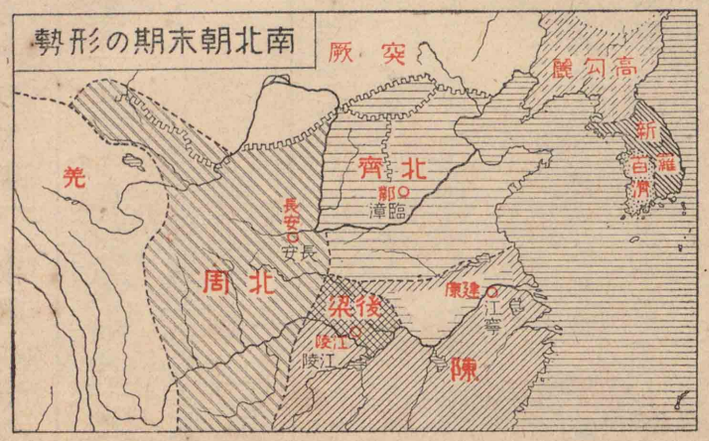





後魏の盛衰

東魏西魏
北齊北周

隋




四一年（敏達天皇の御代）外戚楊堅(ヤウケン)に奪はれたり。楊堅は、漢族の出にして、即ち

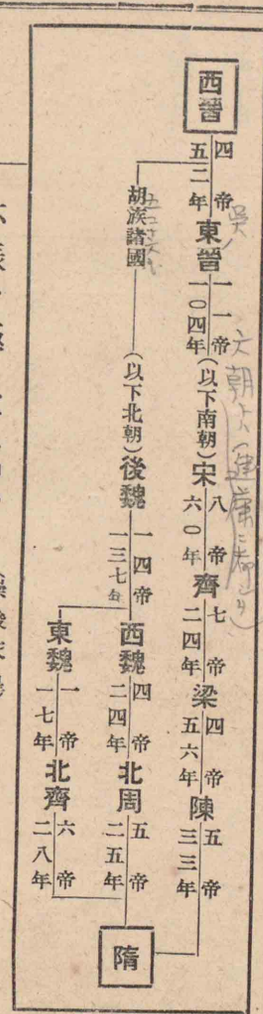
**北朝の變遷**　北朝にては、後魏の太武帝、英邁にして、文勳・武功、ともに著く、國威、內外に振へり。玄孫孝文帝に至り、專ら文治を尙びて、中國の制度・文物を模倣し、遂に都を洛陽に遷し、漢人の言語・風俗を採用し、國內、太平を致せり。されど、これより漸く奢侈・文弱に流れて、北狄固有の武强的精神を失ひ、久しからずして、東魏（鄴に都す）と西魏（長安に都す）とに分れたり。つぎて、東魏は北齊に、西魏は北周に奪はれ、北周、更に北齊を併せ、二三

宋齊梁陳

隋の文帝なり。

## 南朝の變遷

南朝は、宋の武帝以來、建康に都し、宋・齊・梁・陳の四朝、凡そ一百七十年に亙れり。その間、諸帝、多く遊惰・文弱に流れて、武備、



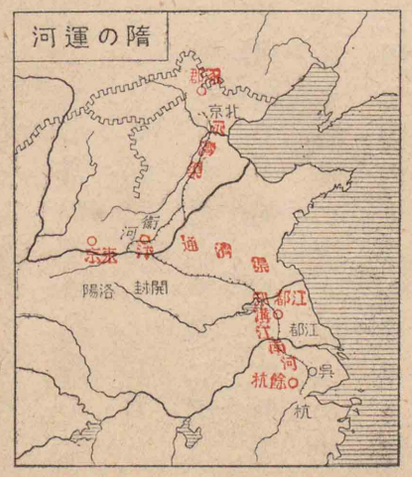

隋の文帝の一統

不振を極め、一二四九年(崇峻天皇の御代)陳、遂に隋の文帝に滅ぼされたり。是に於て、南北、始めて一に歸し、また漢族の大統一あり。

文帝の治

## 文帝の治と煬帝の豪奢

隋の文帝は、勤儉にして、人民を愛養し、よく諸般の制度を整へたり。その子煬帝、性豪華を




煬帝の豪華

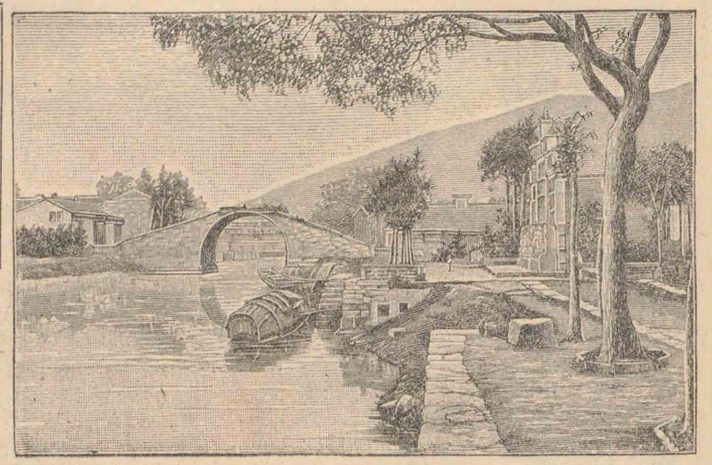
運河開鑿
長城增築
巡遊

西域諸國との交通

吳縣(蘇州)に於ける運河

外征

新羅高勾麗
百濟建國



好み、宮殿・苑囿を營みて、壯麗を極め、また大運河を開き、長城を增築し、營造・巡遊、虛歲なく、少しも民の困苦を意とせざりき。

## 煬帝の外征

煬帝、また遠略を好み、西域諸國との交通を開き、南、林邑(フランス領交趾支那)を伐ち、西、吐谷渾(鮮卑の別部にして青海の地に居る)を破り、また琉求(臺灣)を攻めて、その王を殺し、我が日本とも使聘を通じけるが、遂に大軍を發して、再三、高勾麗を征したり。

## 朝鮮半島の變遷

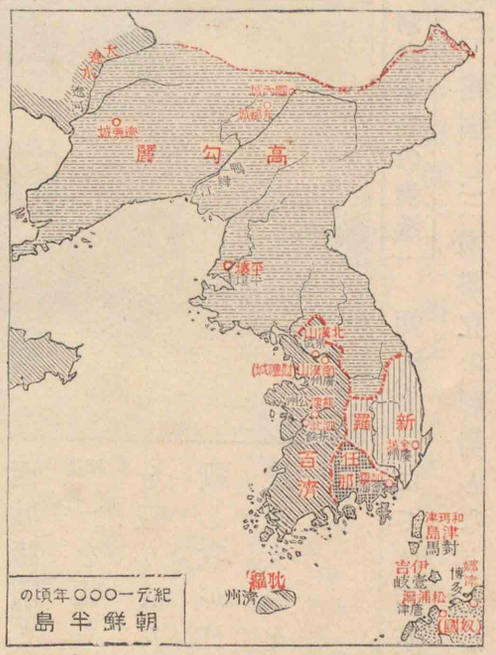
朝鮮半島にては、西漢の時、新羅・高勾麗・百濟、相つぎて建國し、三國鼎立の形勢となりしが、別に弁韓の地に加羅起り、

任那

半島に於ける我が勢力の消長

任那日本府滅亡

煬帝高勾麗征伐の失敗




また新羅のために攻め滅ぼされ、半島に於ける我が勢力、頓挫したり。

**隋の末路**　煬帝が、高勾麗を征せしは、任那滅亡後、凡そ五十年頃の事にして、三回の遠征、概ね功なく、反りて大いに國力を疲弊せしめたり。是に於て、かねて重税に惱み、苦役に泣ける人民、亂を四方に起し、豪傑、また諸處に割據して、隋國分崩せり。煬帝、江都（江蘇省揚州）に巡遊せる間に、李淵といふもの、長安を攻め陷れ、煬帝の孫を擁立したり。つぎて、煬帝、江都に弑せらるるや、李淵、隋帝の禪を受けて、帝位に卽き、唐の高祖となりたり。時に一二七八年（推古天皇の御代）なり。

我が國に入貢して、任那の國號を授けられたり。既にして、神功皇后、一擧して新羅を征服したまふや、我が威令、一時、半島に行はれしが、欽明天皇の御代に至り、任那の地、悉く新羅に沒し、日本府、





太宗の卽位は大化改新前十九年

隋（四世　三九年）
1241　1279
1 文帝 — 2 煬帝 — □ — 3 恭帝（侑）／ 4 恭帝（侗）

隋國分崩
李淵の簒奪
隋の滅亡

世民の功
世民の卽位

賢相良將

## 第十一章　唐の創業

**唐の一統**　唐の高祖卽位の初め、諸方に割據せる群雄、なほ十數人あり。乃ち子世民をして、これを討たしむ。世民、聰明勇決、識量、人に過ぎ、相つぎて、これを討平し、遂に禪を受けて、帝位に卽きたり。これ卽ち名高き唐の太宗なり。

**太宗高宗の治**　太宗は、古今に稀なる英主にして、賢相杜如晦・房玄齡・良將李靖・李勣等を用ひ、また諫臣魏徵等を顧問として、勵精、治を

貞觀の治
高宗の治

## 太宗

外征の功
突厥の起り
突厥の領域
突厥隋唐を侵す

圖り、諸制度を改良し、文教を盛んにし、武備を嚴にし、刑罰・賦稅を輕減し、所謂貞觀（當時の年號）の治は、秦・漢以來、比類なしと稱せらる。太宗死し、子高宗の世となりても、前代文武の名臣、尚多く存して、よくこれを輔佐し、國内、頗る無事なりき。

### 突厥の興亡

太宗・高宗二帝の閒は、啻に内治の美なるのみならず、外征の功、また甚だ著く、東・中・南のアジヤ諸國、概ね唐に屈したり。これよりさき、匈奴の別種突厥（トルコ）、阿爾泰（アルタイ）山南に起り、南北朝の末頃より、次第にその勢を加へ、遂に今の内外蒙古・新疆・中央アジヤ等を併せ、威令、遠く遼東よりカスピ海邊に及べり。既にして、突厥、東西に分れ、東突厥、屢〻南侵しけり。隋の文帝、一たび、これを擊退せしが、煬帝の時、またまた入寇せり。煬帝、乃ち李淵に命じて、これを防がしめしに、淵、利を失ひ、反りて、その援を借りて、隋を奪へ



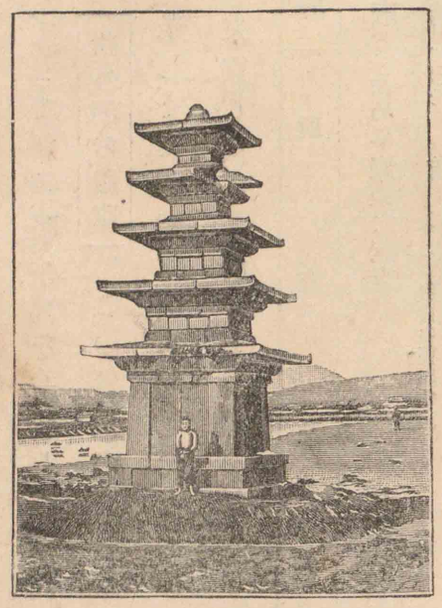


太宗高宗突厥を平ぐ
太宗の高勾麗征伐
唐平百濟碑
百濟高勾麗の滅亡

り。是に於て、突厥、頗る唐を輕んじ、頻年、唐を侵して止まざりければ、太宗は、李靖・李勣等をして東突厥を擊たしめ、その可汗（カカン）を降して、これを滅ぼし、高宗に至りて、また西突厥を平げたり。

### 朝鮮半島に於ける唐の勢力

通謀して、相共に新羅を圖りければ、新羅、援を唐に請ひたり。太宗、乃ち親ら大軍を率ゐて、高勾麗を征し、志を得ずして引き還せり。既にして、高宗立つや、新羅を援けて、百濟を攻め、我が日本の援軍に克ち、一三二三年（天智天皇の御代）遂に百濟を滅ぼし、後五年、また高勾麗を攻め取りたり。唐にては、安東都護府を平



朝鮮忠清南道扶餘縣に在り
唐將蘇定方の功を錄したるものなり

新羅の半島統一
吐蕃及び西域諸國屈服
南海諸國入貢
六都護府の設置

壤に置き、これをして、百濟・高勾麗の故地を統べしめしが、久しからずして、新羅、略〻半島を一統し、唯表面のみ唐に臣事したり。

**諸外國の屈服**　この外、太宗・高宗の時には、吐蕃を破り、印度に威を示し、また西域諸國を服したり。しかのみならず、南海諸國、また多く來貢し、實に未前の大帝國をなしければ、唐は、前後に單于・安西・安北・安東・安南・北庭の六都護府を要地に置きて、これを鎮めしめたり。我が國にても、屢〻使節・學生・學僧等を遣はして、その文明を學ばしめ、王朝時代の制度・年中行事等、多く唐風に模したり。

| 都護府 | 所在地 | 所轄區域 |
|---|---|---|
| 安東都護府 | 初め平壤後に遼東 | 百濟・高勾麗の故地 |
| 安北都護府 | 同　紇（今の外蒙古の賽因諾顏部の境内） | 外蒙古 |
| 單于都護府 | 雲中（今の山西省大同縣の西北） | 内蒙古 |
| 北庭都護府 | 庭州（今の新疆省迪化縣） | 天山北路 |
| 安西都護府 | 初め交河城（今の新疆省吐魯番）後に龜茲（今の新疆省庫車縣） | 天山南路及び中央アジヤ |
| 安南都護府 | 交州（今の東京の河内） | 南海諸國 |

我が國との關係



武后の執政
武后の廢立
武后の卽位
韋后の攝政
玄宗の卽位

**武后**

**武氏の禍**　高宗は、多病にして、親しく國務を視ること能はざりければ、皇后武氏、代りて朝政を執る。皇后、頗る權略に富み、權、人主にひとしく、高宗の死後、中宗・睿宗を廢立し、また多く唐の宗室・貴戚を殺し、遂に自立して、聖神皇帝と稱し、國號を周と改めたり。時に一三五〇年（持統天皇の御代）なり。

唐（一）

1278

高祖1 — 太宗2 — 高宗3 — 中宗4
　　睿宗5 — 玄宗6
　　肅宗7 — 代宗8 — 德宗9 — 順宗10 — 憲宗11

**韋氏の禍**　既にして、中宗、復祚するや、皇后韋氏、帝を弑して、政を專らにせしが、睿宗の子隆基、兵を起して、韋后及びその黨類を殺し、睿宗を重祚せしめ、つぎて禪を受けたり。これを玄宗とす。時に一三七

奈良賀都後二年

二年（元明天皇の御代）なり。

## 第十二章　玄宗　安史の亂

**玄宗の世**

開元の治

玄宗、即位の初め、精を勵まし、治を圖り、姚崇・宋璟等の賢相を任用して、善政、頗る多く、内外、治平を樂しみ、文學・技藝、竝び起り、所謂開元（當時の年號）の隆治を致せり。帝、また武備の忽にすべからざるを察し、邊要の地に十節度使を置き、これに兵權と民政とを委ね

節度使設置

て、四邊を鎮守せしめ、再び國威を外に張れり。されど、帝は、在位、久しきに及ぶや、漸く政に倦み、楊貴妃を寵して、驕奢に耽り、また

玄宗の晩年

林甫に任じて、賢能を排斥せしかば、開元の政、廢れて、遂に安祿山等の大亂を釀成したり。

安祿山の人物

**安祿山の反**

安祿山は、胡人なり。性狡黠にして勇略あり。巧みに楊貴妃の黨に結びて、玄宗の信任を得、平盧・范陽・河東の三節度使を





後九年惠美押勝の叛あり

安祿山の反とその南下

兼ね、ひそかに異志を蓄ふ。一四一五年（孝謙天皇の御代）祿山、遂に反し、兵を率ゐて南下し、忽ち洛陽を陷れぬ。義士顏眞卿・顏杲卿（眞卿の從兄）相つぎて兵を起し、賊を討ちて克たず、杲卿は虜にせられ、屈せずして殺されたり。

顏眞卿顏杲卿の勤王

顏眞卿の遺蹟

玄宗出奔

**玄宗の出奔と兩京の恢復**

既にして、賊軍進みて、將に國都長安に迫らんとしければ、玄宗、狼狽して蜀に奔り、位をその子肅宗に讓れり。たまたま、賊に內訌起り、祿山の子慶緒、父を殺して自立しければ、肅宗、これに乘じ、援を

顏眞卿は平原の太守なりこの圖に示せる山東省平原縣平原城の東門にして門內に顏眞卿の墓あり

郭子儀等の功

回紇

張巡許遠の忠烈

賊の内訌

また援を回紇に借る

回紇(クヲツ)等に借り、郭子儀(カクシギ)等を將として、これを討たしめ、長安及び洛陽を恢復(クワイフク)したり。回紇は、トルコ種にして、外蒙古のセレンガ河(Selenga)畔を根據とす。もと東突厥に屬したりしが、その亡びし後、漠北に據りて、唐に服事したるものなり。

**睢陽の圍**　これより先、安祿山の河南に入るや、河南の人張巡(チヤウジユン)、義兵を起して、屢〻賊を破り、つぎて睢陽(スヰヤウ)(河南省の東部)に入り、許遠(キヨエン)と共に固く守りて屈せざりき。既にして、城中、食漸く盡き、馬を食し、雀を羅し、更に鼠を掘る。將士、困弊して戰ふこと能はず、城遂に陷り、巡・遠以下、皆難に殉せり。

**大亂の平定**　既にして、安慶緒は、その將史思明(シメイ)に殺され、史思明は、官軍の將李光弼(リクワウヒツ)等に敗られ、つぎて、またその子に殺され、賊の勢、漸く蹙(チヂ)れり。肅宗の子代宗、また援を回紇に求め、一四二三年(淳仁天皇の御代)、遂に全く賊を平げ、前後九年に亙れる大亂、始めて定まりたり。これ

回紇の尊大

回紇の滅亡

中央政府の官制

地方の官制

即ち、安史の亂なり。

**回紇の衰亡**　亂後、回紇、漸く尊大となり、歲幣を貪り、婚を迫り、意に滿たざることあれば、則ち直に唐の邊境に寇せり。然るに、その素朴・剛勇の風、漸く失せて、奢侈・柔弱となり、遂にキルギス(Kirghis)(今のキルギス族の先、回紇の北に居る)に滅ぼされたり。

## 第十三章　唐の制度　文物

**官制**　唐の制度は、高祖・太宗・高宗三代の世に殆ど完成せられ、支那後世の模範たりしのみならず、我が國中古の制度も、また、これに則(ノット)る所多し。官制は、中央政府に尚書・中書・門下の三省あり、吏部・戶部・禮部・兵部・刑部・工部の六部尚書書の下にありて、政務を分掌せり。また天下を分ちて十道となし、道を州に、州を縣に分ち、州に刺史(シ)、縣に令を置きて、民政を掌らしめ、道毎に巡察使を設けて、州・縣を監察せ

| 三省 | 長官 | 職掌 | 六部 | 長官 | 職掌 |
|---|---|---|---|---|---|
| 尚書省 | 令 | 既に確定せる詔勅を天下に施行す | 吏部 | 尚書 | 官吏の進退を掌る |
| | | | 戶部 | 尚書 | 戶口の調査と租稅の徵收とを掌る |
| 中書省 | 令 | 天子の詔勅を宣奉す | 禮部 | 尚書 | 禮儀及び教育を掌る |
| | | | 兵部 | 尚書 | 軍事を掌る |
| 門下省 | 侍中 | 詔勅を審査す | 刑部 | 尚書 | 刑律を掌る |
| | | | 工部 | 尚書 | 工藝を掌る |

しむ。

**田制及び稅法**　田制は、均分の法を採り、毎年、國民の年齡を調査し、男子の年十八以上のものには、田百畝を給し、その二十畝を永業田として、子孫に傳へしめ、自餘の八十畝をば、口分田として、一代を限る。また、稅に租・庸・調の三種あり。租とは、通例百畝の田より、年毎に粟二斛を出さしむるをいひ、庸とは、丁男をして、毎年、二十日間、國家のために力役に服せしむるをいひ、調とは、鄕土の產する所に從ひて、絹・綾・絁・麻布の類を出さしむるをいふ。

永業田と口分田

租庸調

**兵制**　兵制は、京師に十六衞府を置き、地方に六百三十四の折衝（セッシヨウ）

十六衞府と六百三十四折衝府



府を設く。折衝府には、各、八百人乃至千二百人の常備兵を置き、地方を鎭し、且、毎年、交代して京師に上り、衞府の兵士となりて、宮城の守護に當る。

五刑

**刑罰**　唐代の刑名には、笞・杖・徒・流・死の五種ありて、これを五刑と名づく。

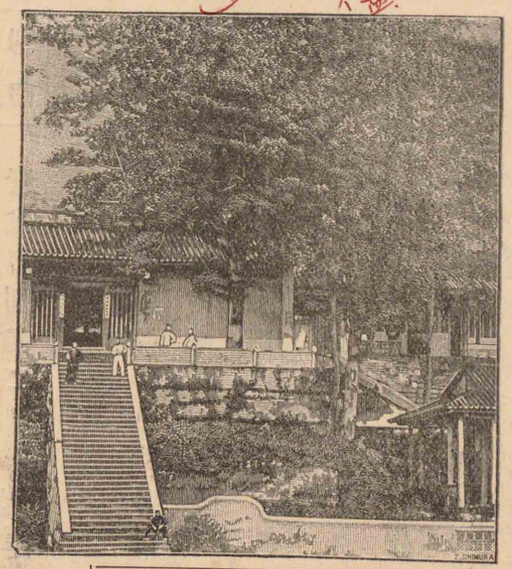
| 五刑 | 等級 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 笞 | 十 | 二十 | 三十 | 四十 | 五十 | |
| 杖 | 六十 | 七十 | 八十 | 九十 | 一百 | |
| 徒 | 一年 | 一年半 | 二年 | 二年半 | 三年 | |
| 流 | 二千里 | 二千五百里 | 三千里 | | | |
| 死 | 絞 | 斬 | | | | |

學校

**學制**　唐の世、學校の制、頗る備はり、京師に國子學・大學、その他の學校を置き、地方に州學・縣學等を設く。すべて、それらの學校に於て成業したるものを生徒といひ、學校の出身者にあらずして、州・縣の檢定を受け、これに合格したるを貢擧（コウキヨ）といふ。生徒及び貢擧は、毎年、尚書省に於てこれを考試し、その登第者をば官吏となすなり。

官吏登庸法

**儒學**　漢代訓詁の學風は、魏・晉・南北朝以來、愈〻盛んにして、註にまた註を施して、疏と稱するに至れり。唐の太宗、孔穎達等に命じて、五經の疏を作らしめ、これを正義と名づけ、官吏登庸の試驗には、必ずこれに從はしむることとしければ、學者、遂に正義以外に出づるもの、甚だ少く、唐代の儒學は、別に新見地を開くに至らずして終れり。



廣東省潮安縣に在り

韓愈の廟

**儒韓愈**（字は退之）は、當時、流行せる老・佛の教義を排して、ひたすら、儒道を擁護するに力め、稍〻儒學を振興せり。

**六朝の文學**　これより先、文學にては、晉の陶潛（字は淵明）の詩、六朝第一の譽あり。六朝とは、吳・東晉・宋・齊・梁・陳をいふ。その間、詩文には對句を用ふること行はれ、殊に文は四六駢儷の體流行して、徒らに辭句を美麗に飾ることをのみ務めたり。

韓愈と儒道

陶淵明の詩

**唐代の詩人**　唐に至り、詩賦の學、大いに興り、玄宗の時には、李白（字は太白）・杜甫（字は子美）等の大家出で、いづれも古今獨歩と稱せらる。後、韓愈と同時に白居易（字は樂天）あり、また詩文に長じ、はやく、その名を我が國人の間に知られたり。

四六駢儷の體

李白と杜甫

白居易

**唐代の文章家**　詩は、かくの如く隆盛の極に達したれども、文は、なほ六朝の餘風を存せしが、韓愈・柳宗元（字は子厚、韓愈と同時代の人）に至り、古文を唱導して、在來の陋習を一洗し、永く範を後世に垂れたり。

韓愈と柳宗元

**書畫**　書は、晉の時、王羲之・王獻之の二大家出でしより、後世、皆これを師宗とせしが、唐に至り、官吏の登庸に書法の優秀なるものを要めしかば、歐陽詢・褚遂良・顏眞卿以下、能書家、陸續輩出せり。また、繪

二王の書

唐代書畫の大家

畫は、六朝以來、佛教の隆盛に伴ひて興り、唐の吳道玄等、最も名あり。

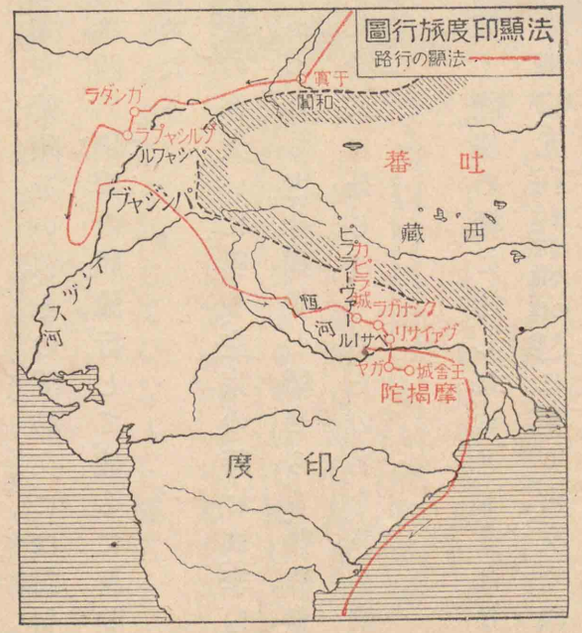
## 第十四章　宗教　南海の貿易

**六朝時代の佛教**

佛教は、東漢の時、支那に入りしより、次第に上下に行はれ、魏・晉・南北朝に至りて、全盛を極む。その間、鳩摩羅什（クマーラジーヴァ）以下、西域より來りて、宣教・譯經に力めし高僧多かりしが、また遠く印度に法を求めし支那の僧侶も少からざりき。東晉の末に渡天したる法顯（ホッケン）の如きは、その最も名高きものにて、よく萬難に堪へて、印度を歷遊し、十二年にして、始めて歸朝したり。

鳩摩羅什等來る

法顯の渡天




**唐の佛教**

後、唐に至り、有名なる玄奘（グンジャウ）あり。太宗の時、印度に入り、各地を歷遊すること十七年、經論六百餘部を得て歸り、太宗・高宗に尊信せられ、盛んに經典を譯出し、支那佛教史に一新紀元を開けり。つぎて義淨（ギジョウ）亦印度に往き、四百餘部の經典を得、二十五年を經て歸りぬ。これより、佛像・堂塔の建設、益〻多く、佛教、愈〻盛んになり、その諸派、多く我が日本にも傳はれり。然るに、武宗（玄宗七世の孫）に至り、篤く道教を信じて、甚しく佛教を迫害せしかば、その勢、頓挫したり。

玄奘の渡天

玄奘・義淨の渡天

唐末の佛教

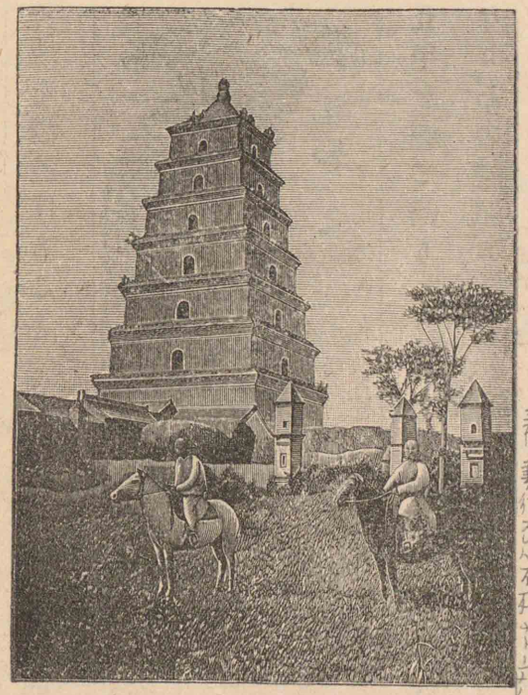
道教の由來

長安慈恩寺の大雁塔

唐代の道教

## 道教

道教は、老子の教に、神仙の説を附會して起れるものにて、東漢の末頃より、稍〻盛んなりき。唐の諸帝は、老子を以て國祖なりとし、諸州にその廟を設けしめ、また厚く道士を遇せしかば、道教の民間に及ぼせる勢力、頗る大なるものあり、武宗に至り、遂に佛教を壓倒したり。



慈恩寺は高宗が東宮に在りし時母文德皇后のために建立したるものにて玄奘も印度より歸りし後この寺に居りたり高宗の永徽三年（一三一二年孝德天皇の白雉三年）玄奘西域の卒塔婆の制に倣ひて五層の塔婆を建つこれ卽ち大雁塔の起りなりしかるにこの塔婆は磚表土心にて內部は土を以て築き外面だけ磚を張り附けたるものなりしかばいくばくならずして次第に毀損せり則天武后乃ちこれを毀ち更に西域の塔婆の制を模して七層磚築の塔婆を建てぬ今見る所の大雁塔は卽ちそれなり

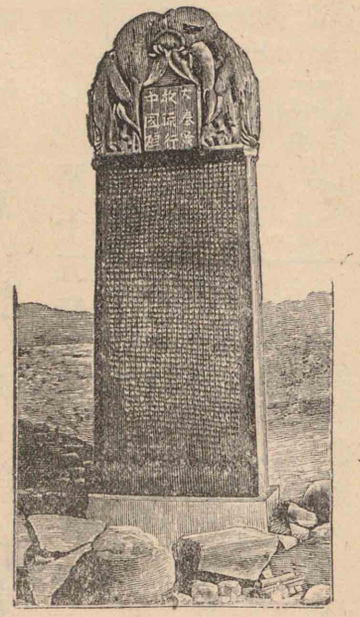




大秦景教流行中國碑

祆教景教回教の傳來

三教の衰微



この碑は明末長安の西郊なる金勝寺の庭內より發掘せしものにて唐の太宗の貞觀九年に景教が始めて長安に將來せられしよりこの碑の建設せられたる唐の德宗の建中二年に至る約百五十年間の景教流行の有樣を述ぶその建設者は長安の大秦寺の僧景淨なり大秦寺は太宗の時建てられて波斯寺といひしを玄宗の時大秦寺と改めたるなりまた金勝寺は大秦寺の廢滅せし後その空地に移轉したるものなり

## 諸宗教

唐初、國威、四方に張り、東西の交通、漸く盛んなるや、祆教・景教・回教等の諸宗教、中央アジヤより傳來せり。回教は、アラビヤのマホメットの唱へしイスラム教にして、景教は、キリスト教の一派なるネストリウス教なり。また、祆教は、上古、ペルシヤのザラツストラが創めし拜火教にして、南北朝以後、葱嶺以東に入り、唐初には、その祠堂を長安に建つるに至れり。かくの如く、諸宗派、陸續、唐に入り來りしが、武宗の佛教を壓せし時、また皆斥けられたり。

大食の勃興とその商船の東航

**南海の貿易**　唐の初め、西アジヤには、アラビヤ人の起せる大食國ありて、領域、遠くインヅス河口に及び、屢〻唐と交通し、安史の亂には、援兵をも送れり。その國人、最も活潑なる貿易を營み、商船を印度洋に浮べ、次第に航路を擴めて、支那の南海に入り、廣州（廣東省番禺縣）泉州（福建省晉江縣）杭州（浙江省杭縣）等の諸港に往來せり。唐にては、是等の地に市舶司を設けて、これを取締り、海關稅をも徵收しけり。後、唐朝及び大食、共に衰ふるに及び、東西の交通、漸く廢れたり。

當時の互市場

市舶司の設置

東西交通の衰微

## 第十五章　唐の衰亡　五代

節度使の增置と驕橫

**節度使の跋扈**　安史の亂後、節度使の數、漸く增加し、管に邊要の地のみにとどまらず、內地にも、また、これを置くに至れり。而して、是等の節度使は、皆兵馬・財政の權を委ねられしを以て、その權

唐（二）

憲宗11
- 穆宗12
  - 敬宗13
  - 文宗14
  - 武宗15
- 宣宗16
  - 懿宗17
    - 僖宗18
    - 昭宗19
      - 哀帝20

1567

憲宗の抑制

唐初の宦官

玄宗以後の宦官

朋黨の爭

財政窮乏

黃巢の亂

力、次第に重くなり、各〻驕橫・跋扈を極めたり。憲宗、その際に出で、英武の資を以て、名臣に任じ、一時、抑制の功を奏するを得しが、宦官に弑せられて、その弊根を絕つに至らざりき。

**宦官の專橫**　唐の初世、宦官は、地位、頗る卑く、勢力、微微たりき。然るに、玄宗の豪奢を極め、遊樂に耽るに及び、その數、大いに增加し、權勢、次第に朝の內外を傾け、後には禁軍を掌り、機務に參與し、天子の廢立・弑逆を恣にして憚らざるに至れり。

**唐の滅亡**　この時に當りて、朝臣等、また朋黨を作りて相爭ひ、紀綱、益〻頹廢して、唐室の衰弊、愈〻甚しく、時に英邁の天子出でて、大いに時弊を救はんと欲したることありたれど、節度使の驕橫と、宦官の專恣とは、遂に奈何ともすること能はざりき。加ふるに、財政窮乏して、誅求・聚斂至らざるなかりしかば、唐末の天下、漸く亂れて、群盜、所在に蜂起せり。就中、黃巢、最も勢を得て、諸方を攻掠し、遂に長安に入

灼レ木攻レ藪ヲ藪盡ク木焚。

宦官の族誅

朱全忠の簒奪

後梁

後唐後晉後漢後周

名教壞廢

りて、帝と稱せり。既にして、黃巢は平げられしが、賊の降將朱全忠（シュゼンチュウ）、權略あり、兵を率ゐて、長安に入り、悉く宦官を殺して、威、大いに振へり。開元以來、宦官、威福を恣にすること、殆ど二百年、ここに至りて、始めて全滅せしが、唐室も、また、やがて、朱全忠に奪はれて亡びたり。實に一五六七年（醍醐天皇延喜七年）なり。唐は、高祖よりここに至るまで、二十世・二百九十年なり。

**五代の世**　朱全忠、位に卽きて、後梁の太祖となりたれども、各地に割據せる群雄、皆帝王と稱して、これに服せず、天下は、全く統一する所なかりき。かかる形勢の間に、後梁、忽ちにして亡び、後唐・後晉・後漢・後周の四朝、相つぎて興亡せり。これを五代の世と稱し、前後、僅かに五十餘年、その君は、皆武人にして、紛亂・爭奪の激しきこと、古今に絕し、燦然たる唐の文化も、遂にその光を失ひ、名教、全く廢れて、道義、地に墜ちたり。

趙匡胤の卽位

群雄削平

趙普の輔佐

太祖

節度使權力の削減

# 第十六章　宋・遼及び西夏

**宋の太祖**　五代・五十餘年の紛亂を經て、一六二〇年（村上天皇の御代）に至り、後周の宿將趙匡胤（チョウキョウイン）、將士に推されて、帝位に卽く。これを宋の太祖とす。太祖、都を汴（ベン）（さきの大梁、河南省開封縣）に奠め、次第に群雄を削平（サクヘイ）し、僅かにその二三を殘すのみとなれり。

**太祖の政治**　唐季以來、節度使跋扈して、州縣の政を專らにし、天子の廢立をも、その手にて擅にし、騷亂、殆ど絕ゆることなかりき。太祖、深くこれを憂へ、その宿弊を一掃せんと欲し、宰相趙普（チョウフ）と謀り、漸次、文臣を以て節度使に代へ、以てその兵馬の實權を殺ぎ、また、これまで、節度使の配下にありし州・郡を收めて、朝廷に直隸せしめ、通判を置きて、民政に當

五代武斷の風革まる

らせ、別に轉運使を設けて、地方の財務を掌らしめき。是に於て、五代武斷の風革まりて、中央集權的文治、漸く行はれ、生民、始めて肩を息むることを得たれども、宋の武力の弱きことも、また實にここに萠せり。

契丹の故地

## 遼の勃興

これより先、北方に一强國興れり。これを遼といひ、契丹の建てたる國なり。契丹は、東胡の遺種にして、南北朝の頃より、部衆、漸く滋蔓し、潢河（内蒙古のラムレン河）の附近に居る。その民、未開・野蠻にして、文字なく、また貨幣の制なかりき。唐末、耶律阿保機出づるや、雄略ありて、よく遠近を從へ、一五七六年（醍醐天皇の御代、後梁時代）遂に皇帝と稱し、臨潢（潢河の上流の地）に都せり。これを契丹の太祖とす。太祖、しきりに支那の文化を輸入し、法制を定め、孔子の廟を建て、契丹文字を製する等、頗る意を其の開發に注ぎ、また屢〻兵を出して、後梁の北邊を侵し、更に東征して、渤海國を滅ぼしたり。渤海は、唐初、靺鞨の粟末部長大祚榮が建て

太祖の業

渤海滅亡



たる國にて、隱然、東方の一强國をなし、聖武天皇以來、屢〻我が國にも入貢したりしが、是に至りて亡びたり。この年、太祖死して、子太宗立ち、つぎて南伐して、後晉を滅ぼし、そのまま大梁に留まりて、國を遼と號せり。既にして、太宗は、中國の制し難きを知り、大梁を去りて北に還れり。

遼（九世　二一〇年）

1576

太祖 1 ― 太宗 2 ― 穆宗 4 ― 道宗 8 ― □ ― 天祚帝 9

□ ― 世宗 3 ― 景宗 5 ― 聖宗 6 ― 興宗 7

1785

太宗の南伐

太祖の修好

太宗の北伐

遼宋の絶好

澶州の役

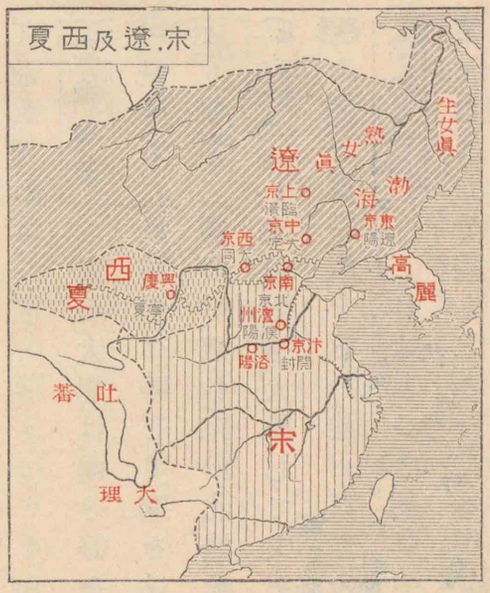
## 宋遼和戰

宋の太祖は、遼と好を修めしが、弟太宗立ち、略〻支那を一統するに及び、勢に乘じて、遼を伐ち、反りて大いに敗れたり。これより、遼・宋二國の好、破れ、宋の北邊、漸く多事なり。太宗の子眞宗の時（一六六四年、一條天皇の御代）遼の聖宗、大擧して宋を伐ち、深く内地に入り、澶州（直隸省濮縣）を圍む。眞宗、戰を厭ひ、遂に巨額の歲幣を約して、和を定めたり。

## 遼の東征

これよりさき、朝鮮半島にては、新羅の國政、漸く亂れて、またまた分裂したり。一五七八年（醍醐天皇の御代、後梁時代）に至り、王建といふも

高麗建國
聖宗高麗を降す
遼の版圖
仁宗の治
名臣及び大儒




の、王位に登りて、高麗を建て、後十八年、遂に半島を一統し、疆域、直に遼と相接せり。遼の太宗は、使を遣はして、高麗を招きしが、高麗、これを斥けて應ぜず、かへりて、支那に入貢せしかば、澶州の役後、聖宗、屢〻師を出し、遂にこれを攻め降して、臣と稱せしめたり。是に於て、遼の版圖、東、日本海より、西、天山に及び、その勢、益〻宋を壓したり。

**宋と西夏との關係**

宋は、眞宗の子仁宗に至り、よく民を愛し、賢人を用ひ、學術を奬勵しければ、名臣に韓琦・范仲淹・富弼・歐陽修・司馬光等あり、名儒に周敦頤・邵雍・張載・程顥・程頤等顯はれしが、武功に至り





西夏の侵寇
宋遼に對する歲幣を增す
宋歲幣を約して西夏と和す
神宗の志
神宗
王安石の新法
この頃後三條天皇の改革あり

ては、殆ど觀るべきものなく、かへりて對外的屈辱を重ねたり。この頃、西夏（別吐蕃の）の李元昊、河西の地を取り、一六九八年（後朱雀天皇の御代）興慶（甘肅省寧夏縣）に都して、大夏皇帝と稱し、頻りに宋の西邊を侵しき。遼の興宗は、宋の西夏に苦しめらるるを見、これに乘じて、南侵の勢を示しければ、宋は歲幣を增して、遼との和親をつづけ、更にまた歲幣を西夏に約して、これと和したり。

**神宗の改革**

仁宗の後、一代を經て、神宗に至り、深く國威の揚らざるを慨し、王安石に任じて、富國・强兵の策を講ぜしむ。安石、乃ち青苗・均輸・市易・保甲・保馬等の新法を定めたり。是等の新法は、悉く排斥すべ

諸名士の新法反對

きものにはあらざりしかど、その目的、專ら富國と强兵とにありて、人民よりこれを見れば、かへりて、不便なる所、少からざりしを以て、司馬光・蘇軾（東坡）程顥以下諸名士、多くこれを非とせり。然れども、安石等、固く執りて動かず、益〻新法の厲行を力めたり。

宋遼の衰運

1620

宋（九世　一六八年）

□ 1 太祖
□ 2 太宗
□ 3 眞宗
□ 4 仁宗
□ 5 英宗
□ 6 神宗
□ 7 哲宗
□ 8 徽宗
□ 9 欽宗

1787

黨爭激烈

徽宗の失政

天祚帝の暗弱

の世にも、新法・舊法兩派の黨爭、頗る激しく、政局に當るもの、轉轉交迭し、施政の方針、これがために一貫せず、民益〻苦しみて、國愈〻衰へぬ。加ふるに、徽宗、暗弱にして、治國の才なく、性奢侈を好みて、失政多かりければ、宋の運命、益〻傾きたり。この時に當り、遼も、また、國勢、漸く衰へ、天祚帝、位に在りて、頽勢を挽回することと能はず、宋と共に益〻衰へたり。





女眞の開化

金の强大

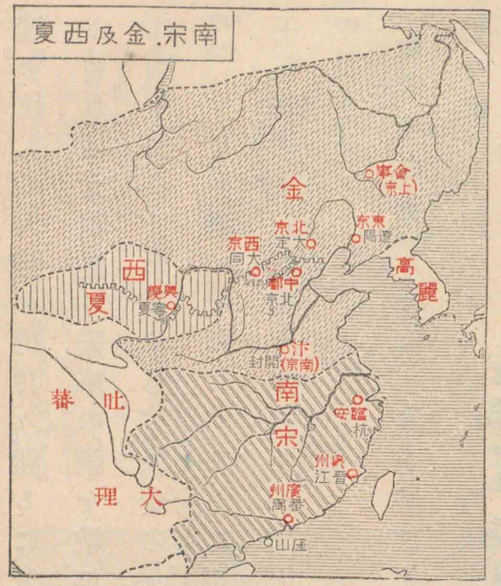
阿骨打の建國

宋金の盟約

# 第十七章　南宋及び金

## 金の勃興

宋遼、共に衰へし頃、女眞族、新に滿洲に勃興せり。女眞は、古の靺鞨にして、その民、半ば地下を掘りたる家屋に住し、幼より騎射を習ひ、艱苦に堪へ、戰鬪に强し。遼の時、一たび、これに隷屬せしが、部長阿骨打、天祚帝が政を失ふに乘じ、兵を起して、その軍を破り、一七一五年（鳥羽天皇の御代、宋の徽宗の時）大金皇帝と稱したり。これ卽ち金の太祖なり。太祖、屢〻遼を破りて、その諸州を取り、勢、漸く强大に赴けり。




## 遼の滅亡

宋の徽宗は、金國興れりと聞き、使を遣はして、南北より遼を夾み擊たんことを謀らしむ。太祖、これに應じ、直に

遼を伐ちて、大勝を得たり。然るに、宋は、力弱くして、克つこと能はざりければ、太祖、更に宋軍の請を納れ、また遼軍を擊ち破れり。天祚帝は、國を失ひて出奔せしが、後、金の兵に獲られたり。時に一七八五年（崇德天皇の御代）なり。遼は、建國よりここに至るまで、九世、凡そ二百十年、その王族耶律大石、餘衆を率ゐて西走し、中央アジヤに入りて、西遼を建てたり。

金遼を滅ぼす

西遼の建國

**金宋の交戰**

金の南侵

金、既に遼を滅ぼし、宋と接壤の國となるや、その弱勢を侮り、太祖の子太宗に至り、大擧して南下せり。徽宗、戰はずして、位を子欽宗に讓り、膝を屈して、和を請ひ、一旦、和議成れり。然るに、宋が和約履行の誠意を闕きたるために、金、再び侵入して、汴京を陷れ、徽宗・欽宗及び多くの王族を捕へて、遠く北方に伴ひ去りぬ。實に一七八七年（崇德天皇の御代）なり。宋人、これを靖康（當時の年號）の變といふ。

靖康の變

**宋室の南渡**

高宗の卽位

金軍、北に去るや、欽宗の弟高宗、卽位し、金の鋭鋒を



臨安奠都

避けて、次第に南に移り、都を臨安（浙江省杭縣）に奠む。これを宋室の南渡といひ、高宗以後を南宋と稱す。

南宋（九世　一五三年）

太祖
太宗……徽宗—高宗[1]
……孝宗[2]—光宗[3]—寧宗[4]
……理宗[5]—□[6]—度宗
……端宗[8]
……恭宗[7]
……帝昺[9]

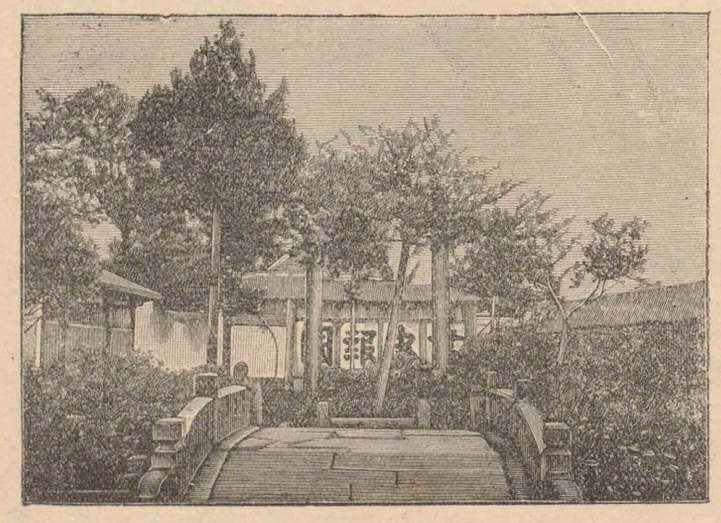
1939

文臣不愛錢。武臣不惜死。天下太平矣。　岳飛

岳飛

岳飛の廟

岳飛深く兵法に通じ且膂力あり忠義天性に出づ金人畏れて撼レ山易。撼ニ岳家軍一難といひきといふ秦檜のために捕へられて獄に下さるるや獄吏その罪を詰る岳飛乃ち衣を裂きてその背を示す涅して盡忠報國の四大字あり視るもの惻動す獄に在ること二日にして殺されたり年三十九なり



浙江省杭縣に在り

この頃源平の合戰あり

主戰論者

不名譽の講和

南北間の小康

韓侂胄專權

北伐の失敗

**南宋和戰の議**　當時、江北の地は、既に概ね金に沒して、宋の勢、愈〻蹙りしが、宋には、なほ岳飛以下名將少からず、いづれも金と決戰すべきを主張したり。然るに、高宗の怯懦と朝臣の優柔とにより、和戰の議、久しく決せず、結局、朝議、秦檜の言に動かされ、忠勇無雙の岳飛を殺して、不名譽の講和をなし、以て一時の安を偷めり。

**宋金の衰微**　この後、暫くにして、金には、世宗立ち、宋には、孝宗位に在りて、共に賢明なり。南北の間、小康を得て、民、堵に安んずること、およそ三十年なりしが、世宗死後、金の勢、漸く傾き、宋にても、寧宗の時、韓侂胄、事を用ひ、大儒朱熹以下の賢臣を斥けて、政を亂し、やがて、金を伐ちて大敗し、國運、益〻傾けり。金は、この戰には勝ちたれども、また圖南の勇氣なく、宋と共に、國勢、轉た落日の觀を呈しき。

**金**（九世　一二〇年）

1775

完顏烏古迺（ワンヤンウグナイ）
- 1 太祖
- 2 太宗
- 3 熙宗
- 4 廢帝
- 5 世宗
- 6 章宗
- 7 廢帝
- 8 宣宗
- 9 哀宗

1894



蒙古の勃興

理學の發達

朱熹筆蹟

周敦頤と邵雍

二程

張載

朱熹

この時に當り、蒙古民族、北方に勃興したり。

## 第十八章　宋代の文物

**宋の儒學**　儒學は、漢より唐に亙りて、訓詁に流れ、註疏を事とせしが、宋代に至り、佛教等の影響を受けて、學風、大いに改まり、字句の註釋よりは、寧ろ深く理論を研究して、所謂理學を大成せり。この新學風の盛んになれるは、仁宗の時にして、周敦頤・邵雍の二人、實にこれが先驅をなす。二程即ち程顥・程頤の兄弟は、共に敦頤門下の高足なり、また、二程の講友に張載あり。二程と相對して、盛名を競ふ。宋室南渡の後は、理學、益〻盛んになり、朱熹に至りて、先輩諸儒の所說を集輯參酌し、以て宋學を大成せ

陸九淵

しが、宋末に至り陸九淵出で、朱熹の說に對立して、別に一家の學を開けり。以上周敦頤・二程・張載・朱熹の五人を宋の五子といふ。

文人

**宋代理學大家一覽**

| 姓名 | 字 | 號 |
|---|---|---|
| 周敦頤 | 茂叔 | 濂溪 |
| 邵雍 | 堯夫 | 康節 |
| 程顥 | 伯淳 | 明道 |
| 程頤 | 正叔 | 伊川 |
| 張載 | 子厚 | 橫渠 |
| 朱熹 | 元晦 | 晦菴 |
| 陸九淵 | 子靜 | 象山 |

**文學**　文章は、五代に衰へしを、宋の初めに至り、歐陽修(廬陵)古文を復興して、宋代の文章に新生面を開けり。これより、蘇洵(老泉)・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石等、相つぎて出で、いづれも一代の大家として、世に重んぜらる。歐陽修・蘇軾は、また非凡の詩才を有し、宋代詩人の巨擘たり。史學も、大いに發達し、司馬光の資治通鑑の如きは、敍事精確、文章、また壯嚴を以て著はる。

詩人
史學
書の大家

**書畫**　書には、米芾・蘇軾の二人、雋逸・輕妙の趣ありて、群に秀で、繪畫には、徽宗、自ら丹青に巧みにして、その奬勵・保護に努め、宣和時代(宣和は徽宗の年號)の美術をして、異彩を放たしめき。





蘇軾筆蹟

宣和時代

禪宗の流行

**佛教**　宋代には、禪宗、最も盛んに行はれ、儒者は、概ね佛說を修めて、自己の研究を助けたり。陸九淵の如きは、その著きものなりといはる。我が國にても、また、その影響を蒙りて、鎌倉時代の武人は、多く禪宗に歸依したりき。

月白風清

## 概括

中古期は、四四〇年、秦の一統より、一八六〇年頃、卽ち南宋の中世頃に至る、約一千四百年間にして、我が孝靈天皇より、土御門天皇に至る時代に當れり。支那にては、漢族の勢力、益〻四方に擴がり、塞外諸族との競爭・衝突、隨ひて激甚となり、漢族は、屢〻對外的優勢を示し、漢唐二代の如き大發展をなしたり。この期間には、東西兩洋の交通、漸く開けて、佛教、その他の外教東流し、前期に起りたる儒教も、また概して隆盛に赴き、支那の文化は、益〻進

歩し南海諸國及び朝鮮日本等皆盛んに支那と交通して、その文化を傳へたり。



古

| | | |
|---|---|---|
| 漢 685—88 | 七三三 | （景行） |
| | 七四九 | 明帝北匈奴を伐つ（景行） |
| | 七五一 | 和帝北匈奴を破る（景行） |
| | 八二六 | 和帝班超を西域都護となす（成務） |
| | 八六八 | 大秦國との交通開く（應神） |
| | 八八〇 | 赤壁の戰（應神） |
| | | 東漢亡ぶ（應神） |
| 三國 880-940 | 八八〇 | 曹丕魏國を建つ（應神） |
| | 八八一 | 蜀漢の劉備皇帝と稱す（應神） |
| | 八八九 | 吳の孫權帝と稱す（應神） |
| | 九二五 | 司馬炎魏の位を奪ひて帝となる（應神） |
| | 九四〇 | 晉、吳を滅ぼして天下を一統す（應神） |
| 西晉 925-976 | 九六四 | 匈奴の劉淵漢王と稱す（應神） |
| | 九七六 | 漢晉を滅ぼす（仁德） |
| 東晉 977-1080 | 九七七 | 東晉の元帝位に卽く（仁德） |
| | 九九〇 | 後趙の石勒帝と稱す（仁德） |
| | 一〇四三 | 肥水の戰（仁德） |
| | 一〇八〇 | 劉裕東晉の位を奪ひて宋の武帝となる（允恭） |
| 南北朝 1099——1249 | 一〇九九 | 後魏江北を一統す（允恭） |
| | 一一三九 | 宋亡び齊代る（雄略） |
| | 一一六二 | 齊亡び梁代る（武烈） |
| | 一一九四 | 後魏の東西分裂（安閑） |
| | 二一〇 | 東魏亡び北齊起る（欽明） |
| | 二一七 | 梁亡び陳代る。西魏亡び北周起る（欽明） |
| | 二二二 | 新羅、任那の日本府を滅ぼす（敏達） |
| | 二三七 | 北周、北齊を滅ぼし江北を一統す（敏達） |
| | 二四一 | 北周楊堅に奪はる（崇峻） |
| | 二四九 | 隋、陳を滅ぼし南北始めて一統す（崇峻） |

古

| | | |
|---|---|---|
| 五代 1567——1620 | 一五七六 | 朱全忠帝位に卽く（醍醐） |
| | 一五七八 | 契丹の耶律阿保機帝と稱す（醍醐） |
| | 一五八三 | 王建の高麗建國（醍醐） |
| | 一五八六 | 後梁亡び後唐起る（醍醐） |
| | 一五九六 | 耶律阿保機渤海を滅ぼす（醍醐） |
| | 一六〇六 | 後唐亡び後晉起る（朱雀） |
| | 一六〇七 | 契丹の太宗後晉を滅ぼす（村上） |
| | 一六一〇 | 後漢起る（村上） |
| | 一六二〇 | 後周、後漢に代る（村上） |
| | | 後周亡ぶ（村上） |
| 北宋 1620——1787 | 一六二〇 | 趙匡胤帝位に卽き宋の太祖となる（村上） |
| | 一六三九 | 太宗の一統。太宗遼を伐ちて敗る（圓融） |
| | 一六六四 | 澶州の役（一條） |
| | 一六七〇 | 遼の聖宗高麗を伐つ（一條） |
| | 一六九八 | 仁宗の時李元昊大夏皇帝と稱す（後朱雀） |
| | 一七二九 | 神宗王安石を用ふ（後三條） |
| | 一七七五 | 徽宗の時女眞の阿骨打帝と稱す（鳥羽） |
| | 一七八五 | 遼亡ぶ（崇德） |
| | 一七八七 | 靖康の變（崇德） |
| 南宋 1787-1939 | 一七八七 | 高宗卽位（崇德） |
| | 一八〇一 | 宋金と和す（崇德） |
| | 一八五六 | 韓侂胄權を專らにし朱熹等を斥く（後鳥羽） |

# 年表（二）

年代は皇紀に據る

| 時代 | 王朝 | 年代（天皇） | 重なる事蹟 |
|---|---|---|---|
| 中古 | 秦 440—455 | 四四〇（孝靈） | 秦の統一 |
| | | 四四六（孝靈） | 匈奴征伐 |
| | | 四四七（孝元） | 南越を平ぐ |
| | | 四四八（孝元） | 始皇帝書を焚く |
| | | 四四九（孝元） | 儒生を坑殺す |
| | | 四五二（孝元） | 陳勝吳廣起る。項籍劉邦等兵を起す |
| | | 四五五（孝元） | 秦亡ぶ。鴻門の會 |
| | 西漢 459—668 | 四五九（孝元） | 垓下の戰。劉邦帝位に即く |
| | | 四六七（孝元） | 衛滿朝鮮王となる |
| | | 四八一（開化） | 諸呂亂を謀り陳平周勃これを平ぐ |
| | | 五〇七（開化） | 景帝吳楚七國の亂を平ぐ |
| | | 五二三（開化） | 張騫西域に使す |
| | | 五四〇（開化） | 武帝匈奴を伐つ |
| | | 五五三（開化） | 武帝朝鮮を滅ぼす |
| | | 六〇一（崇神） | 宣帝西域都護を置く |
| | | 六〇四（崇神） | 新羅建國 |
| | | 六二四（崇神） | 高勾麗建國 |
| | | 六四三（垂仁） | 百濟建國 |
| | | 六六八（垂仁） | 王莽の簒立 |
| | 東漢 685—880 | 六八五（垂仁） | 劉秀帝位に即く |
| | | 七〇〇頃（垂仁） | 大月氏の迦膩色迦王出づ |
| | | 七二七（垂仁） | 明帝の時蔡愔大月氏より佛法を求めて歸る |
| | | 七三三（景行） | 明帝北匈奴を伐つ |
| | | 七四九（景行） | 和帝北匈奴を破る |
| | | 七五一（景行） | 和帝班超を西域都護となす |
| | | 八二六（成務） | 大秦國との交通開く |
| | | 八六八（應神） | 赤壁の戰 |
| | | 八八〇（應神） | 東漢亡ぶ |
| | 三國 880-940 | 八八〇（應神） | 曹丕魏國を建つ |
| | | 八八一（應神） | 蜀漢の劉備皇帝と稱す |
| | | 八八九（應神） | 吳の孫權帝と稱す |
| | | 九二五（應神） | 司馬炎魏の位を奪ひて帝となる |
| | | 九四〇（應神） | 晉、吳を滅ぼして天下を一統す |
| | 西晉 925-976 | 九六四（應神） | 匈奴の劉淵漢王と稱す |
| | | 九七六（仁德） | 漢晉を滅ぼす |
| | 東晉 977-1080 | 九七七（仁德） | 東晉の元帝位に即く |
| | | 九九〇（仁德） | 後趙の石勒帝と稱す |
| | | 一〇四三（仁德） | 肥水の戰 |
| | | 一〇八〇（允恭） | 劉裕東晉の位を奪ひて宋の武帝となる |

| 時代 | 王朝 | 年代（天皇） | 重なる事蹟 |
|---|---|---|---|
| 中古 | 隋 1241-1278 | 一二六七（推古） | 煬帝の時日本の使節小野妹子來る |
| | | 一二七一（推古） | 煬帝の高勾麗親征 |
| | | 一二七三（推古） | 高勾麗再征 |
| | | 一二七四（推古） | また高勾麗を征す |
| | | 一二七九（推古） | 隋亡ぶ |
| | 唐 1278—1567 | 一二七八（推古） | 李淵帝位に即きて唐の高祖となる |
| | | 一二八九（舒明） | 太宗の時玄奘印度に行く |
| | | 一二九〇（舒明） | 太宗の時東突厥を滅ぼす |
| | | 一二九一（舒明） | 祆教唐に入る |
| | | 一二九五（舒明） | 景教唐に入る |
| | | 一三〇四（皇極） | 太宗の高勾麗征伐 |
| | | 一三一一（孝德） | 高宗の時大食來り通ず |
| | | 一三一七（齊明） | 高宗の西突厥討平 |
| | | 一三二三（天智） | 高宗百濟を滅ぼす |
| | | 一三二八（天智） | 高宗高勾麗を滅ぼす |
| | | 一三三一（持統） | 高宗の時義淨印度に行く |
| | | 一三五〇（元明） | 武后帝位に即き國を周と號す |
| | | 一三七三（孝謙） | 大祚榮渤海國を建つ |
| | | 一四一五（仁明） | 玄宗の時安祿山反す |
| | | 一五〇五（仁明） | 武宗道教以外の宗教を禁ず |
| | | 一五三五（清和） | 黃巢起る |
| | | 一五六七（醍醐） | 唐亡ぶ |
| | 五代 1567—1620 | 一五六七（醍醐） | 朱全忠帝位に即く |
| | | 一五七六（醍醐） | 契丹の耶律阿保機帝と稱す |
| | | 一五七八（醍醐） | 王建の高麗建國 |
| | | 一五八三（醍醐） | 後梁亡び後唐起る |
| | | 一五八六（醍醐） | 耶律阿保機渤海を滅ぼす |
| | | 一五九六（朱雀） | 後唐亡び後晉起る |
| | | 一六〇六（村上） | 契丹の太宗後晉を滅ぼす |
| | | 一六〇七（村上） | 後漢起る |
| | | 一六一〇（村上） | 後周、後漢に代る |
| | | 一六二〇（村上） | 後周亡ぶ |
| | 北宋 1620—1787 | 一六二〇（村上） | 趙匡胤帝位に即き宋の太祖となる |
| | | 一六三九（圓融） | 太宗の一統。太宗遼を伐ちて敗る |
| | | 一六六四（一條） | 澶州の役 |
| | | 一六七〇（一條） | 遼の聖宗高麗を伐つ |
| | | 一六九八（後朱雀） | 仁宗の時李元昊大夏皇帝と稱す |
| | | 一七二九（後三條） | 神宗王安石を用ふ |
| | | 一七七五（鳥羽） | 徽宗の時女眞の阿骨打帝と稱す |
| | | 一七八五（崇德） | 遼亡ぶ |
| | | 一七八七（崇德） | 靖康の變 |
| | 南宋 1187-1239 | 一七八七（崇德） | 高宗即位 |
| | | 一八〇一（崇德） | 宋金と和す |

# 年表（二）

年代は皇紀に據る

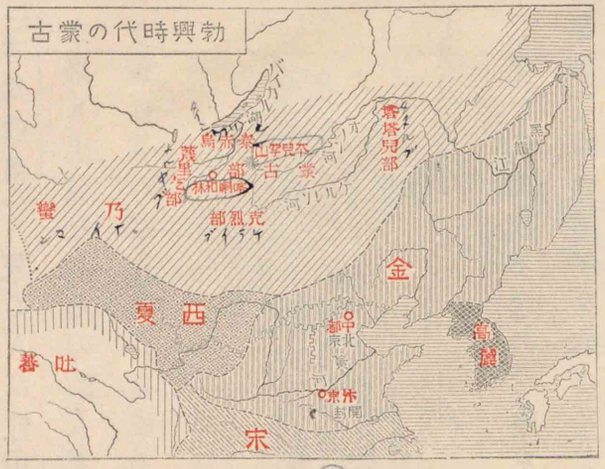
| 時代 | 王朝 | 年代（天皇） | 重なる事蹟 |
|---|---|---|---|
| 中古 | 秦 440—455 | 四四〇（孝靈） | 秦の統一 |
| | | 四四六（孝靈） | 匈奴征伐 |
| | | 四四七（孝元） | 南越を平ぐ |
| | | 四四八（孝元） | 始皇帝書を焚く |
| | | 四四九（孝元） | 儒生を坑殺す |
| | | 四五二（孝元） | 陳勝吳廣起る。項籍劉邦等兵を起す |
| | | 四五五（孝元） | 秦亡ぶ。鴻門の會 |
| | 西漢 459—668 | 四五九（孝元） | 垓下の戰。劉邦帝位に卽く |
| | | 四六七（孝元） | 衞滿朝鮮王となる |
| | | 四八一（開化） | 諸呂亂を謀り陳平周勃これを平ぐ |
| | | 五〇七（開化） | 景帝吳楚七國の亂を平ぐ |
| | | 五二三（開化） | 張騫西域に使す |
| | | 五四〇（開化） | 武帝匈奴を伐つ |
| | | 五五三（開化） | 武帝朝鮮を滅ぼす |
| | | 六〇一（崇神） | 宣帝西域都護を置く |
| | | 六〇四（崇神） | 新羅建國 |
| | | 六二四（崇神） | 高勾麗建國 |
| | | 六四三（垂仁） | 百濟建國 |
| | | 六六八（垂仁） | 王莽の簒立 |
| | 東漢 685—880 | 六八五（垂仁） | 劉秀帝位に卽く |
| | | 七〇〇頃（垂仁） | 大月氏の迦膩色迦王出づ |
| | | 七二七（垂仁） | 明帝の時蔡愔大月氏より佛法を求めて歸る |
| | | 七三三（景行） | 明帝北匈奴を伐つ |
| | | 七四九（景行） | 和帝北匈奴を破る |
| | | 七五一（景行） | 和帝班超を西域都護となす |
| | | 八二六（成務） | 大秦國との交通開く |
| | | 八六八（應神） | 赤壁の戰 |
| | | 八八〇（應神） | 東漢亡ぶ |
| | 三國 880-940 | 八八一（應神） | 曹丕魏國を建つ |
| | | 八八九（應神） | 蜀漢の劉備皇帝と稱す |
| | | 九二五（應神） | 吳の孫權帝と稱す |
| | | 九四〇（應神） | 司馬炎魏の位を奪ひて帝となる |
| | | | 晉、吳を滅ぼして天下を一統す |
| | 西晉 925-976 | 九六四（應神） | 匈奴の劉淵漢王と稱す |
| | | 九七六（仁德） | 漢晉を滅ぼす |
| | 東晉 977-1080 | 九七七（仁德） | 東晉の元帝位に卽く |
| | | 九九〇（仁德） | 後趙の石勒帝と稱す |
| | | 一〇四三（仁德） | 肥水の戰 |
| | | 一〇八〇（允恭） | 劉裕東晉の位を奪ひて宋の武帝となる |
| | 南北朝 1099—1249 | 一〇九九（允恭） | 後魏江北を一統す |
| | | 一一三九（雄略） | 宋亡び齊代る |
| | | 一一六二（武烈） | 齊亡び梁代る |
| | | 一一九四（安閑） | 後魏の東西分裂 |
| | | 一二一〇（欽明） | 東魏亡び北齊起る |
| | | 一二一七（欽明） | 梁亡び陳代る。西魏亡び北周起る |
| | | 一二二二（欽明） | 新羅、任那の日本府を滅ぼす |
| | | 一二三七（敏達） | 北周、北齊を滅ぼし江北を一統す |
| | | 一二四一（敏達） | 北周楊堅に奪はる |
| | | 一二四九（崇峻） | 隋、陳を滅ぼし南北始めて一統す |

| 時代 | 王朝 | 年代（天皇） | 重なる事蹟 |
|---|---|---|---|
| 中古 | 隋 1241-1278 | 一二六七（推古） | 煬帝の時日本の使節小野妹子來る |
| | | 一二七一（推古） | 煬帝の高勾麗親征 |
| | | 一二七三（推古） | 高勾麗再征 |
| | | 一二七四（推古） | また高勾麗を征す |
| | | 一二七九（推古） | 隋亡ぶ |
| | 唐 1278—1567 | 一二七八（推古） | 李淵帝位に卽きて唐の高祖となる |
| | | 一二八九（舒明） | 太宗の時玄奘印度に行く |
| | | 一二九〇（舒明） | 太宗の時東突厥を滅ぼす |
| | | 一二九一（舒明） | 祆教唐に入る |
| | | 一二九五（皇極） | 景教唐に入る |
| | | 一三〇四（孝德） | 太宗の高勾麗征伐 |
| | | 一三一一（齊明） | 高宗の時大食來り通ず |
| | | 一三一七（齊明） | 高宗の西突厥討平 |
| | | 一三二三（天智） | 高宗百濟を滅ぼす |
| | | 一三二八（天智） | 高宗高勾麗を滅ぼす |
| | | 一三三一（天智） | 高宗の時義淨印度に行く |
| | | 一三五〇（持統） | 武后帝位に卽き國を周と號す |
| | | 一三七三（元明） | 大祚榮渤海國を建つ |
| | | 一四一五（孝謙） | 玄宗の時安祿山反す |
| | | 一五〇五（仁明） | 武宗道教以外の宗教を禁ず |
| | | 一五三五（清和） | 黃巢起る |
| | | 一五六七（醍醐） | 唐亡ぶ |
| | 五代 1567—1620 | 一五六七（醍醐） | 朱全忠帝位に卽く |
| | | 一五七六（醍醐） | 契丹の耶律阿保機帝と稱す |
| | | 一五七八（醍醐） | 王建の高麗建國 |
| | | 一五八三（醍醐） | 後梁亡び後唐起る |
| | | 一五八六（醍醐） | 耶律阿保機渤海を滅ぼす |
| | | 一五九六（朱雀） | 後唐亡び後晉起る |
| | | 一六〇六（村上） | 契丹の太宗後晉を滅ぼす |
| | | 一六〇七（村上） | 後漢起る |
| | | 一六一〇（村上） | 後周、後漢に代る |
| | | 一六二〇（村上） | 後周亡ぶ |
| | 北宋 1620—1787 | 一六二〇（村上） | 趙匡胤帝位に卽き宋の太祖となる |
| | | 一六三九（圓融） | 太宗の一統。太宗遼を伐ちて敗る |
| | | 一六六四（一條） | 澶州の役 |
| | | 一六七〇（一條） | 遼の聖宗高麗を伐つ |
| | | 一六九八（後朱雀） | 仁宗の時李元昊大夏皇帝と稱す |
| | | 一七二九（後三條） | 神宗王安石を用ふ |
| | | 一七七五（鳥羽） | 徽宗の時女眞の阿骨打帝と稱す |
| | | 一七八五（崇德） | 遼亡ぶ |
| | | 一七八七（崇德） | 靖康の變 |
| | 南宋 1787-1939 | 一七八七（崇德） | 高宗卽位 |
| | | 一八〇一（崇德） | 宋金と和す |
| | | 一八五六（後鳥羽） | 韓侂胄權を專らにし朱熹等を斥く |

前三年源實朝將軍となる

成吉思汗即位

蒙古の故地




# 第三篇　近・古

## 第一章　蒙古の勃興

八三頁三行ノ

### 蒙古の勃興

蒙古は、もと斡難・怯綠連兩河の源なる不兒罕山（今の肯特山の一支脈）附近に遊牧せる一種族にして、世世、遼・金に隷屬せしが、宋・金、共に衰へし頃、鐵木眞といふ豪傑出で、深沈にして大略に富み、兵を用ふること神の如く、しきりに近傍の諸部落を併せて、成吉思汗（強盛なる君主の義）と號し、一八六六年（土御門天皇の御代、南宋寧宗の時）大汗として盛んに即位の式を擧行したり。これを蒙古の太祖となす。

蒙古人の性質

成吉思汗

太祖の西征

蒙古軍のロシヤ侵入

西夏を滅ぼす

太祖の病死

クリルタイの推戴

## 太祖の業

蒙古人は、性勇敢・堅忍にして、騎馬に長じ、君主に對して、最も忠實なり。その敵人を攻むるや、城池を毀ち、兵民を屠り、財物を奪はざれば止まざる風あり。太祖、これを率ゐて、まづ西夏を攻め降し、畏兀兒（ウイグル）（同紇）等を從へ、つぎて金を侵して、河北を略し、また將を遣はして、西遼を討ち平げ、遂に親ら大軍を率ゐて、カスピ海東なる花剌子模（トルコ人の建てたる國）を攻め滅ぼし、更に哲別・速不台の二將をして、遠くロシヤに侵入せしめ、己れは花剌子模の王子を追ひ、インヅス河邊に至りて還り、後、ほどなく、西夏を討ち滅ぼし、進みて金を伐たんとしけるが、途中、病みて死せり。

## 太宗の即位

時に一八八七年（後堀河天皇の御代、南宋理宗の時）なり。

太祖の死後、蒙古の習慣に從ひ、クリルタイと稱する大會議開かれ、その決議により、太祖の第三子窩濶台（オゴタイ）、大汗の位に即く。これを太宗とす。太宗は、一八九四年（四條天皇の御代）宋と約して金を夾擊し、遂にこれを滅ぼしたり。金は、建國よりここに至るまで、九世・百二十年なり。





この頃北條泰時執權たり

金を滅ぼす

蒙古の兵士

宋を攻む

高麗を降す

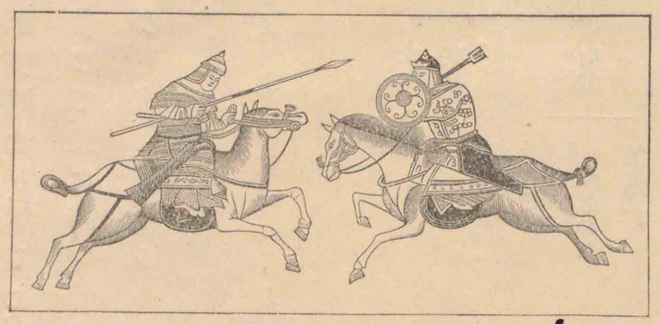
拔都の西征

ロシヤを蹂躙す

ドイツ侵入

## 太宗の大征伐

翌年、太宗は、都を喀喇和林（カラコルム）に奠め、大規模の征討軍を起して、宋を侵さしめ、別軍を遣はして、高麗を攻め降し、また、甥拔都（バトウ）をしてヨーロッパに侵入せしめたり。



## 拔都の遠征

一八九六年、拔都は、數十萬の大軍を率ゐて、征途に上り、翌年、ロシヤに入り、到る處、殺掠を恣にし、更に進みてハンガリヤ（Hungary）に侵入し、別軍は、またポーランド（Poland）を蹂躙して、ドイツの東南部に突進し、

戰勝ちて南方に轉じ、ホンガリヤなる拔都の本軍に會し、猛威、全歐を震撼せり。然るに、たまたま、太宗の訃音至りしかば、拔都は、諸將に命じて、東に歸らしめ、己れは留まりて諸屬國を鎭撫し、後、ヴォルガ河の下流に瀕せるサライ(Sarai)に都して、欽察汗國(また金帳汗國)を建てたり。時に一九〇三年(後嵯峨天皇の御代南宋の理宗の時)なり。

欽察汗國建設

忽必烈の南征

**憲宗の征伐**　太宗の後、定宗を經て憲宗に至り、また軍を出して、四方を征す。皇弟忽必烈は、大理國(雲南の地、唐末より獨立し宋の時は、全く化外にありき。)を平げ、轉じて西藏に入りて、これを服し、別軍をして安南を從へしめたり。また忽必烈の弟旭烈兀は、ペルシヤの回教徒を征服し、兵威を地中海濱まで輝かし、伊兒汗(イルカン)(ハトルコ古言君の義)と稱して、タブリス(Tabriz)に都し、拔都の欽察汗國及び成吉思汗の次子察合台(チャガタイ)の封ぜられたる察合台汗國と

憲宗の南伐

旭烈兀の西征と伊兒汗國建設

1866

蒙古

1 太祖鐵木眞
- 朮赤(ジュチ)—拔都
- 察合台(チャガタイ)
- 2 太宗窩濶台(オクダイ)—3 定宗貴由(グユク)
- 拖雷(ツルイ)
  - 4 憲宗蒙哥(モンゲ)
  - 5 世祖忽必烈
  - 旭烈兀

共に、所謂蒙古の西方三大汗國をなせり。憲宗も、また忽必烈等を從へて、宋を攻めしが、功半にして、陣中に病死したり。

## 第二章　元の世祖　宋の滅亡

**世祖の卽位**　憲宗死するや、忽必烈、宋に和を許して、北に還り、大汗の位に登る。これ卽ち世祖なり。世祖、都を燕京に遷し、つぎて國號を元と改めたり。

世祖大汗となる

國號を元とす

元軍の南侵

忽必烈

**宋の滅亡**　宋は、蒙古軍の去りし後、また和約を履まず、且、世祖の使者を抑留せしかば、世祖怒り、大擧して南伐せしめ、進んで臨安を陷れぬ。この時、宋には文天祥(ブンテンシヤウ)等の忠臣あり、宋の王族を奉じて、元軍に抗せしが、次第に南方に追ひ蹙められ、天祥も執へられ

厓山の戰

文天祥等の忠烈

たり。つぎて、宋軍、厓山（島名、廣東省の南）に戰ひて、全く利を失ひ、天祥は、後殺されたり。天祥が獄中の作にかかる正氣歌は頗る有名なり。

忽必烈汗の出陣

宋の武力不振

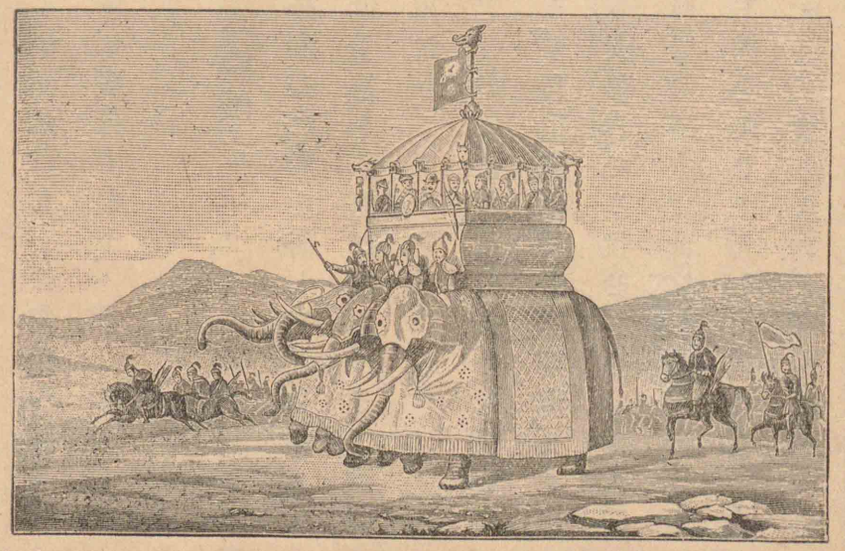
**宋滅亡の大原因**

宋は、もと文治を尚べる國にして、名臣・大儒、陸續輩出したれども、太祖が武人を抑壓せしより、兵力、微弱にして振はず、常に北方の强敵に苦しめられ、十八世・三百廿年の間、武功の殆ど觀るべきものなくして亡びたり。實に一九三九年（後宇多天皇の御代）なり。

滅亡の年代

**日本侵伐の失敗**

世祖は、また我が日本をも從へんと欲し、壹岐・對馬を侵して、意の如くならざりければ、宋の亡びし後、再擧して、また九州の北邊に寇せしが、全軍殆ど覆滅して、計畫、全く失敗に終れり。





文永の役

文天祥筆蹟模刻

弘安の役

東南アジヤの諸國諸島多く元に服屬す

小國の滅亡

**南方の經略**

されど、元の南方經略は成功したり。緬國（英領バルマ）占城（フランス領交趾支那）安南・暹國（シヤム）より、ジヤヴア・スマトラ（Sumatra）等に至るまで、或は降り、或は朝貢し、蒙古領域の大、古今に冠絕せり。

## 第三章　東西の交通

**東西交通の盛んになりし理由**

元の世祖の時、蒙古は、實に歐・亞二大陸に跨れる大國となり、所在に割據せし幾多の邦國、概ね討滅せられて、道路・宿驛の制、略備はり、要所に於ける守備隊の配置等、また稍〻

旅行の危險減少

整ひ、旅行の危險、自然減少せしかば、東西の交通、頗る頻繁となれり。

二條の陸路

その陸路に由るものは、一は中央アジヤ・天山南路を經、一はシベリヤの南部より、天山北路を經て、喀喇和林・燕京等に至り、その海路に由るものは、ペルシヤ・印度の沿岸より、泉州・上海等に達したり。殊に泉州は、當時、最も繁昌せる貿易港にして、外商の來住せるもの、頗る多かりき。

泉州の繁昌

## 東西相互の便利

この頃、ヨーロッパにては、回教徒に對する十字軍、屢〻企てられしが、蒙古人の東方に勃興せるを聞き、これと同盟して、その夾擊に利せんと欲し、ローマ法皇インノセント四世（Innocent）は、使者プラン＝カルピン（柏朗嘉賓 Plan Carpin）を定宗の廷に送り、フランス王ルイ九世（Louis）も、使僧ルブルック（魯柏 Rubruk）を派して、憲宗を喀喇和林に訪はしめたり。蒙古も、また回教國併呑を欲して、ヨーロッパのキリスト教國と親しむを便とし、自ら遠來のヨーロッパ人を厚遇せしかば、キリスト教僧侶の東來

キリスト教徒の希望

蒙古の希望

モンテ＝コルヴィノの布教

蒙古汗の對外人方針

マルコ＝ポーロ

マルコ＝ポーロ
イブン＝バッタ

東西文明の混和

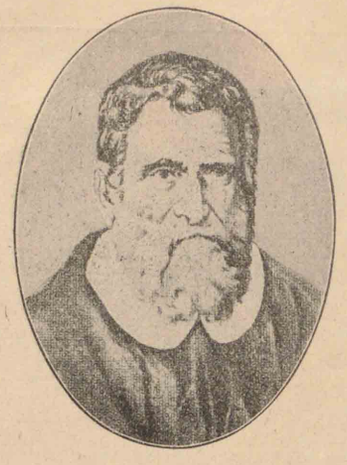
するもの少からざりき。中にも、イタリヤ人モンテ＝コルヴィノ（Monte Corvino）は、ローマ法皇の教書を齎し、世祖の時、燕京に來りて、教堂を建て、多數の信徒を得て有名なり。

## 西人の東來

また、蒙古の大汗は、初めより通商及び人材登庸等につきて、頗る開放・寛容の方針を執りければ、西人の東來するもの相踵げり。就中、有名なるは、元初に來りしイタリヤの商人マルコ＝ポーロ（Marco Polo）及び元末に來りしアフリカのモロッコ人イブン＝バッタ（Ibn Batuta）等なりとす。マルコ＝ポーロは、世祖に仕へて、その信任を得、元に留まること、前後十八年、歸國して「東方見聞錄」を著はし、書中、ジパング（Zipangu）の富盛を述べ、始めて我が日本をヨーロッパ人に紹介したり。

## 交通の結果

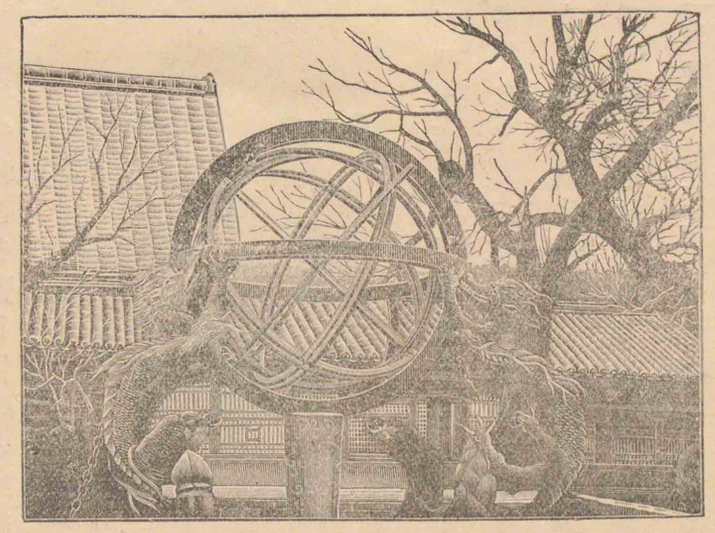
かくの如く、東西、相交通せし結果、兩洋文明の混和



北京天文臺の渾天儀

相續法の不完全

に一歩を進め、西方諸國は、支那より絹・陶器等を輸入し、且、その地理上の知識を擴めて、漸く東方アジヤの形勢を知り、東亞の人は、またヨーロッパの宗教及び學術等に接觸して、その影響を被りたりき。



元代の建作にかかる

## 第四章　元の衰亡

諸汗國の盛衰

帖木兒

**元衰亡の諸因**　元は、世祖時代の極盛を經て、はやくもその衰亡の兆をあらはしたり。これが原因の主なるものは、第一、蒙古の習慣により、元室には、確乎たる相續法なきを以て、自然、相續に關する紛亂を生じ易かりしこと。第二、その疆域、廣大に過ぎ、數多の人種・文化の異なれるものを包容せるが故に、統一上、甚しく困難なりしこと。第三、諸汗國が、はやくも分離獨立して、外交・戰伐、各、自ら恣にし、また互に爭奪を事とせしこと。第四、喇嘛教を尊信して、僧侶の專横を招き、その驕恣、譬ふるにものなく、朝廷は、佛事・祈禱のために財を費し、人民は、僧侶の庇護を假りて、稅を免れ、罰を遁れ、弊害百出せ

統一の困難

諸汗國の分離

現今の喇嘛僧の行列

僧侶の跋扈

財政困難

大臣の專權

しこと。第五、外征・內亂等のために、國用闕乏し、財政甚しく困難となりしこと。第六、大臣の權、甚だ重く、歴代の諸帝、多くはこれに擁立せられしを以て、自らその專横を馴致せしこと。第七、將相の如き重任は、すべて、これを蒙古人にのみ委ねて、漢人を用ひざるのみならず、甚しくこれを壓迫しければ、その不平の止まざりしこと等なるべし。

漢人の不平

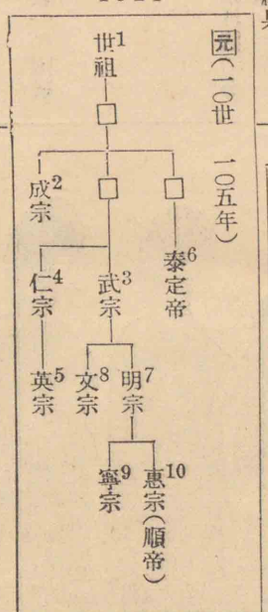
財政困難の結果

## 元の衰亡

元は、世祖以來、歴朝、皆理財の途に窮し、頻りに重税を課し、盛んに聚斂を行ひ、また紙幣を濫發して、一時を彌縫せしかば、財政、益〻紊亂し、物價、愈〻騰貴して、國民の怨苦、極まれり。是に於て、かねて不平を懷ける漢人、各地に蜂起し、二十餘年の大亂をひき起ししが、朱元璋の軍、燕京に迫るに及び、時の元の天子は、蒙古に逃げ歸りたり。時に

朱元璋の兵燕京に迫る

元（一〇世　一〇五年）






二〇二八年（後龜山天皇の御代）なり。世祖の燕京に都せしより、蒙古汗の支那に君臨せしこと、百五年なり。而して、西方の三汗國も、また皆衰へたり。

世祖時代の紙幣

元は銅錢を作らずして紙幣のみを用ひ初めは官庫に於て紙幣と金銀塊とを交換しまた舊幣の引換をなしたりしが後には年年紙幣を濫發し交換引換を怠りしかば紙幣の價値下落して反故紙同樣となりたり

諸汗國の衰微

### 三　汗國の衰微

欽察汗國は、拔都の後、回教に歸し、屢〻西鄰のキリスト教國と戰ひ、また伊兒汗國と爭ひしが、やがて國亂れて、簒弑相つぎ、分爭の中に衰へたり。伊兒汗國は、旭烈兀の後、數代の間、國內、よく治まれり。殊に旭烈兀の曾孫合贊は、賢明にして、制度を定め、文教を興し、蒙古諸汗中の賢君と稱せられしが、後、內亂ありて、その國、衰へたり。察合台汗國も、また衰へ、中央アジヤの諸酋長、所在に割據して、

欽察汗國の衰微

伊兒汗國の衰微

察合台汗國の衰微

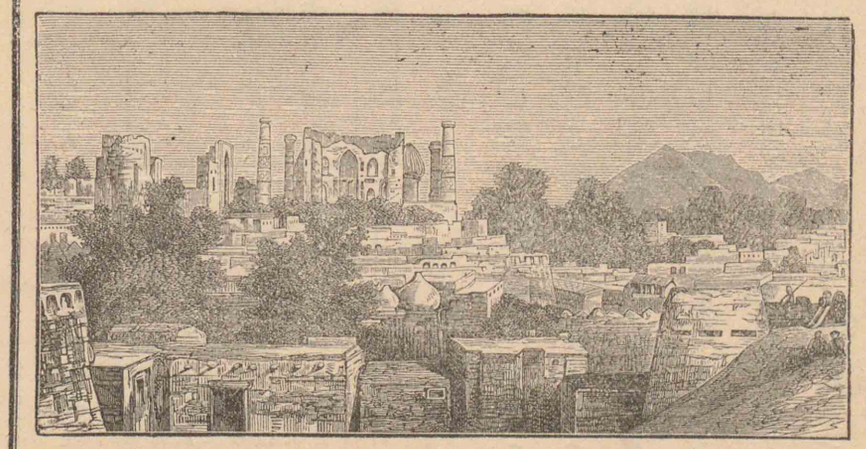
以て自ら恣にせり。

**帖木兒の興起**

かくの如く、元朝も、三汗國も、皆ともに衰亂せる時に當り、蒙古の疎族帖木兒（チムール）、察合台（チャガタイ）國に起り、内亂を定めて、その主となり、サマルカンド（Samarkand）を都とせり。帖木兒、豪邁にして、常に成吉思汗の雄圖を慕ひ、世界統一の大志を懷く。嘗て戰に臨み、その脚を傷つけて跛者となりければ、チムール＝レンク（レンクはベルシヤ語跛者の意）の號を得たり。

王座に於ける帖木兒

帖木兒サマルカンドに都す



現今のサマルカンド

帖木兒の綽名



## 第五章　明の統一　帖木兒の雄圖

**太祖の出身**

明の太祖（朱元璋）は、もと安徽省の一窮民にして、極めて微賤の者なりき。太祖、元末の騷亂に乘じて、その身を起し、金陵（江蘇省寧縣）を取りて、これに據り、遂に帝位に卽きて、國を明（ミン）と號し、ほぼなく、天下を平げて、一統の業をなしたり。五代以來、北狄の侵入絶えず、元に至りて、支那は、久しく蒙古汗の治下にありしが、今や、全くこれを塞外に驅逐し、また漢人の天子を戴くこととなれり。

一窮民より起る

金陵に據る支那の統一

太祖

太祖の内治
太祖の猜忌
惠帝の對諸王策
成祖

## 太祖の業

太祖、心を内治に用ひ、法典を修正し、諸制度を整へ、租稅を輕減し、教育を奬勵し、また封建の制を布き、同族の諸王を要地に分封して、王室の藩屏となしたり。然れども、太祖は、性猜忌にして、身後、或は諸功臣の制し難からんことを慮り、多くこれを殺しければ、國家の干城、自ら乏しくなれり。

## 成祖の簒立

太祖死して、孫惠帝立ち、藩王の強大なるを憂へ、漢の景帝の例にならひて、次第にこれを抑壓せしかば、叔父燕王棣、王室の難を靖んずるを名として、兵を擧げ、燕京より南下して、金陵に迫り、宦官の内應を得て、遂にこれを陷れ、自立して、惠帝に代れり。これ卽ち成祖なり。



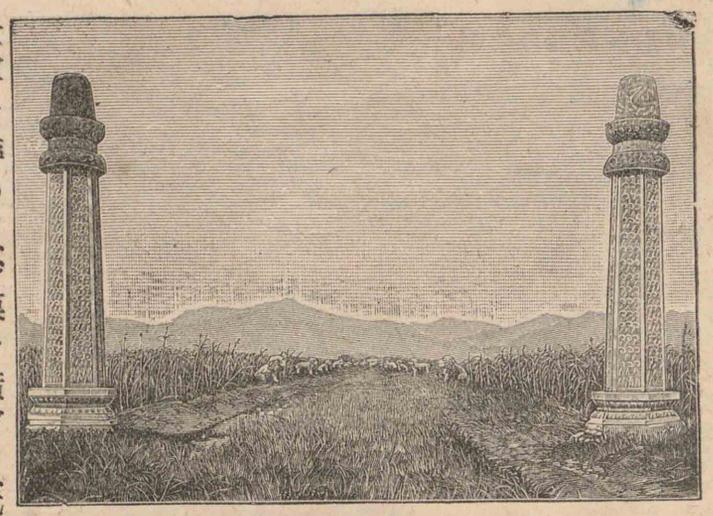
成祖の自立
内治
明の十三陵
外征

## 成祖の内治

成祖は、燕京を以て北京となし、つぎて、都をここに遷し、舊都金陵を南京と稱し、産業を勸め、教育を勵まし、よく國を治めたり。

## 成祖の雄志

成祖、頗る雄志あり、軍を發して、安南地方を征服し、つぎて、親ら大軍を率ゐて、沙漠を横ぎり、元の餘衆を漠北に伐ちて、これを降し、後、また瓦剌を親征して、これを破れり。瓦剌は、蒙古の別種にして、も

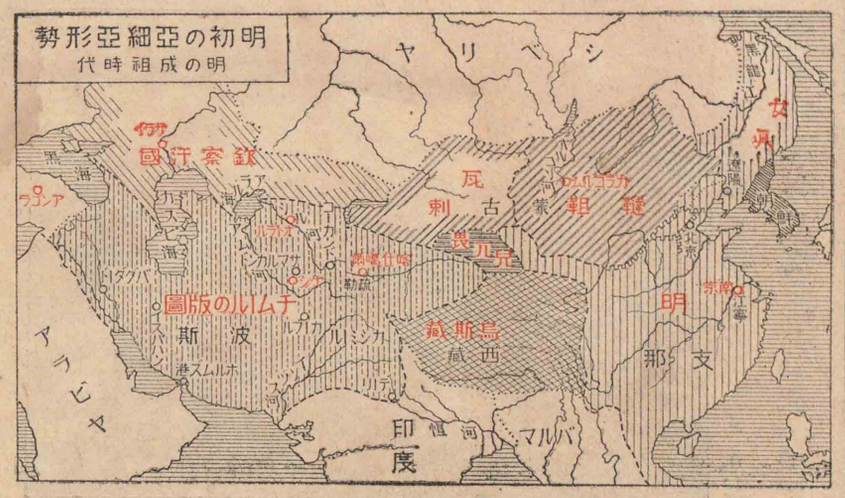


十三陵は成祖以後十三代の君主の墳墓の總稱にして、京兆地方昌平縣の天壽山に在りそのの道側には文武の臣を配置し、石像を高く立て、獅子・駝駱・象・麟・麒・馬・豹の等の石像を以て、これを圍み、朱欄・金瓦・璧然として、人目を眩せしむ

鄭和の航海

南方諸國の入貢と通商

明初の亞細亞形勢
明の成祖時代


ヤ
リ
ベ
シ
女真
遼陽
瓦剌
古
蒙
韃
韃
兀兒
明
支那
北京
南京
寧波
烏斯藏
西藏
チムルの版圖
波斯
ホルムズ港
ヤラビヤ
印度
恒河
マルハ
ウゴンア
黑海
カスピ海
ブハラ
ヒバ
ボハラ
ヒバ
ヒバ
ヒバ

げ、祖宗の大業を興復して、以てその素志を遂げんと欲し、親ら大軍を率ゐて、征明の途に上りしが、途中、病みて死せり。これ實に成祖の在位中の事にして、二〇六五年（後小松天皇の御代）なり。

帖木兒の病死

憲宗孝宗の治世

## 第六章　明の衰運　滿洲の勃興

### 明の中世

明は、成祖の後、しばらくは祖業を墜さず、その孫宣宗の世には、老成の良臣、多く朝に在りて、國、善く治まり、憲宗・孝宗二代、四十餘年の間も、また、これに次ぎて、隆盛の世なりき。然るに宦官の專横と、北虜・南倭の禍とありて、内憂・外患、交〻至り、明室は、遂に衰運に向へり。

宦官の專横と北虜南倭の禍

宦官專横の端

### 宦官の專横と内亂

初め、太祖は、宦官を抑へて、政に與るを得ざらしめしが、成祖立つや、その内應せるを德とし、漸くこれを親近せり。

明（一）

太祖 1 ― □ 惠帝 2
太祖 1 ― 成祖 3 ― 仁宗 4 ― 宣宗 5 ― 景帝 7
宣宗 5 ― 英宗 6 ― 憲宗 9 ― 孝宗 10 ― 武宗 11
憲宗 9 ― □ 世宗 12 ― 穆宗 13 ― 神宗 14

2028



是に於て、宦官專横の端を開き、政權、次第にその手に歸し、武宗立つに及びて、益〻威福を恣にし、政治腐敗せしかば、人民困弊し、群盜、所在に蜂起して亂をなし、諸王にも、また叛くものありしが、名儒王守仁（陽明）等、討ちてこれを平げたり。

武宗の時の内亂

### 北虜南倭

これより先、英宗の時、瓦剌の南侵あり。英宗親征し、敗れて生擒せられ、和議によりて、僅かに放還せらるるを得たり。後、瓦剌は衰へたりしが、元の後なる韃靼、強盛となり、憲宗の時、遂に内外蒙古を一統し、爾後、屢〻明に寇しき。明、大いにこれに苦しみ、財力・兵力、ために窮乏せり。しかのみならず、國初以來、倭寇の侵害甚しく、この頃に至りては、明の海賊も、これに加はり、盛んに南支那の沿海を荒したり。明にては、北虜と竝べて、南倭と稱し、大いにこれを畏れたり。

瓦剌の禍

韃靼の入寇

倭寇

### 朝鮮の建國

これより先、高麗は、遼に從ひ、金に從ひ、元に從ひ、明の起るや、また、これにも服屬せしが、内外の諸政亂れ、倭寇の患、また

高麗の衰微

李成桂の自立

豐臣秀吉の朝鮮征伐

朝鮮を援けて大敗す

神宗

國政の紊亂

甚しかりしかば、國勢、頗る衰へたり。この時に當り、李成桂、倭寇を伐ちて、民望を得、二〇五二年（吉野朝延京都に還御ありし年、明の太祖の時）自立して朝鮮王となり、都を漢陽（京城）に奠め、明の封册を受けて、その東藩となりたり。これを朝鮮の太祖となす。後、太祖八世の孫宣祖（李昭）の時、朝鮮は、我が豐臣秀吉の大兵を蒙り、國、殆んど危かりしが、幸にして覆滅を免れ、德川氏に至りて、國交を復したり。

**明の衰微**

秀吉が、朝鮮を征せし時、明は、恰も神宗の世なりき。神宗、朝鮮王の請により、兵を出して、これを援け、反りて大いに敗れ、師を失ひ、財を費すこと多く、衰弱、益、加はれり。然るに、廷臣等、徒らに朋黨を作りて相爭ひ、國政、愈、紊亂を





前年大阪落城豐臣氏亡ぶ

東陵　清の太祖の陵

弩兒哈赤の興起

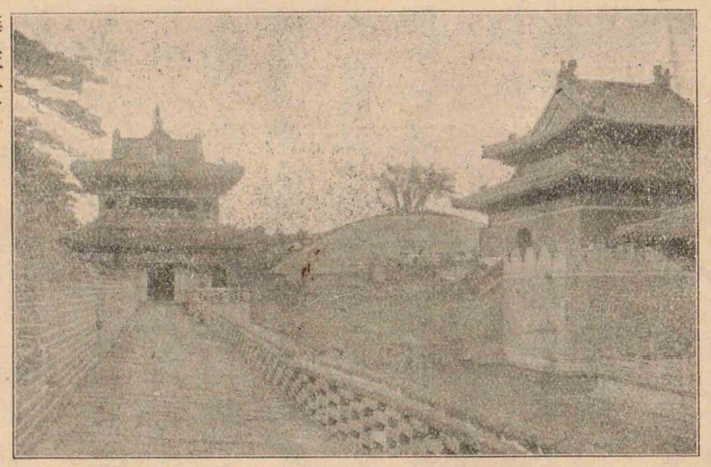
太祖の卽位

瀋陽奠都

極めたり。この時に當りて、女眞族、新に滿洲に勃興し、流賊、また四方に興り、遂に奈何ともすべからざるに至れり。

**滿洲の勃興**

女眞族は、金の亡びし後、勢、久しく振はざりしが、神宗の時、愛新覺羅氏の弩兒哈赤、赫圖阿拉（今の興京縣）より起りて、近傍の諸部落を併せ、國を後金と號し、二二七六年（後水尾天皇の御代、明の神宗の時）帝位に卽きたり。これ卽ち清の太祖なり。太祖は、進みて瀋陽（奉天省瀋陽縣）・遼陽等を略し、都を瀋陽に奠めたり。



東陵は瀋陽城を距る東三里の地にあり陵に向ひて右前にあるは內樓にて太祖の遺骸はこの下に眠れり又圖の中央に立てる碑は太祖の墓にあるせなは卽ち陵にて太祖の遺骸はこの下に眠れり

salvation army.
Introduction.
Interdiction.

印度の分裂
温都教の流行
回教徒の侵入
印度の衰微
バベル創建者バベル

# 第七章　莫臥兒帝國　葡萄牙・和蘭等の東洋

## 經略　貿易及び宣教

### 印度の變遷

印度にては、王朝、屢興亡し、唐の初世頃に至り、また分裂して、列國、互に攻め爭ひ、婆羅門教も變じて溫都教となり、漸く勢を得て、印度に流行せり。その後、宋の眞宗の時、回教を奉ぜるトルコ人、中央アジヤより印度に攻め入り、インヅス・恆河兩河域を略せしが、その衰ふるや、アフガン人、また侵入し來りて、これに代り、爭亂、常に絶ゆることなく、帖木兒の侵掠に遇ひてより、衰弱、益甚しかりき。

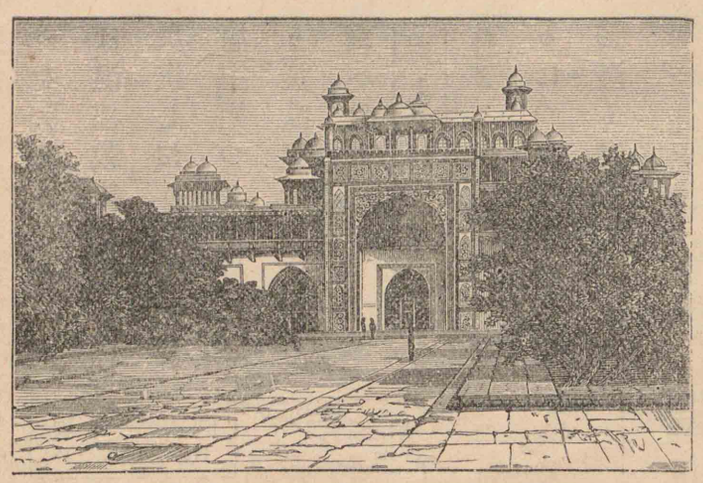
### 莫臥兒帝國の建設

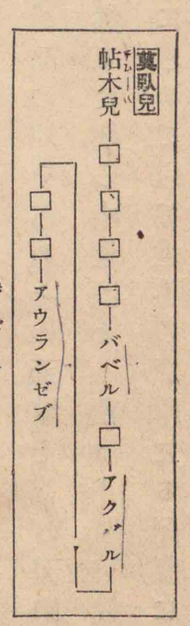
帖木兒死するや、その大國、忽ち亂れて分裂せしが、遠孫バベルに至り、印度の爭亂に乘じ、二一八六年（後柏原天皇の御時）（代明の世宗の時）兵を率ゐて侵入し、遂にアム河と恆河との間に大版圖を保ち、デーリに都して、莫臥兒帝國を創めたり。モゴルは、モンゴルの轉音なり。





アクバル大帝の事蹟
アクバル大帝の廟
アウランゼブ以後の帝國






印度シカンドラに在り

### 莫臥兒帝國の變遷

バベルの孫アクバル、英邁にして雄略あり、悉く北・中兩印度を平げ、財政・法制を整へ、且、文學を奬勵したり。曾孫オウランゼブの時、遂に南印度をも併せ、莫臥兒帝の威令、殆ど全印度に及びしが、回教を信ずること、篤きに過ぎ、これによりて、國内の統

**溫都教徒の反抗**

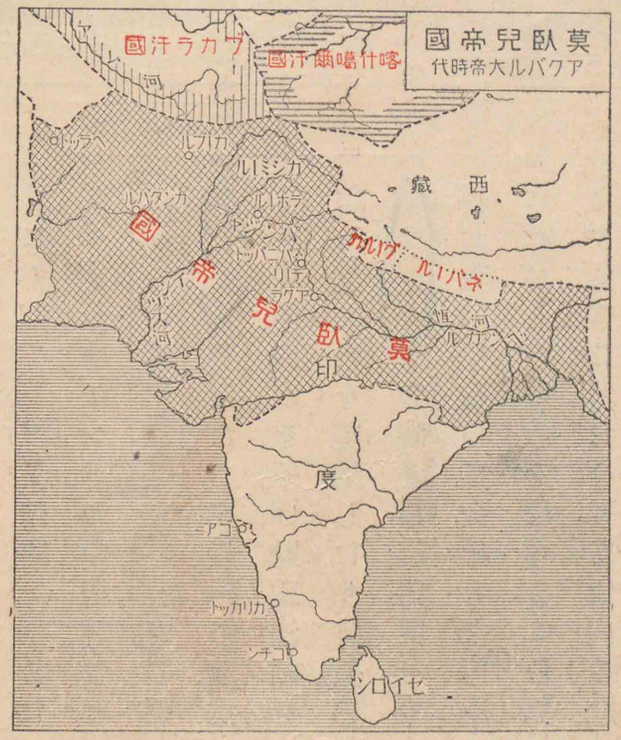
一を圖らんとせしかば、溫都教徒は、頑强に反抗したり。帝の死後、庸主、相つぎて位に登り、莫臥兒帝國は、漸く衰へたり。

**元以後の東西交通狀況**

**海上交通の先鞭**

これより先、元の衰微せるにつれて、東西の交通、漸く衰へしが、オスマン＝トルコ人勃興して、西アジヤの地を占め、その通路を塞ぎければ、往來・交通、益〻困難となれり。然るに、明の中世頃より、西ヨーロッパ諸國の形勢、漸く變じ、途を海上に求めて、以て世界の寶庫たる印度に

**歐洲に於ける航海熱**







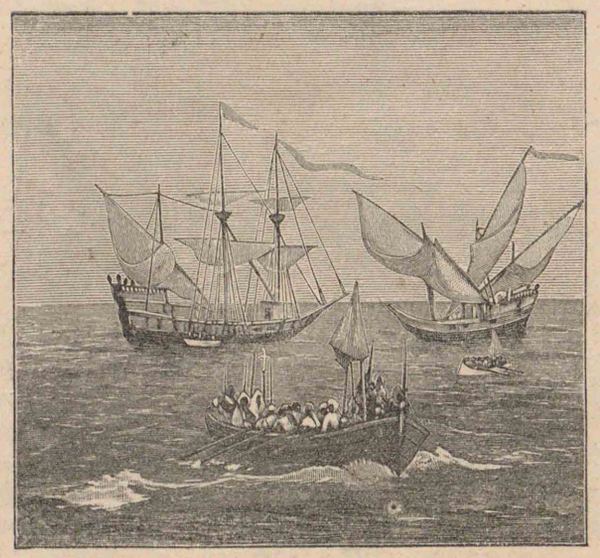

**葡萄牙人の先鞭**

**ゴアの市場**

**ヴアスコ＝ダ＝ガマのカリカット着の光景**

**アフリカ迂廻印度航路の發見**

航して、印度のカリカットに達するや、ここにアフリカ迂廻印度航路



達せんとする氣運、次第に起り、ポルトガル人、はやくもその先鞭を著けたり。

**ポルトガル人の東航**

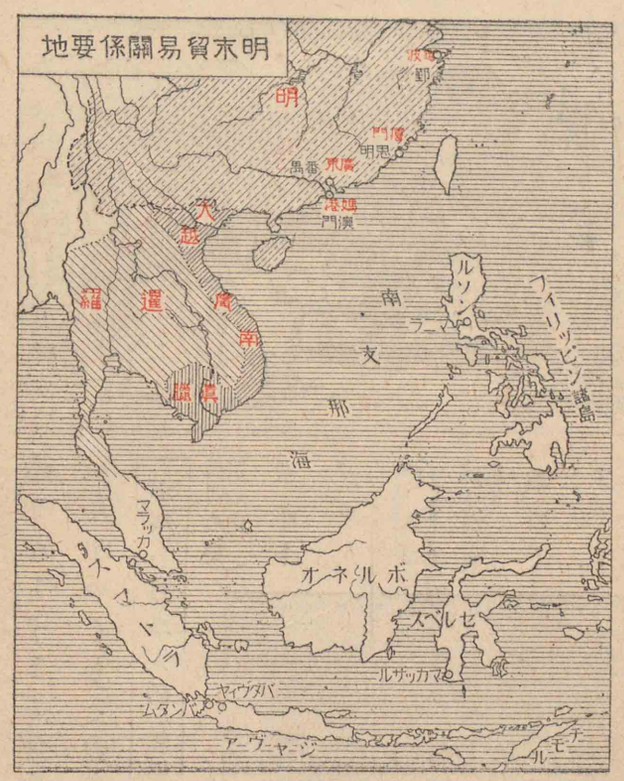
ポルトガル人（代、明の孝宗の時）ヴアスコ＝ダ＝ガマ始めてアフリカを周

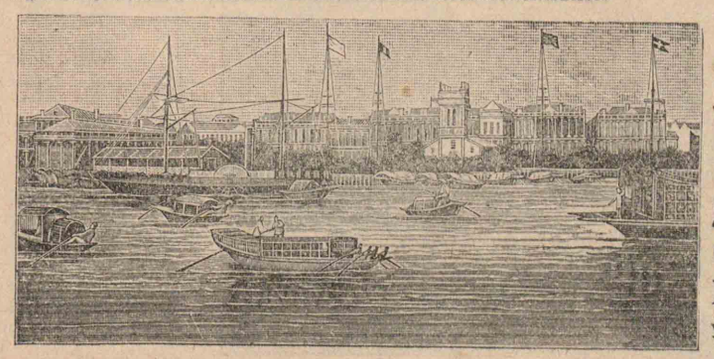
二一五八年（後土御門天皇の御代）

印度支那日本に於ける葡萄牙人

廣東に於ける商館

發見せられ、爾後、同國人の東航する者、相踵ぎ、二一七〇年（後柏原天皇の御代、明の武宗の時）には、ゴア（Goa）を取りて、これに據り、漸次、セイロン島及び印度の東海岸に商館を置き、進みてマラッカを略し、暹羅及





コロンブスのアメリカ發見

西班牙人のアメリカ拓殖

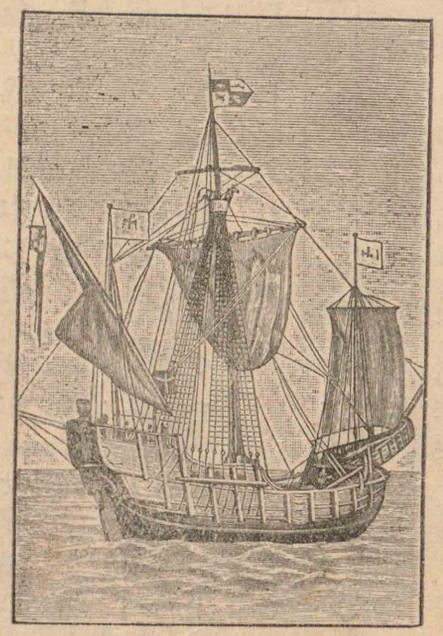
イスパニヤ船

フィリッピン諸島の發見並に占領

び、マライ群島（Malay）と交易を開き、更に支那海に入りて、廣東（廣東省番禺縣）に著し、寧波（ニンポー）（浙江省鄞縣）・厦門（アモイ）（福建省思明縣）に商館を設け、また明より阿媽港（アマカオ）（また媽港（澳門）即ち天文十二年）を租借して、これに據れり。ポルトガル人は、また二二〇三年（後奈良天皇の）以來、我が日本にも來航して、貿易を營みたり。

## イスパニヤ人の東航

これより先、二一五二年、イタリヤ人コロンブス（Columbus）、イスパニヤより西航して、アメリカを發見せり。爾後、イスパニヤは、アメリカの拓殖に從ひ、更に太平洋に西航の新路を求め、二一八一年（後柏原天皇の御代、明の武宗の時）には、マジェラン（Magellan）の一行、フィリッピン（Philippine Is.）諸島を發見し、後四十四年、これを占領し、つぎてマニラ（Manila）市を建て、これを根據として、明

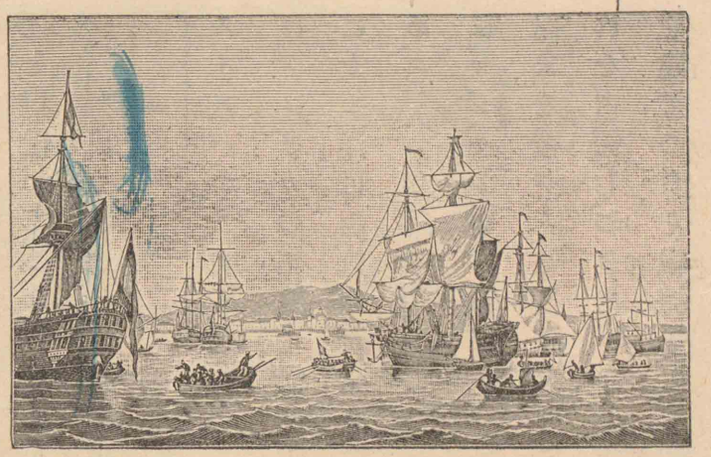


西班牙人通商の範圍

バタヴィヤ港の光景

オランダの獨立

その東方經略



てスマトラ、ジャヴァに航し、後六年、オランダ東印度會社を起し、政府の特別保護を受けて、東洋貿易に從事し、艦船を派遣して、到る處に、ポルトガル・イスパニヤの商船及び植民地を掠奪し、三七九年には、ジャヴァのジャカタラにバタヴィヤ府を建設して、その根據地となしたり。これより先、二二五七年（後陽成天皇の慶長二年、明の神宗の時）オランダ人は、我が平戸に來り、後、また臺灣に據りて、盛んに貿易を營みたり。

**オランダ人の東航**

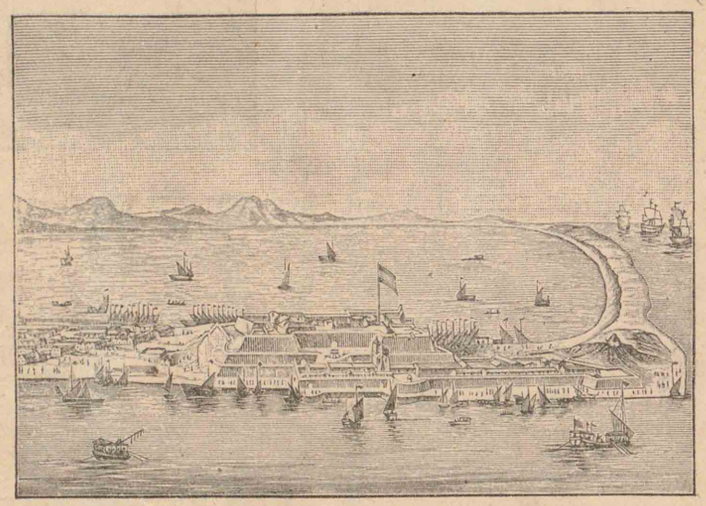
既にして、イスパニヤの領地ネーデルランド（Netherlands）に反亂起り、二二四一年（正親町天皇の天正九年、明の神宗の時）オランダ國、遂にイスパニヤより分離して獨立を宣言するや、これもまた、東洋貿易に著眼し、二二五六年（後陽成天皇の慶長元年、明の神宗の時）始め及び我が日本に通商せんとせり。然れども、ポルトガル人の東洋に於ける通商上の基礎、既に定まりければ、イスパニヤ人の商業は、ただマニラと我が平戸とに限られたり。



ゼランデヤ城

オランダ人の成功

ルトガル・イスパニヤの商船及び植民地を掠奪し、三七九年には、ジャヴァのジャカタラにバタヴィヤ府を建設して、その根據地となしたり。これより先、二二五七年（後陽成天皇の慶長二年、明の神宗の時）オランダ人は、我が平戸に來り、後、また臺灣に據りて、盛んに貿易を營みたり。



二二八四年オランダ人は臺灣島のタユワン即ち今の安平の地に到り此處に商館を設けて支那貿易の根據地としゼランデヤ城を築き防禦に備へなし又今の臺南の地に寨を置き同港に出入する船舶に對して關稅を課し入國者より人頭稅を徵したり

**キリスト教の傳來**

明興り、元亡びて、東西の交通、一時、止むと共に、支那に於けるキリスト教も、また廢滅に歸したりしが、ポルトガル人のゴアに據りしより、そ

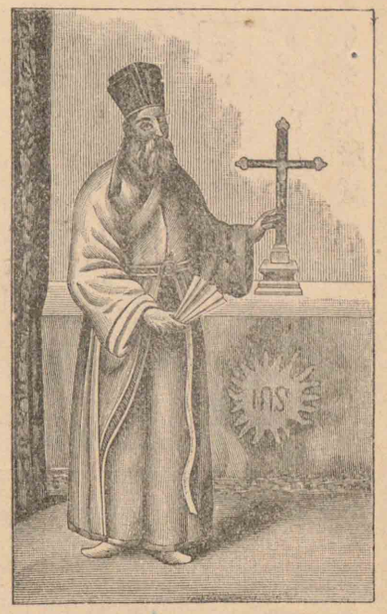
マテオ＝リッチ

フランシス＝サヴィエル來る

マテオ＝リッチ來る

ロンゴバルヂ・アダム・シャール來る

西洋學術の傳來



の一派なるゼスイト門派(Jesuits)の僧徒、陸續、東洋に來りて、布教を力めたり。中にも、有名なるフランシス＝サヴィエルは、二二〇九年(後奈良天皇天文十八年、明の世宗の時)ゴアより我が國に來りて、各地に布教を試み、同派のイタリヤ人マテオ＝リッチ(利瑪竇 Matteo Ricci)は、また二四一年(正親町天皇天正九年、明の神宗の時)廣東に來り、つぎて、パントジャ(龐迪我 Pantoja)と共に北京に入り、神宗の許可を得て、天主堂を建て、多くの信徒を得たりき。後、イタリヤ人ロンゴバルヂ(龍華民 Longobardi)ドイツ人アダム＝シャール(湯若望 Adam Schal)等、その緒業を繼ぎ、弘教のかたはら、西洋學術書の漢譯等に力め、天文・地理・算數・曆法・砲術・測量術等を傳へたり。





女眞の古碑

元好問

儒學

陸九淵

戲曲小說

# 第八章　元・明の文化

## 金の文學

金は、北方の未開地より起りしを以て、固有の文化とてはあらざりしが、太祖が、心を文事に用ひて、女眞文字を製せしめ、また文學の士を重んぜしより、文物、漸く盛んになり、その末葉に出でたる元好問の如きは、詩文を以て、名聲、海内に鳴れり。

この古碑は松花江の上流なる山城子附近の森林中に在り女眞文字を以て刻す大正二年鳥居龍藏氏の發見せるものなり

## 元の學術

元も、また特有の文化とてはあらざりしかど、支那を統一してよりは、名儒の世に出でしもの、少からず、許衡の如きは、その名高きものなり。文學にては、戲曲・小說の發達最も著く、施耐庵の水滸傳は、元代小說の白眉たり。また天文學・數學に至りては、

宋濂
方孝孺
王守仁
王守仁筆蹟

全く新機軸を出し、前代學者の及ぶ能はざる所なり。

**明の儒學**　明の儒者には、太祖を助けて、撥亂・反正の功を奏せしめたる宋濂を始めとし、成祖に屈せず、節義を守りて、凜然、死に就ける方孝孺（宋濂の弟子）の如き大家あり。是等は、皆程朱の學を修めたるものなり。後、王守仁出で、陸九淵の說に基き、致良知を旨とし、知行合一を唱へて、朱子派以外、別に一旗幟を樹て、その學說、一世を動かしたりき。

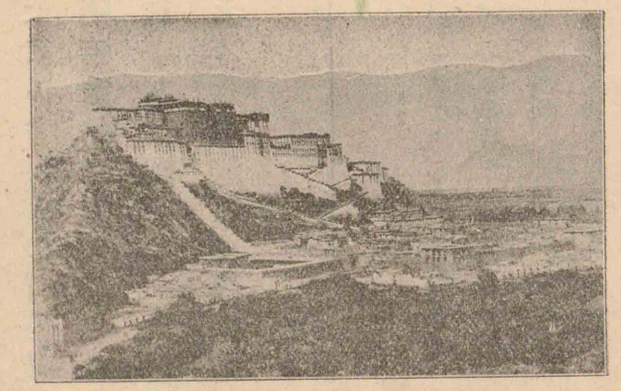
貴州省貴陽縣に在る石に刻せるもの

**明の文學**　文學にては、古文辭學流行し、明の中代以後、その風、天下を風靡せり。されど、模擬・剽竊の風盛んにして、流弊、頗る甚しく、明末、歸有光（川）等、唐・宋の大家を學びて、大いにその改良に力めたれども、なほ十分にこれを矯むることは能はざりき。

古文辭學の流行
歸有光

**宗教**　宗教は、佛教の外、喇嘛教とキリスト教と行はれたり。喇嘛教は、西藏に流行せる佛教の一派にして、元の世祖が西藏に入りし時、同教の僧八思巴（パスパ）を伴ひ還り、これを帝師となしたるに始まる。爾後、歷代の帝師は、啻に支那の僧尼を統督せしのみならず、西藏の教權と政權とを併せ握りて、驕橫・跋扈を極め、その徒等、また漸く元室の保護に

喇嘛教
達賴喇嘛宮殿



西藏拉薩に在り

達賴喇嘛

馴れて、墮落極まれり。元亡びて、明、これに代るや、英宗の時、西藏に高僧宗喀巴（ソンカパ）出でて、教弊を改革し、且、從來、喇嘛僧の着用せる紅衣・紅帽に代ふるに、黃衣・黃帽を以てしたり。これより、黃衣派、漸く勢を得、蒙古諸部の如き、概ねこれに歸依するに至り、達賴（ダライ）喇嘛、西藏の法皇として、拉薩（ラサ）に都したり。

## 概括

近古期は、一八六〇年頃、蒙古人の勃興せしより、二三〇〇年頃明の滅亡せし時までの間にして、我が土御門天皇より明正天皇に至る時代に當れり。この期の特色は、蒙古人の勃興、隆盛にありて、その前半期には蒙古人は、東西の諸種族を伐ち從へて、歐・亞二大陸に跨る空前の大帝國を建設し、その後半期には、漢族、元を滅ぼして、明を起したり。されど、蒙古人の勢力は、なほ盛んなるものありて、中央アジヤに帖木兒の大帝國興り、その遠裔は、印度に莫臥兒帝國を起したり。また、この期には、東西の大交通ありて、歐人東漸の勢、愈〻著く、キリスト教、これに伴ひて東流したり。

# 古

## 明

2028——2304

二〇六二　（後小松）成祖の卽位。アンゴラの戰
二一〇九　（後花園）英宗瓦剌に擒にせらる
二一五八　（後土御門）ヴァスコ＝ダ＝ガマ印度に達す
二一七〇　（後柏原）ポルトガル人ゴアを略取す
二一七七　（後柏原）ポルトガルの使節始めて明に來り通ず
二一七九　（後柏原）武宗の時王守仁寧王の反を討平す
二一八六　（後柏原）バベル莫臥兒帝國を建つ
二二〇二　（後奈良）サヴィエル、ゴアに來る
二二一六　（後奈良）アクバル大帝の卽位
二二一七　（後奈良）ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる
二二二五　（正親町）イスパニヤ人のフィリッピン諸島占領
二二三九　（正親町）英人始めて印度に航す
二二四一　（正親町）マテオ＝リッチ明に來る
二二四三　（正親町）滿洲弩兒哈赤の興起
二二五二　（後陽成）神宗の時豐臣秀吉朝鮮を伐つ
二二五五　（後陽成）蘭人始めて印度に航す
二二六〇　（後陽成）英人東印度會社を建つ
二二七六　（後水尾）弩兒哈赤帝位に卽く
二二七九　（後水尾）蘭人バタヴィヤに據る
二二八四　（後水尾）蘭人臺灣を占領す
二二八七　（後水尾）清の太宗の朝鮮征伐
二二九一　（明　正）李自成亂を作す
二二九六　（明　正）清の太宗國號を清と改む
二三〇四　（後光明）李自成北京を陷る

# 年表（三）

年代は皇紀に據る

| 時代 | 王朝 | 年代 | （天皇） | 重なる事蹟 |
|---|---|---|---|---|
| 近古 | 蒙古（元） 1866—2028 | 一八六六 | （土御門） | 鐵木眞大汗の位に卽く |
| | | 一八七九 | （順德） | 成吉思汗の西征 |
| | | 一八八七 | （後堀河） | 西夏の滅亡 |
| | | 一八九四 | （四條） | 金の滅亡 |
| | | 一八九七 | （四條） | 拔都ロシヤに侵入す |
| | | 一九〇二 | （後嵯峨） | 欽察汗國建設 |
| | | 一九一八 | （後深草） | 伊兒汗國の建設 |
| | | 一九二〇 | （龜山） | 忽必烈の卽位 |
| | | 一九三五 | （後宇多） | マルコ＝ポーロ支那に來る |
| | | 一九三九 | （後宇多） | 南宋の滅亡 |
| | | 一九四一 | （後宇多） | 世祖の時日本に寇して大敗す（弘安の役） |
| | | 一九五五頃 | （伏見） | モンテ＝コルヴィノ燕京に來る |
| | | 二〇二八 | （後龜山） | 元の滅亡 |
| 古 | 明 2028—2304 | 二〇二八 | （後龜山） | 朱元璋帝位に卽き明の太祖となる |
| | | 二〇二九 | （後龜山） | 帖木兒中央アジヤを定む |
| | | 二〇五〇 | （後龜山） | 帖木兒欽察汗を破る |
| | | 二〇五二 | （後龜山） | 李成桂朝鮮王となる |
| | | 二〇五九 | （後小松） | 靖難の師起る |
| | | 二〇六二 | （後小松） | 成祖の卽位。アンゴラの戰 |
| | | 二一〇九 | （後花園） | 英宗瓦剌に擒にせらる |
| | | 二一五八 | （後土御門） | ヴァスコ＝ダ＝ガマ印度に達す |
| | | 二一七〇 | （後柏原） | ポルトガル人ゴアを略取す |
| | | 二一七七 | （後柏原） | ポルトガルの使節始めて明に來り通ず |
| | | 二一七九 | （後柏原） | 武宗の時王守仁寧王の反を討平す |
| | | 二一八六 | （後柏原） | バベル莫臥兒帝國を建つ |
| | | 二二〇二 | （後奈良） | サヴィエル、ゴアに來る |
| | | 二二一六 | （後奈良） | アクバル大帝の卽位 |
| | | 二二一七 | （後奈良） | ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる |
| | | 二二二五 | （正親町） | イスパニヤ人のフィリッピン諸島占領 |
| | | 二二三九 | （正親町） | 英人始めて印度に航す |
| | | 二二四一 | （正親町） | マデオ＝リッチ明に來る |
| | | 二二四三 | （正親町） | 滿洲弩兒哈赤の興起 |
| | | 二二五二 | （後陽成） | 神宗の時豐臣秀吉朝鮮を伐つ |
| | | 二二五五 | （後陽成） | 蘭人始めて印度に航す |
| | | 二二六〇 | （後陽成） | 英人東印度會社を建つ |
| | | 二二七六 | （後水尾） | 弩兒哈赤帝位に卽く |
| | | 二二七九 | （後水尾） | 蘭人[illegible]る |

# 年表（三）

年代は皇紀に據る

| 時代 | 王朝 | 年代（天皇） | 重なる事蹟 |
|---|---|---|---|
| 近古 | 蒙古（元） 1866—2028 | 一八六六（土御門） | 鐵木眞大汗の位に即く |
| | | 一八七九（順德） | 成吉思汗の西征 |
| | | 一八八七（後堀河） | 西夏の滅亡 |
| | | 一八九四（四條） | 金の滅亡 |
| | | 一八九七（四條） | 拔都ロシヤに侵入す |
| | | 一九〇二（後嵯峨） | 欽察汗國建設 |
| | | 一九一八（後深草） | 伊兒汗國の建設 |
| | | 一九二〇（龜山） | 忽必烈の即位 |
| | | 一九三五（後宇多） | マルコ＝ポーロ支那に來る |
| | | 一九三九（後宇多） | 南宋の滅亡 |
| | | 一九四一（後宇多） | 世祖の時日本に寇して大敗す（弘安の役） |
| | | 一九五五頃（伏見） | モンテ＝コルヴィノ燕京に來る |
| | | 二〇二八（後龜山） | 元の滅亡 |
| 古 | 明 2028—2304 | 二〇二八（後龜山） | 朱元璋帝位に即き明の太祖となる |
| | | 二〇二九（後龜山） | 帖木兒中央アジヤを定む |
| | | 二〇五〇（後龜山） | 帖木兒欽察汗を破る |
| | | 二〇五二（後龜山） | 李成桂朝鮮王となる |
| | | 二〇五九（後小松） | 靖難の師起る |
| | | 二〇六二（後小松） | 成祖の即位。アンゴラの戰 |
| | | 二一〇九（後花園） | 英宗瓦剌に擒にせらる |
| | | 二一五八（後土御門） | ヴァスコ＝ダ＝ガマ印度に達す |
| | | 二一七〇（後柏原） | ポルトガル人ゴアを略取す |
| | | 二一七七（後柏原） | ポルトガルの使節始めて明に來り通ず |
| | | 二一七九（後柏原） | 武宗の時王守仁寧王の反を討平す |
| | | 二一八六（後柏原） | バベル莫臥兒帝國を建つ |
| | | 二二〇二（後奈良） | サヴィエル、ゴアに來る |
| | | 二二一六（後奈良） | アクバル大帝の即位 |
| | | 二二一七（後奈良） | ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる |
| | | 二二二五（正親町） | イスパニヤ人のフィリッピン諸島占領 |
| | | 二二三九（正親町） | 英人始めて印度に航す |
| | | 二二四一（正親町） | マデガ＝リッチ明に來る |
| | | 二二四三（正親町） | 滿洲弩兒哈赤の興起 |
| | | 二二五二（後陽成） | 神宗の時豐臣秀吉朝鮮を伐つ |
| | | 二二五五（後陽成） | 蘭人始めて印度に航す |
| | | 二二六〇（後陽成） | 英人東印度會社を建つ |
| | | 二二七六（後水尾） | 弩兒哈赤帝位に即く |
| | | 二二七九（後水尾） | 蘭人バタヴィヤに據る |
| | | 二二八四（後水尾） | 蘭人臺灣を占領す |
| | | 二二八七（後水尾） | 清の太宗の朝鮮征伐 |
| | | 二二九一（明正） | 李自成亂を作す |
| | | 二二九六（明正） | 清の太宗國號を清と改む |
| | | 二三〇四（後光明） | 李自成北京を陷る |

# 第四篇　近世

## 第一章　清の統一

**太宗の外征**

二二八六年（後水尾天皇の御代、明の熹宗の時）後金の太祖死して、子太宗立ち、兵を發して朝鮮を擊つ。時に朝鮮には、宣祖の孫仁祖、位に在り、防戰、利あらず、江華島に逃れて、和を請ひ、約して兄弟の國となれり。つぎて、太宗は、親ら將として、明を伐ち、北京に迫り、侵掠して還れり。後數年、太宗は、また內蒙古地方を征服し、二二九六年（明正天皇の御代、明の毅宗の時）國號を清と改め、明年、親ら大軍を率ゐて、再び朝鮮を攻め、京城を陷れて、仁祖を降し、これをして清の正朔を奉ぜしめたり。

**明の滅亡と清の一統**

明は、神宗以來武備不振を極め、財政甚しく困難に陷りければ、多くの鑛山を開き、種種の增稅を行ひ、皆宦官をしてこれを領せしめ、橫暴・誅求、至らざるなかりき。是に於て、民心、明

明を伐つ
蒙古地方征服
朝鮮再征
鑛稅の害
流賊の蜂起

明（二）

神14宗
紹19宗（太祖の遠孫）
光15宗
永曆帝20
安宗18
毅宗17
熹宗16

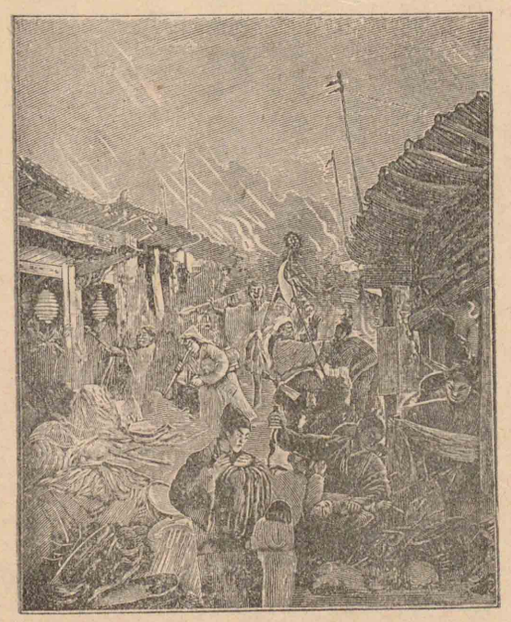
室を離れて、流賊、四方に蜂起し、國家、將に土崩瓦解せんとせり。この時に當り、清の太宗死して、子世祖つぎ、力を專らにして、明に迫りしかば、明の毅宗は、吳三桂をしてこれを防がしめしが、流賊李自成勢を得て、陝西・河南・山西を略し、進みて北京を陷れ、毅宗は、遂に自殺したり。時に二三〇四年なり。

吳三桂清軍を導きて李自成を伐つ

李自成の北京焚掠

明の遺臣皆亡ぶ

**清の一統**　吳三桂、これを聞きて、清に降り、反りて、その軍を導きて、李自成を伐つ。自成逃れ、世祖は、容易に支那の北部を定むることを得、都を北京に遷したり。明の遺臣は、なほ、その王族を擁して、江南





鄭成功

鄭成功

その他の遺臣

諸處に兵を擧げしが、世祖、將を遣はして、連りにこれを破り、遂に海内を一統したり。

**明の遺臣**　されど、鄭成功、孤忠を守りて屈せず、明の王族を奉じ、初め厦門に據りて、清軍に抗し、その勢、一時、頗る張りしが、後、戰敗るるに及び、オランダ人を逐ひて、臺灣に據り、依然、明の正朔を奉じたり。また明の遺臣にして、清に仕ふるを屑しとせず、海を渡りて、我が國に歸化したるものあり。朱之瑜（舜水）、僧隱元等は、卽ちそれなり。

鄭成功の父鄭芝龍は福建の人なり我が平戸に來住し田川氏を娶りて成功を生む後成功母と共に明に入るや明主姓名を朱成功と賜ふこれ國姓爺の稱ある所以なり

## 第二章　聖祖　清・露の交渉

康熙帝
聖祖の人物
三藩
三藩の強大
聖祖
吳三桂まづ叛し他の二藩これに應ず
九年の大亂

## 聖祖

清の聖祖は、世祖の子にして、康熙帝（康熙は年號）とも稱す。天資聖明にして、勵精、治を圖り、在位六十餘年の間、文德・武勳、天下を掩ひ、よく清朝の基を固め成したり。

## 三藩の亂

この頃、雲南に吳三桂あり、福建に耿精忠あり、廣東に尚之信あり。いづれも、明の降將又はその子孫なり。三人共に大封を清廷に受け、兵權を握りて、勢、甚だ強く、これを三藩といへり。聖祖、三藩の強大にして、制し易からざるを憂へ、英斷を以て、これを撤せんとしければ、三藩、自ら安んぜず、三桂、まづ叛し、精忠之信、相つぎてこれに應ぜり。かねて清室に心服せざる漢人、多くこれに加はり、江南、大いに亂れしが、官軍、各處に奮戰し、前後九年にして、全くこれを鎭定したり。

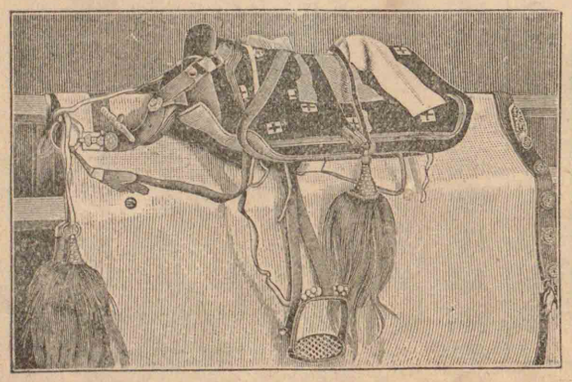
鄭經三藩に應ず
鄭克塽降る
聖祖が用ひたる馬具
ロシヤの獨立とその東進

## 臺灣の服屬

これよりさき、臺灣の鄭成功死し、その子鄭經つぐ。經、父の志を繼ぎて、清に抗し、三藩の亂起るや、これに應じて、連りに沿海を攻掠せしが、三藩の勢、衰へしより、全く孤立して援なく、經の子克塽に至り、遂に清軍に降れり。是に於て、清國、始めて臺灣を併すことを得たり。

## 清露の交渉

聖祖の時、ロシヤには、英主ペートル大帝、位に在りて、鋭意、國勢の發展を圖りき。これより先、明の中世に、欽察國の衰ふるや、モスコー大侯、これに乘じて獨立し、遂に欽察國を滅ぼし、二〇七年（後奈良天皇の御代、明の世宗の時）始めてロシヤ皇帝と稱せり。爾後、ロシヤは、漸くシベリヤを略し、遂に黑龍江に沿ひて東進し、明末には、既に滿洲北部に現は



アルバジン城と愛琿城

ネルチンスク條約

乾隆帝

外征の功

れ、清の世祖の時、雅克薩を取りて、アルバジン城を築き、それより、次第に滿洲に入り來れり。聖祖、愛琿城を築きて、これに對し、またペートル大帝と交渉を重ね、二十四年（東山天皇元祿二年、聖祖康熙二十八年）兩國、各、使臣を派して、尼布楚（ネルチンスク）に會し、外興安嶺及びアルグン河を以て、その境界とすることを約せしめたりとされ、ネルチンスク條約といふ。

## 第三章　邊外の征服

**高宗の英明**

聖祖より一代を隔てて、孫高宗立つ。高宗は、乾隆帝（乾隆は年號）とも稱し、在位の年數、殆ど聖祖に同じく、英明なることも、聖祖に亞ぎ、聖祖と共に、外征の功、頗る著く、よく清國の疆域を擴張して、最大版圖に至らしめたり。

清（一）

太祖1—太宗2—世祖3—聖祖4—世宗5—高宗6

**準噶爾部及び西藏の征討**

さきに、太宗の時、內蒙古は、すでに清に內



漠北及び漠西の形勢

噶爾丹の驕橫

高宗の鹿狩

聖祖の征伐

附せしが、外蒙古及び漠西の衞拉（オイラート）（明代の瓦剌）は、なほ未だ清に降らざりき。然るに、聖祖の初年、衞拉の一部なる準噶爾（ズンガル）に噶爾丹（ガルダン）といふもの出で、伊犂（イリ）地方に據りて、威、四邊を壓し、青海及び西藏を服し、天山南路を併せ、進みて外蒙古を侵したり。聖祖、外蒙古の部衆の請により、噶爾丹に諭すに、兵を收め、且、その侵地を返還せんことを以てせしに、噶爾丹、これに從はず、反りて、內蒙古に侵入しければ、聖祖、親征すること二回、大いにこれを擊ち破れり。たまたま、準噶爾に內亂あり、噶爾丹、勢、窮まりて自殺し、外蒙古、

西藏の平定

高宗の外征

國家漸く多事ならんとす

青海等、皆清の藩屬となりぬ。つぎて、聖祖は、兵を遣りて、西藏を討ち平げ、駐藏大臣を置きて、これを鎭撫せしめたり。

**高宗の功業**　高宗の時にも、外征、頗る多く、四川省の西邊なる金川（金沙江の上流にあり、分れて大金川・小金川の二となる。隋初金川縣を置きたる地）を平げ、準噶爾の內亂に干涉して、これを定め、回部の亂を平げて、天山南路を領土とし、緬甸を攻めて、これを降し、暹羅王を懷けて、封册を與へ、安南の內亂に干涉し、その王をして封册を受けしめ、またネパールを攻め降し、臺灣の叛亂を平げなどし、その功、決して聖祖に讓らざるものあり。されど、隆盛の中、また多少の動亂ありて、國家、漸く多事ならんとする兆候を示せり。

## 第四章　清の制度　學術

**中央政府の組織**

聖祖・高宗二代の間は、清朝極盛の時にして、外國

內閣と六部

軍機處

理藩院と都察院

總督巡撫提督

知府・知州・知縣

滿洲の將軍

威、四方に振ひ、內、制度、よく整ひ、文敎も、また大いに興れり。中央政府には、まづ內閣あり、大學士・協辦大學士等を置きて、國務を總理せしめ、その下に吏・戶・禮・兵・刑・工の六部あり、長官を尙書、次官を侍郎といひ、それぞれ政務を分掌せしが、高宗以後、軍機處を設け、軍機大臣を置きて、軍國の機務を參決せしむるに及び、內閣の實權は、次第にこに移れり。この外、理藩院ありて、特に內外蒙古・青海・西藏等の藩部を管轄し、都察院ありて、百官を監視せり。

**地方制度**　地方は、支那本部を分ちて、十八省とし、天山南北兩路を一省（新疆省）とし、通例、一省又は二三省毎に總督を置きて、文武の大權を握らしめ、大抵、各省に巡撫・提督ありて、民治に任じ、軍務を掌る。各省は、府・州・縣に分治するを常とし、知府・知州・知縣等ありて、その管內を治む。また、滿洲は、清朝發祥の地なるを以て、特別制を布き、各省に將軍を置きたり。

理學の反動と考證學の起り

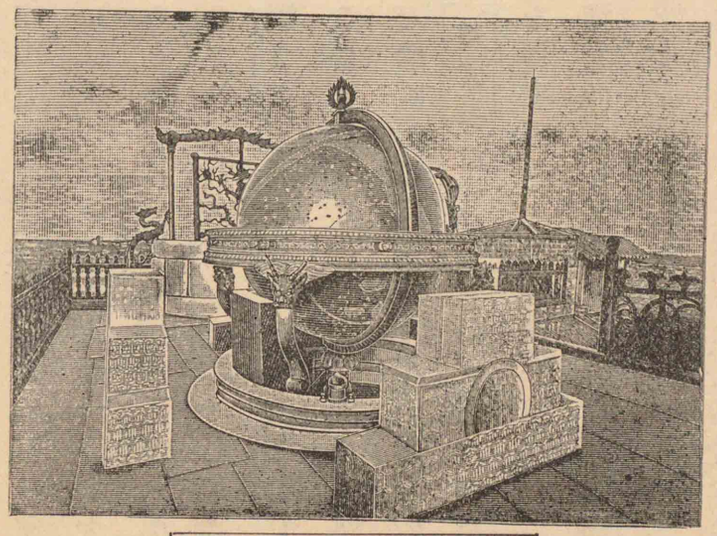
南懷仁の造りたる天體儀

聖祖高宗時代の學術

**學術**

宋以後、儒者は、多く深奥なる理論を研究することを力め、稍、空論に流るる弊ありしが、明末・清初の際、その反動として考證學起り、古書を解釋するに、廣く群籍に渉り、深く異同を考へ、その最も正確ならんことを力めたり。顧炎武・黄宗羲等、實にその唱首にして、後、遂に天下を風靡するに至れり。

聖祖・高宗は、殊に深く學を好みて、學者を優遇し、また多く儒臣を召して、淵鑑類函・佩文韻府・康熙字典・四庫全書提要等の大部の書を勅撰せしめ、以てこれを奬勵せしかば、經學・史學・地理學・文字學等の考證・精探、盛んに起り、著名の學者、續續輩出せり。聖祖は、またベルギーの宣教師フェルビースト（南懷仁）を信任し、これを北京觀象臺副長とし、西洋の學術にも注意せり。



フェルビーストは二三一九年（後西院天皇の御代清の世祖の時）支那に來り二三四八年（東山天皇の御代清の聖祖の時）北京に死す





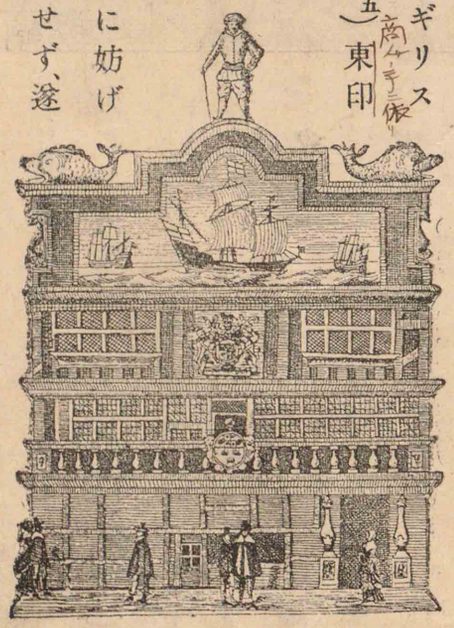
イギリス東印度會社

イギリス東印度會社の創立

## 第五章　英國の印度經略　鴉片戰役

### イギリス人の印度貿易

イギリス人は、二二六〇年（後陽成天皇慶長五年、明の神宗の時）東印度會社を創立して、東洋及び南洋に來りしが、支那・日本及び南洋等に於ては、ポルトガル人及びオランダ人に妨げられて、その計畫、思ふにまかせず、遂



英人力を印度に集中す

クライヴ　マドラス城を建つ

英人漸く勢を得

プラッシーの戰

佛の東印度會社創設

に印度に退きて、專ら力をその經營に注ぎ、二二九九年（明正天皇寛永一六年、明の毅宗の時）マドラス城を建て、これをその根據としたり。つぎて、イギリス人は、ポルトガル人よりボンベイを讓り受け、また莫臥兒帝アウランゼブより カルカッタの地を與へられ次第にポルトガル人及びオランダ人を壓倒して、勢力を印度に樹立せり。

**印度に於ける英佛の反目**　フランス人は、イギリス人より稍〻後れて東印度會社を建て、つぎて印度



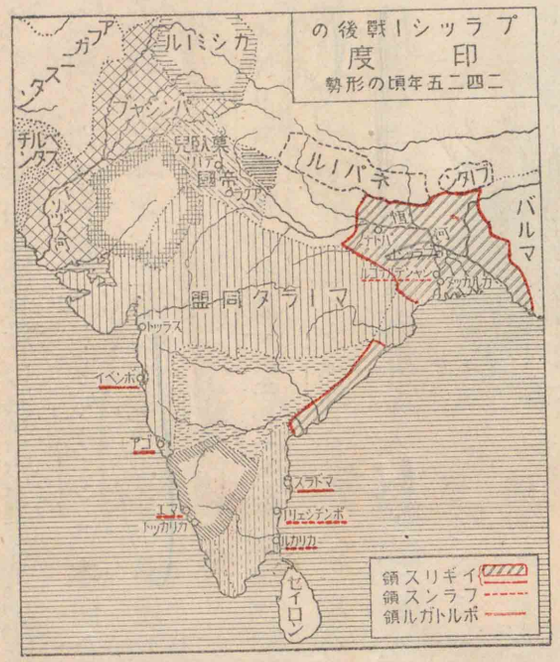


ポンヂシェリーの占領

英佛二國人の競爭及び反目

ヂュプレックスの雄圖

に來り、二三三四年（靈元天皇延寶二年、清の聖祖の時）ポンヂシェリー（Pondicherry）を占領して、これに據れり。ポンヂシェリーは、マドラスを距ること遠からざるが故に、勢、イギリス人との競爭を免れざりき。加ふるに、二四〇〇年より、ヨーロッパに戰爭ありて、英・佛二國間の和好破れしかば、印度に於ける兩國人の反目、益〻甚しくなれり。




**フランスの失敗**　當時、莫臥兒帝國、既に衰へて、威力、全く地に墜ち、諸侯、互に軋轢しければ、フランスの總督ヂュプレックス（Dupleix）、これに乘じて、印度を兼併せんと欲し、勢、一時、イギリス人を凌ぎしかど、

クライヴの善戰

ヂュプレックス本國に召還せらる

ブラッシーの戰

ヘースチングスの經營

ヘースチングス

英國王印度皇帝を兼ぬ

イギリス東印度會社の書記クライヴ(Clive)、膽略ありて善く戰ひ、その勇名、漸く印度に轟きたり。フランス本國にては、印度に對する政府の方針一定せず、遂にヂュプレックスを召還しければ、その經營、挫折したり。

## イギリスの勢力擴張

二四一七年(桃園天皇寶暦七年、清の高宗の時)プラッシーの戰(Plassey)ありて、大いにフランス人・印度人の聯合軍を破り、イギリス領印度の基礎を定めたり。後十七年、ヘースチングス、始めて印度總督に任ぜらるるや、益〻莫臥兒帝國蠶食の歩を進め、これにつげる歷代の總督、また皆その方針を守りて、着着、奏功し、二五一七年(孝明天皇安政四年、清の文宗の時)イギリスは、遂にその皇帝を廢し、つぎて東印度會社を解散せしめ、二五三七年(明治一〇年)女王ヴィクトリ

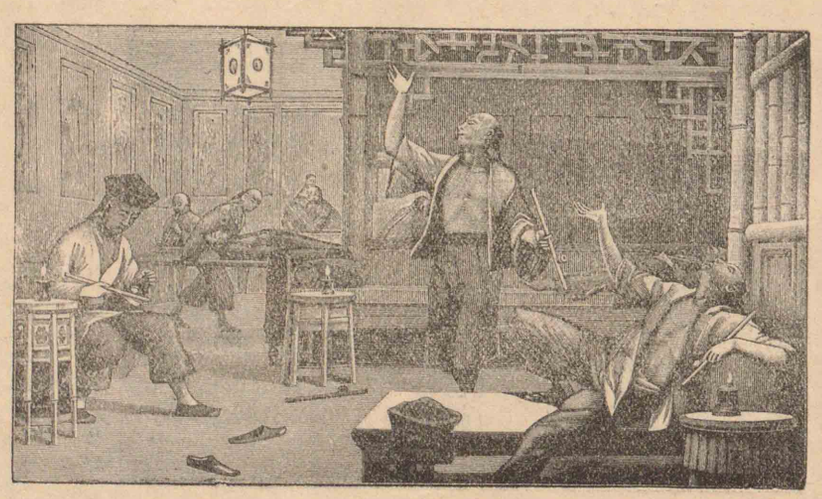
鴉片喫煙所内部の光景

鴉片の輸入

ヤ、印度皇帝の位を兼ね、後八年、全く緬甸を取りて、これを印度の一州となしたり。

## 鴉片の役の原因

初めイギリス東印度會社が著著、印度に勢力を得るや、イギリス人の支那貿易、また漸く盛んになり、當時の外國互市場たる廣東に來り、主として印度に產する鴉片を輸入したりき。清人、鴉片を嗜むこと甚しく、害毒の激甚、實に恐るべきものありしのみならず、經濟上、正貨の流出多きを以て、清國政府は、世宗の時、始



清(三)

高宗(6)—仁宗(7)—宣宗(8)—文宗(9)—穆宗(10)

林則徐

林則徐の高壓手段

めて嚴令を下して、その輸入を禁じ、その後も、屢禁令を發したり。然れども、その事、容易に行はれず、反りて益、その密賣を盛んならしむるのみなりしかば、宣宗は林則徐を廣東に遣はして、斷然たる處置をなさしめたり。則徐、行きて犯禁者を嚴罰し、イギリス商人の貯ふる鴉片二萬餘函を沒收して、これを燒き棄て、益、禁制を嚴にし、遂にイギリス人の互市を禁じたり。

鴉片を沒收する圖

**戰況**　是に於て、イギリスの將ブレマー等、船艦を率ゐて、印度より來り、舟山島を占領し、廣東・厦門・寧波等を封鎖し、別將エリオットは、艦隊を進めて、渤海灣に入り、白河口に逼りたり。清廷、大いに驚き、和を議せしめしが、主戰黨、勢を得て、議調はず、依然、戰をつづけたり。されど、清軍、戰ふ毎に敗れ、イギリス軍、進みて南京を衝かんとせり。清廷、遂に敵すべからざるを知り、所謂南京條約を結び、償金を出すこと、香港を割讓すること、上海・寧波・厦門・福州（福建省閩侯縣）・廣東の五港を開くこと等を約して、和を結べり。これ實に支那の開國にして、二五〇二年（仁孝天皇天保一三年、宣宗道光二二年）の事なり。これより、歐米の諸國、相つぎて使節を支那に派し、これと通商條約を結べり。

英軍の連擊

和議破裂

南京條約

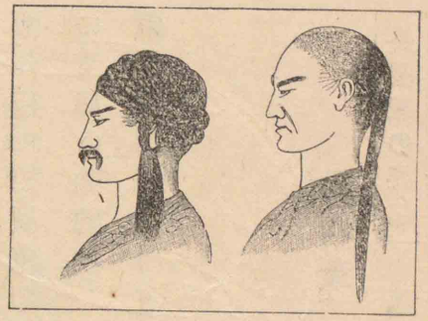
各國の通商・條約締結

## 第六章　長髮賊　英・佛軍の侵入

### 長髮賊の興起

鴉片戰役の失敗は、清の威信を內外に失ふこと、頗

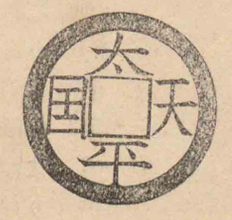
洪秀全の擧兵
官兵の頭髮と長髮賊の頭髮
洪秀全が發行したる貨幣
太平天國
長髮賊の名の起り
洪秀全輩蹟
賊南京に據る



剃ることを罷めたるを以て、世にこれを長髮賊といふ。

**賊勢猖獗**　初めは、賊勢、頗る猖獗にして、江南を席卷し、南京を取りて、これに據り、進みて江北をも侵掠し、河南より山西・直隸に及びたり。既にして、曾國藩・李鴻章・左宗棠等、所在に義勇兵を起して、これに當り、賊勢、稍〻衰へしが、たまたま、英・佛二國との紛議起り、清廷、大いに苦しめり。

南京に於ける洪秀全の宮殿入口に建てられたるもの高さ十一尺幅九尺の大石なり




大なるものありしが、役後八年、（孝明天皇嘉永三年、宣宗道光三年）洪秀全といふもの、兵を廣西に擧げ、滅滿興漢を唱へて、漢人の心を收め、またキリスト教を假りて、民衆を誘ひ、二五一一年、（孝明天皇嘉永四年、文宗咸豐元年）國號を建てて、太平天國といひ、自ら天王と稱せり。その徒、皆清俗に背き、髮を



曾國藩等義勇兵を起す
曾國藩
アロー號事件
佛國宣教師の殺害
聯合軍連捷
和議破裂

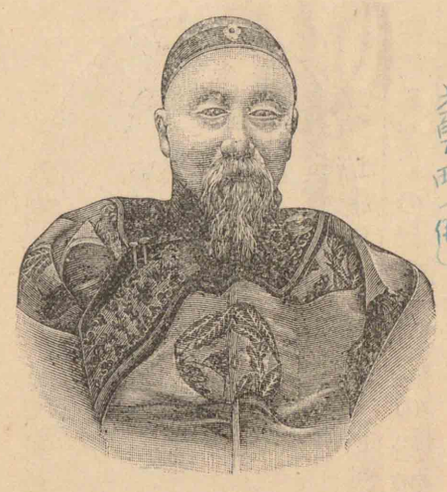
**英佛聯合軍の侵入**　この紛議の原因は、廣東の官吏が、イギリスの國旗を立てたる商船アロー號（Arrow）内に入りて、有罪の疑ある清國人を捕へたることと、廣西にて清國人がフランスの宣教師を殺害せしこととにあり。これに關する清廷の處置、當を得ざりしかば、英・佛二國、聯合軍を起して、廣東を攻め陷れ、進みて天津に入る。清廷、大いに恐れ、一旦、和を講ぜしが、英・佛の使臣が、條約の批准交換をなさんため、北京に赴かんとして、白河口に至るや、大沽砲臺より、突然、これを

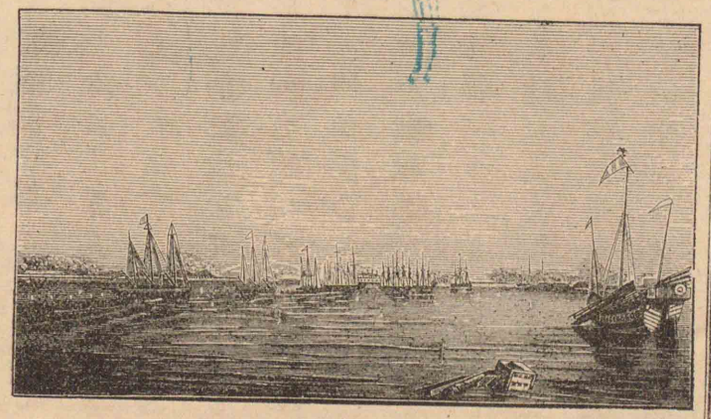
砲撃せしかば、二國、また兵を合して、清國を伐ち、大沽を下し、天津を拔き、進みて北京に入れり。文宗、出で奔り、人をして和を請はしむ。ロシヤの公使ノグナチエフ、その間に入りて周旋し、北京條約を結び、清國は、償金を出すこと、キリスト教の布教を自由にすること、牛莊・登州（山東省蓬萊縣）・潮州（廣東省潮安縣）臺灣・瓊州（廣東省瓊山縣）・九江・漢口（湖北省夏口縣）の七港を開くこと等を約し、五年に亙

ロシヤ公使の調停と北京條約

太沽砲撃

李鴻章







れる紛議、始めて定まれり。實に二五二〇年（孝明天皇萬延元年文宗咸豐一〇年）なり。

**長髪賊の平定**

長髪賊は、この外患に乘じて、また勢を得しが、北京條約成れる後、文宗の子穆宗立つや、上海在留の外人等、自衛のために、外人及び支那人を以て、洋槍隊を組織し、洋法によりてこれを訓練し、官軍を援けて、連りに賊を破り、常勝軍の稱を得たり。つぎて、イギリス人ゴルドン、常勝軍の將となるや、その雄材と威望とを以て、よくこれを統率し、曾國藩・李鴻章等と力を協せ、屢〻奇勝を制し、官軍の勢、次第に振へり。

ゴルドン

常勝軍と英人ゴルドン

ゴルドンは英國の工兵士官なり二五二三年以後常勝軍の將となり十六箇月間に三十三戰を試み赫赫の武功を立てたり常勝軍解散の後清國政府はその功勞に酬いんと欲して多額の金圓を贈與せしにゴルドン辭して受けざりきその家郷通信の一節に曰はく余は支那に入りし時と等しく貧困にして支那を去れりと心事の高潔想ふべきなり

兵亂の鎮定

清國の疲弊

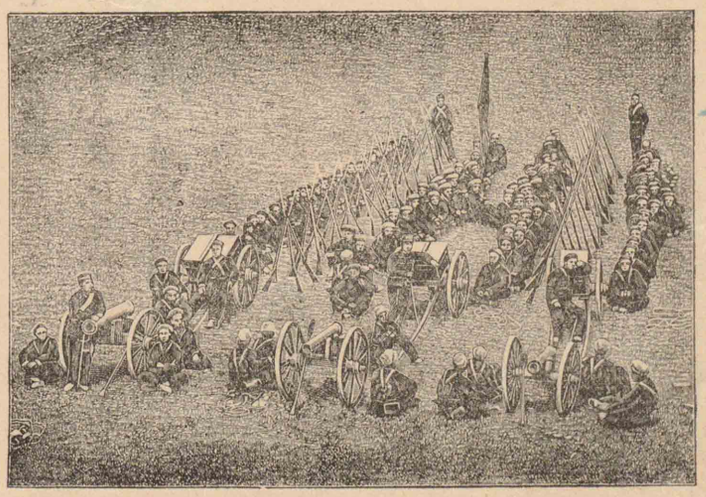
洋槍隊

既にして、官軍、大舉して南京を圍み、二五二四年（孝明天皇元治元年、穆宗の同治三年）遂にこれを陷れければ、洪秀全は、力竭きて自殺し、餘賊も、つぎて平定せり。亂起りてより十五年、清の國力を疲れしめしこと、實に測るべからざるものあり。

## 第七章　露國の滿洲經略

恰克圖條約

ロシヤは、ネルチンスク條約によりて、一時、清國に讓歩する所ありしが、清國が外蒙古及び天山北路を平げて、シベリヤとの交通、漸く頻繁となるや、二三へ



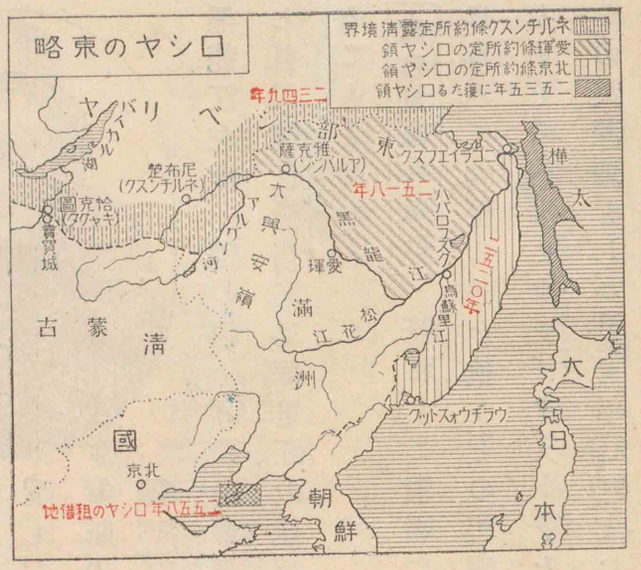




條約の內容

カムチャツカその他の略取

ムラヴィヨフの成功




七年（中御門天皇享保二年、清の世宗の時）これと恰克圖條約を結び、恰克圖及び賣買城を以て、兩國の互市場となし、且、北京に至りて通商すること、及び、教會堂を建設すること等を諾せしめたり。

露人の東進

またロシヤは、ネルチンスク條約締結後、久しからずして、カムチャツカを取り、つぎてアラスカを略し、樺太を侵し、また、漸次、千島及び蝦夷に來りて、屢〻我が德川幕府を驚かしたりき。二五〇七年（孝明天皇弘化四年、清の宣宗道光二七年）ムラヴィヨフ、東部シベリヤ總督に任ぜらるるや、頻りに黑龍江沿岸の地を探檢し、江口附近に

ムラヴィヨフ

愛琿條約

烏蘇里江東割取

千島樺太交換

イエフスクを創めて、根據地をここに定め、また黑龍江に由り、遠征隊及び移民を航下し、江口及び沿岸に戍兵を配置したり。ムラヴィヨフは、また清國が長髮賊の亂に苦しめるに乘じ、二五一八年（孝明天皇安政五年、清の文宗の時）清と愛琿條約を結びて、黑龍江左岸一帶の地を奪ひ、烏蘇里地方を兩國共管雜居の地となし、且、黑龍江・松花江・烏蘇里江の航行權は、露・清兩國の船舶のみに限ることとせり。

**露の東略益〻進む**

既にして、清國に英・佛の難あるや、イグナチエフは、進みて調停の勞を執り、その報酬として、烏蘇里江東の地を割かしめ、その南端にウラヂウォストック（Vladivostok）を建て、これを極東に於けるロシヤの策源地とし、二五三五年（明治八年）また我が國に千島を譲りて、樺太全





樺太の狀況

ウラヂウォストック

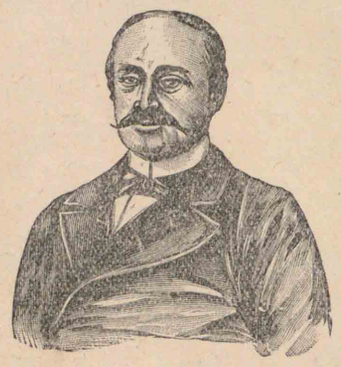
イグナチエフ

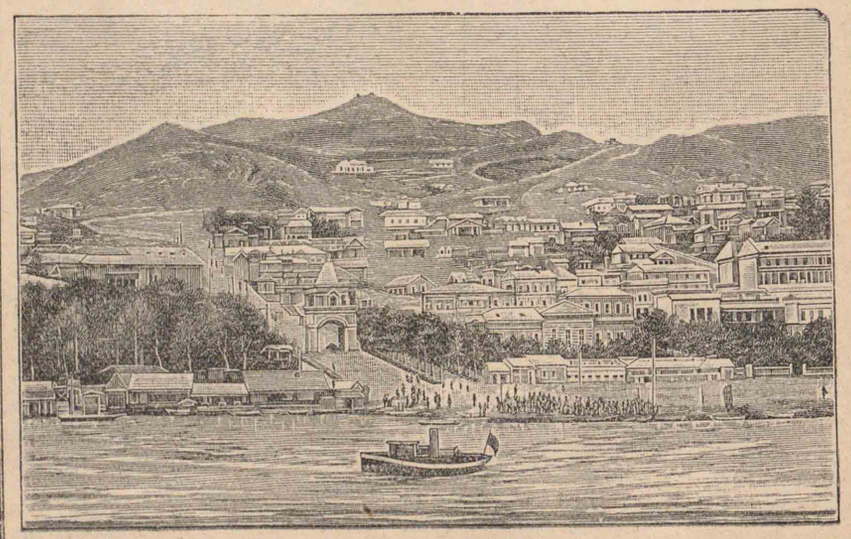
烏蘇里地方の發達

島をその有としたり。是に於て、北方アジヤの地、概ねロシヤの版圖に入りぬ。

**露國の極東經營**

爾來、ロシヤは、樺太を以て、依然、流刑地となし、その拓殖を勉めたれども、囚徒等、とかくに植民に適せず、人口の增殖、また甚だ微微たり。これに反して、烏蘇里地方の發達は、

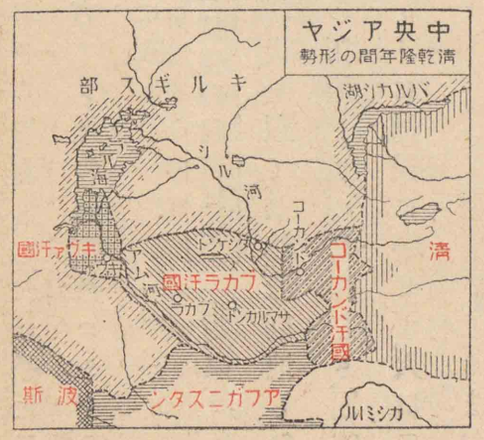




シベリヤ鐵道敷設と太平洋艦隊增加

稍見るべきものありて、極東に於けるロシヤの有望なる領地となりければ、ハバロフスク(Khabarovsk)に總督を置きて、外バイカル(Transbaikal)以東の地を管せしめ、二五五一年(明治二年)またシベリヤ鐵道敷設に著手し、漸次、太平洋艦隊をも增加し、大いに東亞經略の基礎を固くせり。

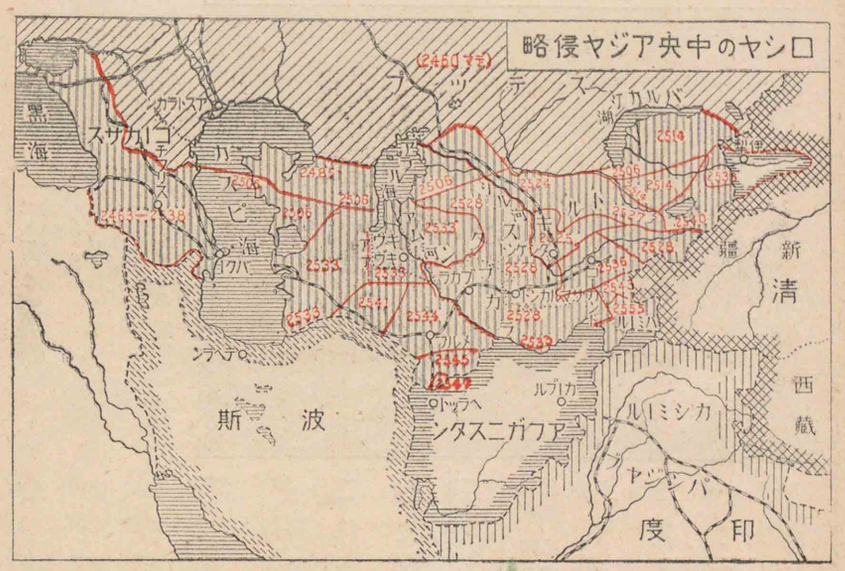
中央アジヤの三汗國


中央アジヤ
清乾隆年間の形勢
キルギス部
バルカシ湖
シル河
コーカンド
清
ブハラ汗國
ヒワ汗國
コーカンド汗國
ボルトカルマサ
ボルトカフ
ボルトカフ
ボルトカフ

回教徒の亂

露の伊犂占領

左宗棠天山南路を平ぐ


ロシヤの中央アジヤ侵略
新清
西藏
印度
波斯
ルミシカ
ルプリカ
ヤルカンド
ヤルケン
ホタン
ウルムチ
ハミ
トルファン
ビシケク
タシケント
ブハラ
ヒバ
ウラル
カスピ海
黑海
カラ海
バルカス湖
ボルガ
ドン
ウラル
ヴォルガ
ドニエプル
ドニエストル
ドナウ
ヴィスワ
ニエメン
ドヴィナ
ネヴァ
ラドガ湖
ペテルブルク
モスクワ
ヴォルガ
カザン
ニジニ
ヴィヤトカ
ペルム
ウファ
オレンブルク
ヴォロネジ
ハルコフ

パミール問題竝にその境界確定

て、嚴峻なる抗議を提出し、協商の結果、二五四七年（明治二〇年）露領とアフガニスタンとの境界を確定せり。つぎて、またロシヤは、パミール（Pamir）方面より印度に迫らんとして、イギリスとの間に葛藤を起ししが、二五五五年（明治八年）兩國、互にパミール地方の境界を議定して、その局を結びたり。

安南の變遷

## 第九章　佛國の印度支那經略　清・佛戰爭

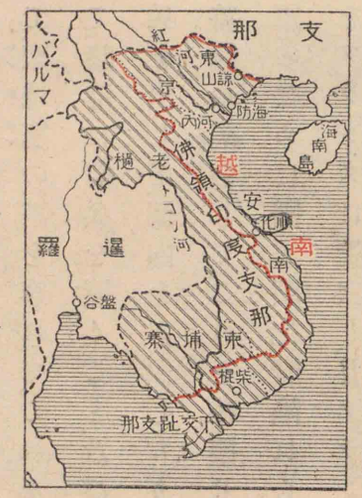
### 越南の建國

安南は、古來、或は支那の屬地となり、或はこれに朝貢するなど、その關係、略朝鮮半島と相似たり。明初、成祖に征服せらるるや、安南は、また、一時、支那の州郡となりしが、久しからずして獨立し、黎氏、これに王たり。後、權臣、國政を專らにして、黎氏、實權なく、明末に至り、阮潢といふもの、南部に據りて、廣南王と稱するに及び、國、遂に二つに分れたり。かくて、清の高宗の時に至り、黎・阮二氏、共に一旦亡びしが、ほどなく、阮潢の遠孫阮福映、フランスの援を借りて、內亂を定め、二四六二年（光緒天皇の御代、清の仁宗の時）安南を一統して、王位に登り、國號を建てて越南といひ、都を順化府に奠め、つぎて、使を遣はして、清に朝し、その封册を受けたり。

阮福映の安南一統

越南の背約

### 第一フランス・越南戰爭




福映の死後、越南は、かへりて、フランス人を疾視し、その宣教師を虐待せり。よりて、フランスは、使を越南に派して、前約の履行竝に宣教師の保護を迫れり。越南王、これを肯ぜざるのみならず、益フランスの宣教師を迫害せしかば、フランス、遂に意を決し、二五一八年（孝明天皇安政五年、清の文宗咸豐八年）兵を發して、越南を伐ちたり。越南、連りに敗れ、柴棍その他の地を割き、且、償金を出して、和を結べり。時に二五二二年な

戰爭の結果

フランス、カンボヂヤを保護國とす

佛兵の東京地方駐屯

戰爭の結果

清の抗議

戰況

り。

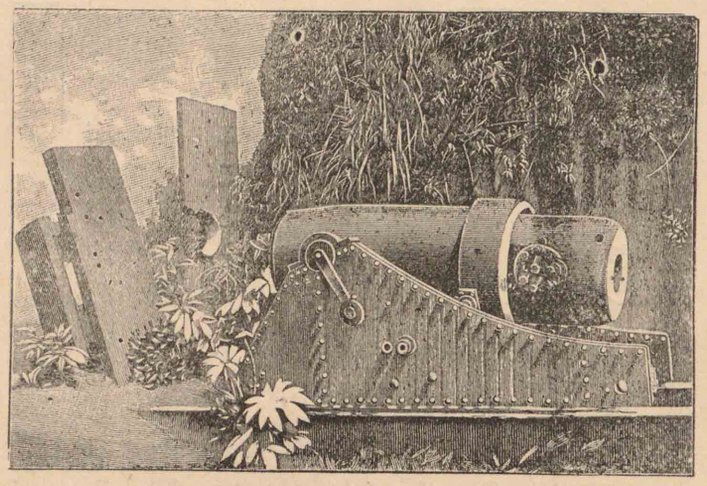
**第二フランス・越南戰爭**　フランスは、柴棍をその根據地とし、つぎて、柬埔寨（カンボヂヤ）の請を容れて、これをその保護國となし、また越南に迫りて、諸港に衞兵を置くこと、及び紅河の航行權を承認せしめ、遂に大兵を出して、河内を占領したり。越南王、その專恣を怒り、長髮賊の殘將劉永福をして、これを擊攘せしむることとしたりしが、フランス軍のために、國都順化府陷れらるるに及び、東京地方を擧げて、これをフランスに讓與し、且、フランスの保護國となれり。これ實に二五四三年（明治六年）の事なり。

**清佛戰爭**　然るに、清國は、越南王が、嘗てその封册を受けしことありしを口實とし、この講和に異議を挾み、フランスに對して詰問する所あり、二五四四年（明治七年）遂に戰を開きしが、フランスの陸軍、越南に侵入し、海軍はクルベー（Courbet）に率ゐられて、清の福建艦隊を殲（ツク）し、澎湖島を占領し、臺灣の諸港を封鎖したり。然れども、越南北境の陸戰に於ては、清軍の勢盛んにして、フランス軍敗れたり。既にして、兩國、互に讓歩し、二五四五年、天津に於て和約を結び、清は越南を放棄し、且、東京のフランス領なることを承認せり。是に於て、フランスは、印度支那半島に於て、交趾支那・東京を領有し、越南・柬埔寨を保護國とし、後三年、是等を併合し

海軍　佛蘭
陸軍　ス

天津和約

清軍敗殘の遺址



光緒十年六月十五日（明治十七年八月四日）佛國軍艦九隻基隆港を攻擊し數處の砲臺を陷れ清軍大いに敗れ佛軍遂に基隆を占領せり
十七日七十月八日佛艦三隻基隆港に來たり上陸す
澎湖島に於ける海岸砲臺の破壞せられし殘骸の光景なり

老檔をも保護國とし、以て今日のフランス領印度支那を成したり。

**佛國と暹羅との交渉**　二五五三年、フランスは、また暹羅を脅かして、メコン河東の地を略せしが、この時、既にメコン河上流地方を領せるイギリスの異議により、兩國領地の境界に幅五十英里の中立地を設くることとせり。

メコン河東の地を略す

英佛の境界

## 第十章　清國に對する諸強國の壓迫　清の滅亡　支那共和國建設

**明治二十七八年の役**　歐米の列强は、清國の衰弱せるに乘じ、爭ひてその利益を獲得せんと欲し、ロシヤは、伊犂・蒙古・滿洲方面より、イギリス及びフランスは、また南方より進み來りて、各、清國の隙を窺へり。然るに、清國は、往時の盛大を恃みて、自負・自尊の念、徒らに强く、遂に我が日本と明治二十七八年の役を開きて大敗し、かへりて、その衰弱せる實情を暴露せり。

清國の形勢

戰役の結果

**列强の壓迫**　この役の結果、我が國が遼東半島を領有することとなるや、ロシヤは、これを以て、東洋の平和に害ありとなし、ドイツフランスと結び、日本に迫りて、これを清國に還付せしめたり。而して、列强は、過大の要求を清國に提出し、ロシヤは、まづ清國より東清鐵道の敷設權を得、また滿洲を通じて、シベリヤ鐵道をウラヂウォストックに直通するの權を收め、つぎてドイツは膠州灣を、ロシヤは大連灣地方と旅順口とを、イギリスは威海衞を、フランスは廣州灣を租借し、遂には、往往、支那分割をさへ說くものあるに至り、清の國步益々困難となれり。この頃、アメリカ合衆國は、布哇を併合し、またイスパニヤと戰ひて、これを破り、フィリッピン諸島をも併せて、漸くその驥足を東洋及び南洋方面に伸べんとしければ、清國は、恰も爪牙を磨ける猛獸に包圍せられたる觀ありき。

遼東還付

改革黨の失敗

變法自强說

西太后

克德林記念門牌

戊戌の變

この時に當りて、憂國の志士等、頻りに變法・自强の說を唱へ、德宗も、改革黨の首領康有爲を擧げて、盛んに革新の業に著手したり。然るに、西太后、政を聽き、德宗を幽閉して、改革黨を斥け、專ら保守・排外を事としければ、遂に義和團の內亂を激成し、且、南方漢人等の惡感情を深からしめたり。

義和團の亂

義和團の亂

義和團は、西敎撲滅・外人排斥を目的とせる暴徒にして、二五五九年（明治三年）山東省に蜂起し、翌年、北京に入りて、列國公使館を圍みたり。是に於て、日・英・米・獨・佛・露・墺・伊の諸國、相聯合して、救援軍を出し、北京を占領して、以てこれを救へり。この騷亂の中に、德宗は、一時、西安府（長安縣）に蒙塵して、難を避け、李鴻章等、留まりて列國と和を講じ、二五六一年、元兇を處罰し、償金四億五千萬兩を支辨することを約せり。世にこれを北清事變といふ。

德宗の蒙塵

講和

滿洲の危機

ロシヤは、この事變に際し、兵を滿洲に入れしが、事定まりし後も、容易にこれを撤退せざるのみか、益〻その經營を進めて、清國を壓迫し、更に手を韓國にまで伸したり。然るに、二五六二年（明治三五年）清・韓の領土保全及び東洋の平和を目的とせる日英同盟成り

露の滿洲出兵

日英同盟

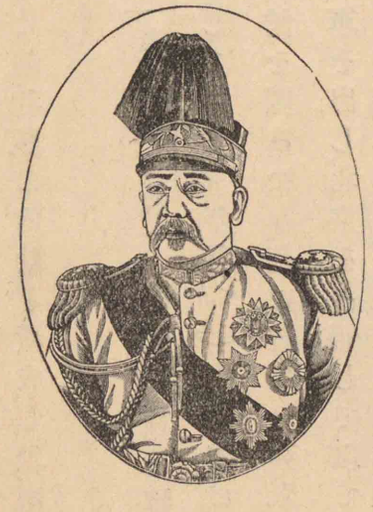
義和團の亂にドイツ公使男爵フォンケットレル殺さる清國は途に償金の外にドイツ公使が命を殞したる地點にその冢を建てしたる謝罪的の克德林記念門牌を設することとなりこれを實行したり

明治三十七八年の役の結果

日韓併合

袁世凱

立ちければ、ロシヤも聊か憚る所ありて、同年、滿洲より撤兵すべきことを清國に約せしが、遂にその約を履行せずして、明治三十七八年の役をひき起し、大敗を招きて、韓國は、我が日本の保護國となり、關東半島の租借權も、我れに讓與せられたり。



## 韓國及び清國の末路

二五七〇年（明治三年）八月、韓國は、我が日本に併合せられ、その民、皆安寧と幸福とを樂しむに至りたれども、清國は、依然として、列强競爭の舞臺たる觀ありて、政治上に、經濟上に、その侮りを免るること能はざるが如くなりき。これより先、清國にては、政局、頻りに動き、二五六八年（明治四年）の末に、西太后及び德宗の相つぎて歿するや、幼冲なる宣統帝を立てて、銳意、改革に勉め、我が國に倣ひて、遂に立憲政



清（三）

宣宗8 ― □ ― 文宗9 ― 穆宗10
　　 ― 德宗11 ― 醇親王 ― 宣統帝12

2572

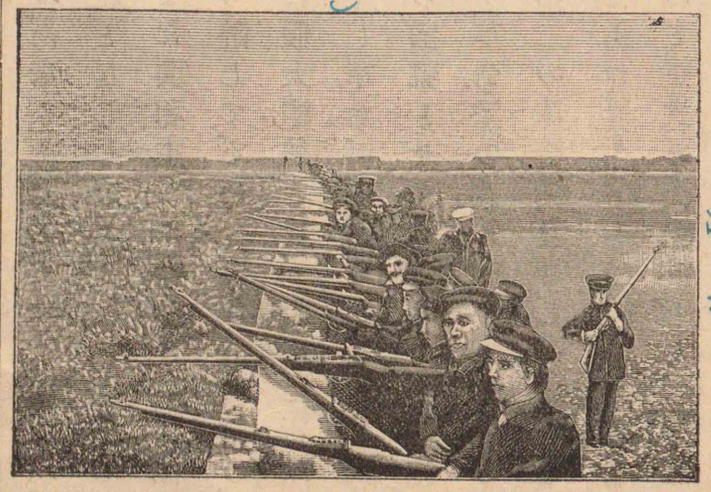
革命軍の興起

袁世凱の起用

革命軍兵士

清朝の覆滅

體を樹立せんとせり。然るに、二五七一年十月、黃興、黎元洪等を首領とせる革命軍、武昌の地に暴發するや、全國、忽ちこれに響應し、清廷、狼狽爲す所を知らず、袁世凱を起用して總理大臣とし、その手腕を藉りて、以てこの難局を收拾せんとせしが、事成らず、翌年二月に至り、宣統帝は、上諭を發して、帝位を退き、輿望に從ひて、共和政體たらしめ、清朝、ここに亡びたり。清は、太祖の卽位より、ここに至るまで、世を傳ふること十二、年を經ること二百九十七なり。



中華民國

袁世凱假大總統となる

孫文

支那共和國成立

袁世凱の帝制運動と反袁軍

## 支那共和國

これより先、革命軍は、南京に占據し、中華民國新政府を組織し、孫文(仙逸)を推して、假大總統となししが、今や、清帝退位し、袁世凱、また共和主義に贊しければ、孫文は、自ら辭して、その位置を袁に讓り、袁は、遂に假大總統となり、北京に新政府を組織し、革命派の建てたる中華民國をその國號とせり。然れども、その施設する所、革命派の意に滿たざるものありて、第二の革命勃發せしが、ほどなく鎭撫せられ、二五七三年(大正二年)袁は、議會に推されて、正式の大總統となり、支那共和國、全く成立して、列國の承認を得たり。

孫文は廣東省の人なり夙に革命思想を抱き倒滿興漢を目的とせる興中會を起し密かに兵を擧げんと圖りしが事成らずして亡命し諸國に流寓し革命軍の起るやイギリスより歸り推されて假大總統となりたり

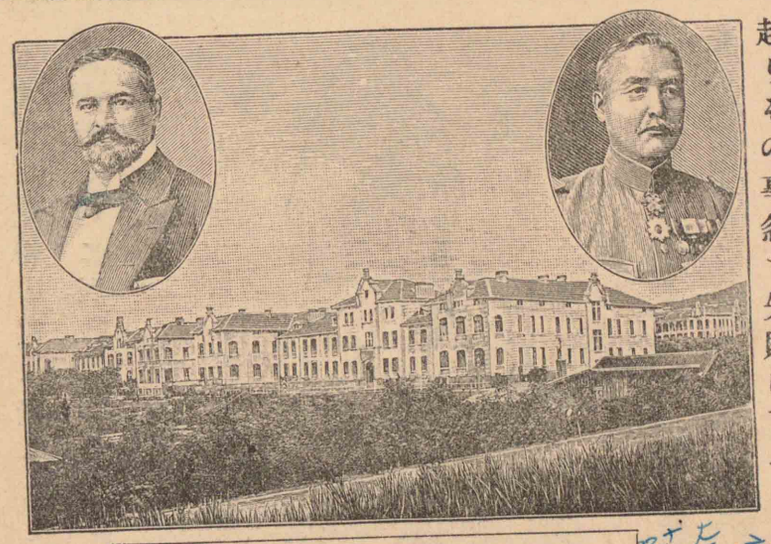
## 帝制運動

袁世凱は、既に大總統に當選せしが、これを以て滿足せず、更に皇帝の位に登らんと欲し、しきりに畫策する所ありき。南方諸省、これに反對し、時局、頗る困難となるや、袁も大いに省みる所ありて、帝制運動を中止し、罪を天下に謝したりしが、なほ袁の退位を要求して止まざるものあり、また南方諸省の續續獨立を宣するもの等ありて、風雲容易に定まるべくもあらざりき。かかる間に、袁病み、二五七六年(大正五年)六月死しければ、黎元洪、その後を襲ぎて大總統となり、南北の妥協、ここに成りて、騷亂、始めて平ぎたり。然れども、內外の國政、なほ紛擾の域を脫せず、翌年六七月の交には張勳の復辟運動さへ

黎元洪

袁世凱の死と黎元洪の大總統

張勳の復辟運動失敗



攻圍軍司令官神尾中將

日獨の役

モルトケ兵營

支那參戰

青島總督ヨルデック大佐

起り、その事、忽ち失敗に了へたれども、支那の前途は、益〻多事・多難となりたり。

モルトケ兵營は大正三年十一月十日神尾中將がヨルデック大佐と會し砲臺兵器彈藥その他を受領せる所なり

## 世界大動亂

これより先、二五七四年、ヨーロッパに大戰亂起るや、我が日本は、同盟の誼と東洋平和とのために、ドイツに向ひて宣戰し、その十一月、青島を攻め陷れ、最近、支那共和國も、またドイツ・オーストリヤとの國交を斷ち、つぎて宣戰したり。惟ふに、今次の大戰亂は、遂に世界の形勢を一變せざれば止まざるべく、東洋の形勢も、またこれが影響を蒙ること少からざるべし。邦人たるもの、大いに覺悟する所なくして可ならんや。

## 概括

近世期は、およそ明の滅亡より、現今に至るまでの間にて、西力の盛んに東漸したる時代なり。卽ち、ロシヤは、シベリヤ及び中央アジヤを略し、イギリスは、印度・緬甸を併せ、フランスは、後印度の東半を取り、獨・蘭・葡米の四國、また、或は前期に略取したる地を守り、或は新にその屬領地を占む。

清國は、この期の初めに、一時、隆盛を極めたりしが、列强の壓迫と、內政の腐敗とにより、國勢、日に月に陵夷し、日・清の役後、衰弱、益〻甚しく、革命の動亂、勃發するに及び、清室は、忽ち亡びたり。

今や、アジヤ大陸の過半は、既に歐洲人の手に歸し、獨立强國の名實、共に全きものは、たゞ我が日本あるのみ。邦人たるもの、古今の成敗、東西の興亡に鑑み、益〻奮勵努力すべきなり。

師範學校
歷史教科書

# 外國歷史 東洋篇 終

# 年表（四）

年代は皇紀に據る

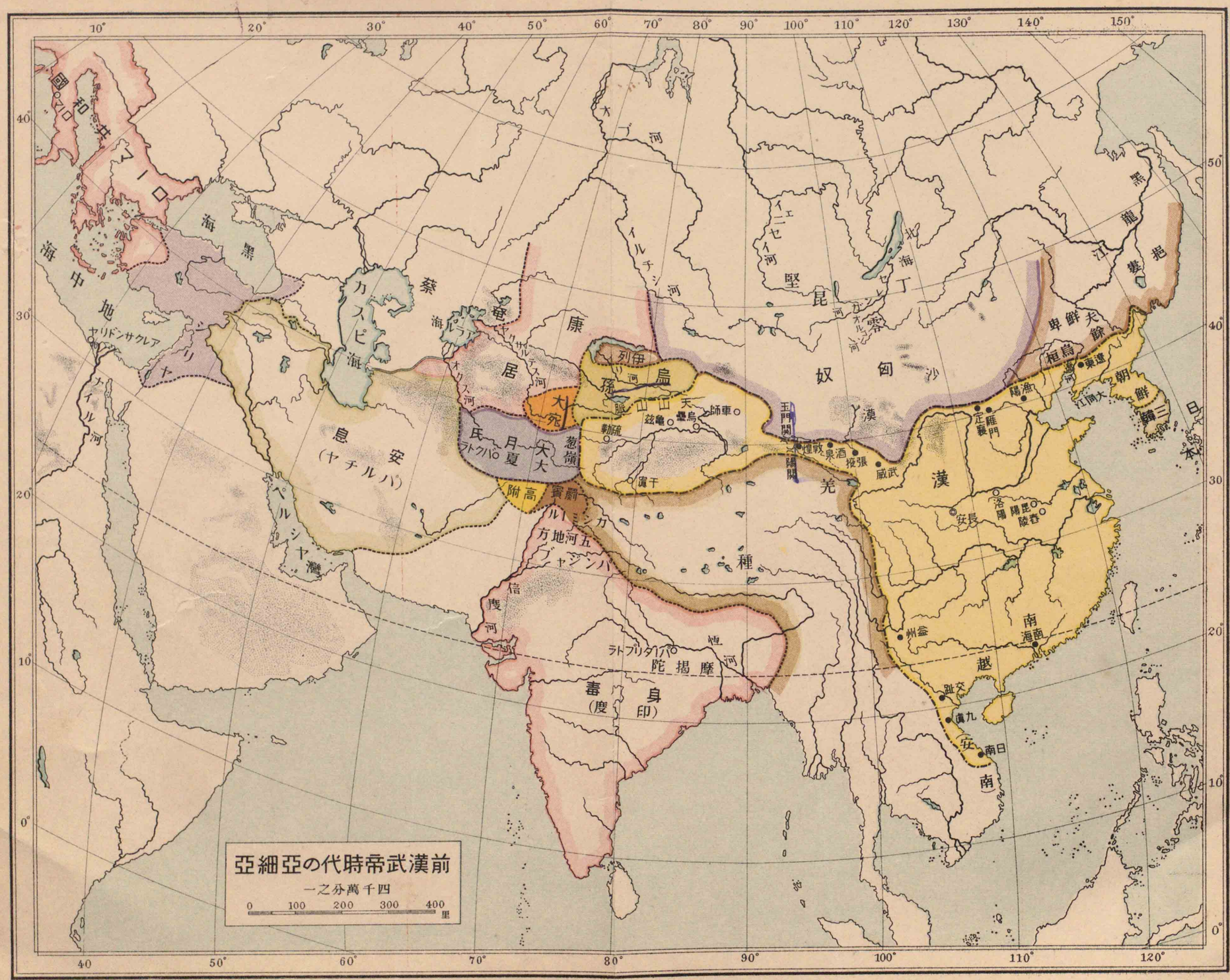
| 時代 | 國號 | 年代 | （天皇） | 重なる事蹟 | （清帝） |
|---|---|---|---|---|---|
| 近 | 清 | 2276—2572 | | | |
| | | 二三〇四 | （後光明） | 都を北京に遷す | （世祖） |
| | | 二三一八 | （後西院） | 莫臥兒帝アウランゼブ即位 | （聖祖） |
| | | 二三二一 | （後西院） | 鄭成功臺灣に據る | （聖祖） |
| | | 二三三三 | （靈元） | 三藩の亂起る | （聖祖） |
| | | 二三三四 | （靈元） | 佛人ポンデシェリーを占領す | （聖祖） |
| | | 二三四三 | （靈元） | 臺灣清領となる | （聖祖） |
| | | 二三四九 | （東山） | ネルチンスク條約成る | （聖祖） |
| | | 二三五六 | （東山） | 噶爾丹を親征す | （聖祖） |
| | | 二三六七 | （東山） | 莫臥兒帝アウランゼブ死す | （聖祖） |
| | | 二三八〇 | （中御門） | 西藏清に降る | （聖祖） |
| | | 二三八七 | （中御門） | 恰克圖條約成る | （世宗） |
| | | 二四〇七 | （櫻町） | 金川を平ぐ | （高宗） |
| | | 二四一七 | （桃園） | プラッシーの戰 | （高宗） |
| | | 二四二〇 | （桃園） | 回部平定 | （高宗） |
| | | 二四三四 | （後桃園） | ヘースチングス印度總督となる | （高宗） |
| | | 二四六二 | （光格） | 阮福映の越南建國 | （仁宗） |
| | | 二四九九 | （仁孝） | 林則徐の鴉片燒棄 | （宣宗） |
| | | 二五〇二 | （仁孝） | 鴉片の役の結果南京條約成る | （宣宗） |
| | | 二五〇七 | （孝明） | ムラヴィヨフ東部シベリヤ總督となる | （宣宗） |
| | | 二五一〇 | （孝明） | 長髮賊の亂起る | （宣宗） |
| | | 二五一七 | （孝明） | 英佛聯合して清と開戰す。莫臥兒帝國滅ぶ | （文宗） |
| | | 二五一八 | （孝明） | 愛琿條約成る | （文宗） |
| | | 二五一九 | （孝明） | 佛國柴棍を占領す | （文宗） |
| | | 二五二〇 | （孝明） | 英佛聯合軍北京を陷る。露國烏蘇里江東の地を得 | （文宗） |
| | | 二五二三 | （孝明） | 東埔寨佛國の保護國となる。朝鮮王李熙（李太王）立つ | （穆宗） |
| | | 二五二四 | （孝明） | 長髮賊の亂平ぐ | （穆宗） |
| | | 二五二八 | （明治） | ブカラ露の保護國となる | （穆宗） |
| | | 二五三一 | （明治） | 露人伊犂を占領す | （穆宗） |
| | | 二五三三 | （明治） | キヴァ露の保護國となる | （穆宗） |
| | | 二五三五 | （明治） | 千島樺太交換 | （德宗） |
| | | 二五三六 | （明治） | コーカンド汗國露に滅ぼさる | （德宗） |
| | | 二五四一 | （明治） | 伊犂條約成る | （德宗） |
| | | 二五四三 | （明治） | 越南佛の保護國となる | （德宗） |
| | | 二五四四 | （明治） | 清佛開戰 | （德宗） |

# 年表（四）

年代は皇紀に據る

| 時代 | 國號 | 年代（天皇） | 重なる事蹟 | （清帝） |
|---|---|---|---|---|
| 近世 | 清 2276—2572 | 二三〇四（後光明） | 都を北京に遷す | （世祖） |
| | | 二三一八（後西院） | 莫臥兒帝アウランゼブ即位 | （世祖） |
| | | 二三二一（後西院） | 鄭成功臺灣に據る | （聖祖） |
| | | 二三三三（靈元） | 三藩の亂起る | （聖祖） |
| | | 二三四三（靈元） | 臺灣清領となる | （聖祖） |
| | | 二三四九（東山） | ネルチンスク條約成る | （聖祖） |
| | | 二三五六（東山） | 噶爾丹を親征す | （聖祖） |
| | | 二三六七（東山） | 莫臥兒帝アウランゼブ死す | （聖祖） |
| | | 二三八〇（中御門） | 西藏清に降る | （聖祖） |
| | | 二三八七（中御門） | 恰克圖條約成る | （世宗） |
| | | 二四〇七（櫻町） | 金川を平ぐ | （高宗） |
| | | 二四一七（桃園） | プラッシーの戰 | （高宗） |
| | | 二四二〇（桃園） | 回部平定 | （高宗） |
| | | 二四三四（後桃園） | ヘースチングス印度總督となる | （高宗） |
| | | 二四六二（光格） | 阮福映の越南建國 | （仁宗） |
| | | 二四九九（仁孝） | 林則徐の鴉片燒棄 | （宣宗） |
| | | 二五〇二（仁孝） | 鴉片の役の結果南京條約成る | （宣宗） |
| | | 二五〇七（孝明） | ムラヴィヨフ東部シベリヤ總督となる | （宣宗） |
| | | 二五一〇（孝明） | 長髮賊の亂起る | （宣宗） |
| | | 二五一七（孝明） | 英佛聯合して清と開戰す。莫臥兒帝國滅ぶ | （文宗） |
| | | 二五一八（孝明） | 愛琿條約成る | （文宗） |
| | | 二五一九（孝明） | 佛國柴棍を占領す | （文宗） |
| | | 二五二〇（孝明） | 英佛聯合軍北京を陷る。露國烏蘇里江東の地を得 | （文宗） |
| | | 二五二三（孝明） | 東埔寨佛國の保護國となる。朝鮮王李熙（李太王）立つ | （穆宗） |
| | | 二五二四（孝明） | 長髮賊の亂平ぐ | （穆宗） |
| | | 二五二八（明治） | ブカラ露の保護國となる | （穆宗） |
| | | 二五三一（明治） | 露人伊犂を占領す | （穆宗） |
| | | 二五三三（明治） | キヴァ露の保護國となる | （穆宗） |
| | | 二五三五（明治） | 千島樺太交換 | （德宗） |
| | | 二五三六（明治） | コーカンド汗國露に滅ぼさる | （德宗） |
| | | 二五四一（明治） | 伊犂條約成る | （德宗） |
| | | 二五四三（明治） | 越南佛の保護國となる | （德宗） |
| | | 二五四四（明治） | 清佛開戰 | （德宗） |
| | | 二五五三（明治） | 佛國メコン河東の地を略す | （德宗） |
| | | 二五五四（明治） | 日清開戰 | （德宗） |
| | | 二五五五（明治） | パミール問題解決 | （德宗） |
| | | 二五五七（明治） | 獨逸膠州灣を占領す | （德宗） |
| | | 二五五八（明治） | 獨露英三國清の港灣を租借す | （德宗） |
| | | 二五五九（明治） | 佛國廣州灣を租借す。義和團の亂起る | （德宗） |
| | | 二五六一（明治） | 日英同盟成る | （德宗） |
| | | 二五六四（明治） | 日露開戰 | （德宗） |
| | | 二五六八（明治） | 德宗及び西太后歿す | （宣統帝） |
| | | 二五七〇（明治） | 日韓の併合 | （宣統帝） |
| | | 二五七一（明治） | 革命軍起る | （宣統帝） |
| | | 二五七二（明治） | 清の滅亡 | |
| 支那共和國 2573— | | 二五七二（明治） | 中華民國起る | |
| | | 二五七三（今上） | 袁世凱大總統となり支那共和國成立す | |
| | | 二五七四（今上） | 歐洲戰亂起る。日獨開戰 | |
| | | 二五七六（今上） | 袁世凱死し黎元洪大總統となる | |
| | | 二五七七（今上） | 支那獨墺二國に宣戰す。張勳の復辟運動失敗 | |

前漢武帝時代の亞
一之分萬千四
100 200 300 400 里
カスピ海
ルラ海
蔡
康
居
烏孫
列伊河
烏孫
天山
烏孫
師車
烏孫
兹亀
烏孫
月氏
大月氏
大夏
大宛
葱嶺
于闐
高附
罽賓
五河地方
ガンジス河
信度河
身毒(印度)
恒河
ラトプタラ
陀摩
ラトクバ
息安(ヤチルバ)
ペルシヤ灣
カブル河
イルチシ河
イエニセイ河
堅昆
北海
丁零
匈奴
沙漠
玉門關
陽關
敦煌
泉酒
張掖
武威
羌
漢
定襄
雁門
漁陽
桓烏
遼東
朝鮮
鮮卑
夫餘
黑龍江
挹婁
肅慎
日本
洛陽
長安
陽星
陰春
州会
南海
越
交趾
九眞
日南
安南


前漢武帝時代の亞細亞
一之分萬千四
0 100 200 300 400 里
ローマ
和平
海中地
ヤリドンサクレア
ナイル河
シリア
黑海
カスピ海
ペルシヤ灣
息安（ヤチルバ）
蔡
康居
ラトクバ
月氏
大夏
大宛
烏孫
列伊河
烏孫山
天山
烏孫
烏師
烏師車
烏孫
烏孫
烏孫

蒙古最大版圖
一之分萬百五千四
0 50 100 200 300 里
ムスラム國
ルイ汗國
キルギス朝
カデンカ
吐蕃
元
大漢
高麗
日本
都京
都上
都大
都成
都安
都西
都交
都州
都廣
都鄂
都海
都泉
都杭
都蘭
都州
都南
都梁
都元
都奉
都州
都陽
都瀋
都開
都城
都東
都平
都州
都州
都州

蒙古最大版圖
一之分萬百五千四
0 50 100 200 300 里
ドイツ帝國
イタリヤ王國
ムルス國
ムスラム國
ルイ汗國
ルミシカ
ルミシカ朝
ンカデ
察合台汗國
封地
オゴタイ汗國
ルバガルブ
ルハジマ
ルミエ
クリマルア
ルガシカ
ルブヤシニ
ンサラコ
ンタイコ
ルミハ
州沙
クリバシビ
ヤチク
ルミエ
ルコラカ
ムルコラカ
部スギルキ
オイラト部
バルカス湖
河ンノオ
河シレルゲ
沙漠
大都
(平閑)都上
クリリア
高麗
遼東
遼陽
瑞鳳
大金陽
日本
都京
龍
東
海
中
地
方
天
吐蕃
サラ
元
州廣
州泉
鄂州
建康
海上
南河(陽洛)
梁汴
元奉(安長)
都成
州麗
琉球
緬國
金齒
交都
安南
都西
占城
羅斛
眞臘
國暹
白古
マラッカ
スマトラ
ボルネオ
アヴヤジ

40°
50°
60°
70°
80°
90°
100°
110°
120°
130°
140°
150°
50°
40°
30°
20°
10°
0°
日本
都京
新羅
盧斯
東遼
盧平
奚丹
室韋
靺鞨
黑水
黑龍江
松花江
渤海
沙陀
突厥
東
沙陀
突厥
西
烏厥
葉護水
濟水
ルブヤシ
ンサラコ
ルミシカ
雪山
大
勒疏
于闐
州沙
吾伊
北庭都護府
西安都護府
安北都護府
延薛
陀
スギルキ
バイカル湖
蒙兀部
回紇
吐谷渾
吐蕃
唐
安長
洛陽
汴州
睢陽
揚州
蘇州
泉州
潮州
廣州
嶺南
南詔
劍南
蜀
方明
東河
西河
右曜
山常
揚范
京兆
單于都護府
安南都護府
羅婆泥
天竺
土領王日戒
チブリラムタ
城些羅
カブール
國チンカ
國子師
扶南
占城
真臘

唐代 高宗時代 亞細亞
太宗時代の都護府 □
玄宗時代の都護府 ▲
一之分萬千四
0 100 200 300 里
日本
都京
新羅
盧斯
渤海
松花江
黑龍江
室韋
蒙兀部
突厥
東突厥
沙陀
回紇
薛延陀
安北都護府
東安都護府
東都
奚
契丹
盧平
營州
遼東
安東都護府
平壤
陽范
京兆
山南
東河
西河
方明
右曜
安長
洛陽
汴州
睢陽
楊州
蘇州
泉州
潮州
廣州
嶺南
蜀
南劍
唐
吐谷渾
吐蕃
沙州
于闐
庭州
北庭都護府
西安都護府
吾伊
勒疏
羅城
天竺
泥婆羅
土領王日戒
チブリラムタ
カルミシカ
雪山
カーブル
烏孫
突厥
西突厥
烏孫水
葉護水
ルブヤシニ
ソンダマハ
ドンエウハネ
ドンダガ
ラコンサ
ルブノチンタスンコ
拂菻
東ローマ帝國
スクスマタ
カット
ナヂト
エジプト
アラビヤ
大食
バイカル湖
スギルキ
陀延
薛
紇
回
陀沙
漠
沙
突厥
東突厥
安北都護府
東安都護府
安南都護府
南詔
扶南
占城
真臘
カンチ國
師子國

亞細亞の時盛極清
一之分萬千三
0 100 200 300 里
大露西亞
ヤクツク
ベシ
ヤルツク
ヤルツク河
オブ河
クスイセニエイ
クスムト
バイカル湖
クツクルイ
タクヤキ
クスンチルネ
ンジバルア
シグイア
庫葉島
滿洲
歳葉海
(クツトスオウチラウ)
日本
東京
京都
長崎
山金
朝鮮
漢城
平壤
江華島
京盛
陽遼
京北
津天
山海關
州登
內蒙古
(外蒙古)
部
ハルカ
河ンレルケ
河ラト
多莫昭
拉
衛
部
ハルカ
部
ハルカ
部
ハルカ
部爾噶準
イリ河
部
回
煌敦
青海和碩部
海青
西藏
安西
南河
封開
州揚
南京
州杭
寧波
都成
慶重
武昌
サラ
カルルタ
(ルーパネ)
インタプ
州福
門廈
州潮
籠鷄
府南臺
平安
理大
南雲
州廣
門澳
ルガンベ
モ莫
タッカルカ
甸緬
ワア
クペ
京東
都交
安
羅暹
化順
南廣
南占城
ヤチユア
クッコンバ
カンボジヤ
ゴイサ
ヤ
呂宋
ラニマ
ラドマ
イセ
90°
100°
110°
120°
130°
140°
150°
50°
40°
30°
20°
10°

清極盛時の亞細亞
一之分萬千三
0 100 200 300 里
ルヒシ
トボルスク
クスイセニエイ
クスムト
カブ河
ヤルチシ河
ヴォルガ河
裏海
ペルシヤ
ベルチスタン
ンラベテ
ンロイセ
ルソイマ
アゴ
スラドマ
ンタスニガフア
ルブリカ
ルミシカ
ブヤンバ
リデ
サラ
カルルク
(ルーパネ)
リンタイブ
タッカルカ
ルガンベ
國帝兒臥莫
ブカラ
ドンカルマサ
ラ汗國
コーカンド汗國
キヤフタ
ヤルキヤ
ヤルキヤ汗國
ヤルキヤ部
ヤルキヤ
ヤルキヤ
ヤルキヤ

師範學校歷史教科書 外國歷史（大正七年改版） 東洋篇

定價金七拾錢

大正十一年度臨時定價金壹圓參拾參錢

大正元年十月廿四日印刷
大正二年十一月十七日訂正印刷
大正四年十一月十七日改訂印刷
大正五年十二月二日改訂再版印刷
大正六年十一月七日改訂三版印刷
大正七年三月一日改訂四版印刷

大正元年十月廿八日發行
大正二年十一月十日訂正發行
大正四年十一月十日改訂發行
大正五年十二月五日改訂再版發行
大正六年十一月四日改訂三版發行
大正七年三月一日改訂四版發行

著作權所有 峰岸米造 著作權檢印 證

著者 東京市小石川區白山御殿町百廿七番地 峰岸米造

發行者 東京市日本橋區鐵砲町三番地 合資會社六盟館

右代表者 杉本七百丸

印刷者 東京市京橋區弓町二十五番地 高橋都

發行所 東京市日本橋區鐵砲町三番地 合資會社六盟館 電話麹町一三六四番 振替口座東京一二五五〇番

販賣所 各府縣下書肆

（印刷 東京市京橋區弓町二十五番地 三秀印刷協同株式會社）

合資會社 六盟館
發行圖書
大販賣所

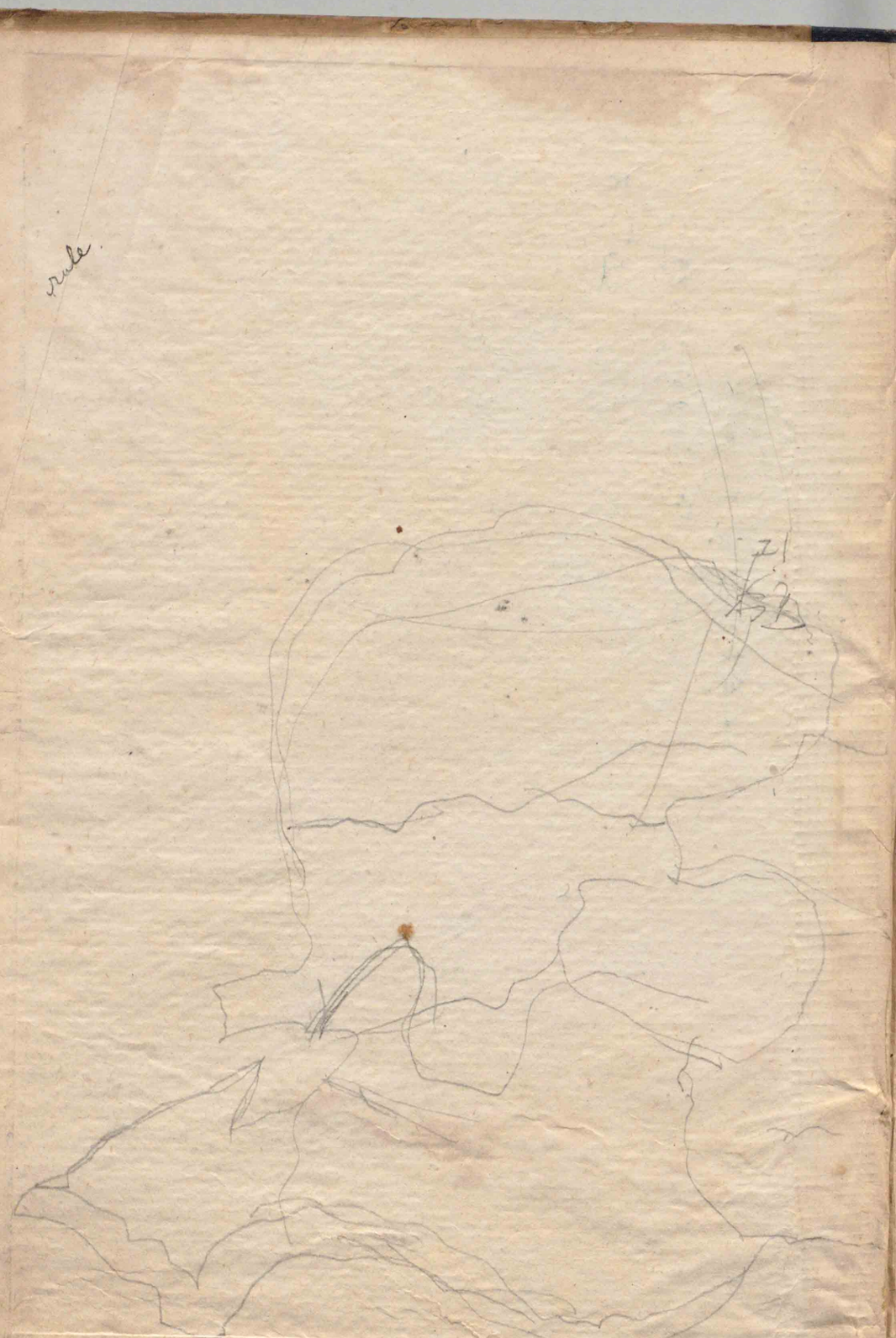
東京市京橋區南傳馬町二丁目 電話京橋二一六三番 振替口座東京二八〇九番 目黑書店

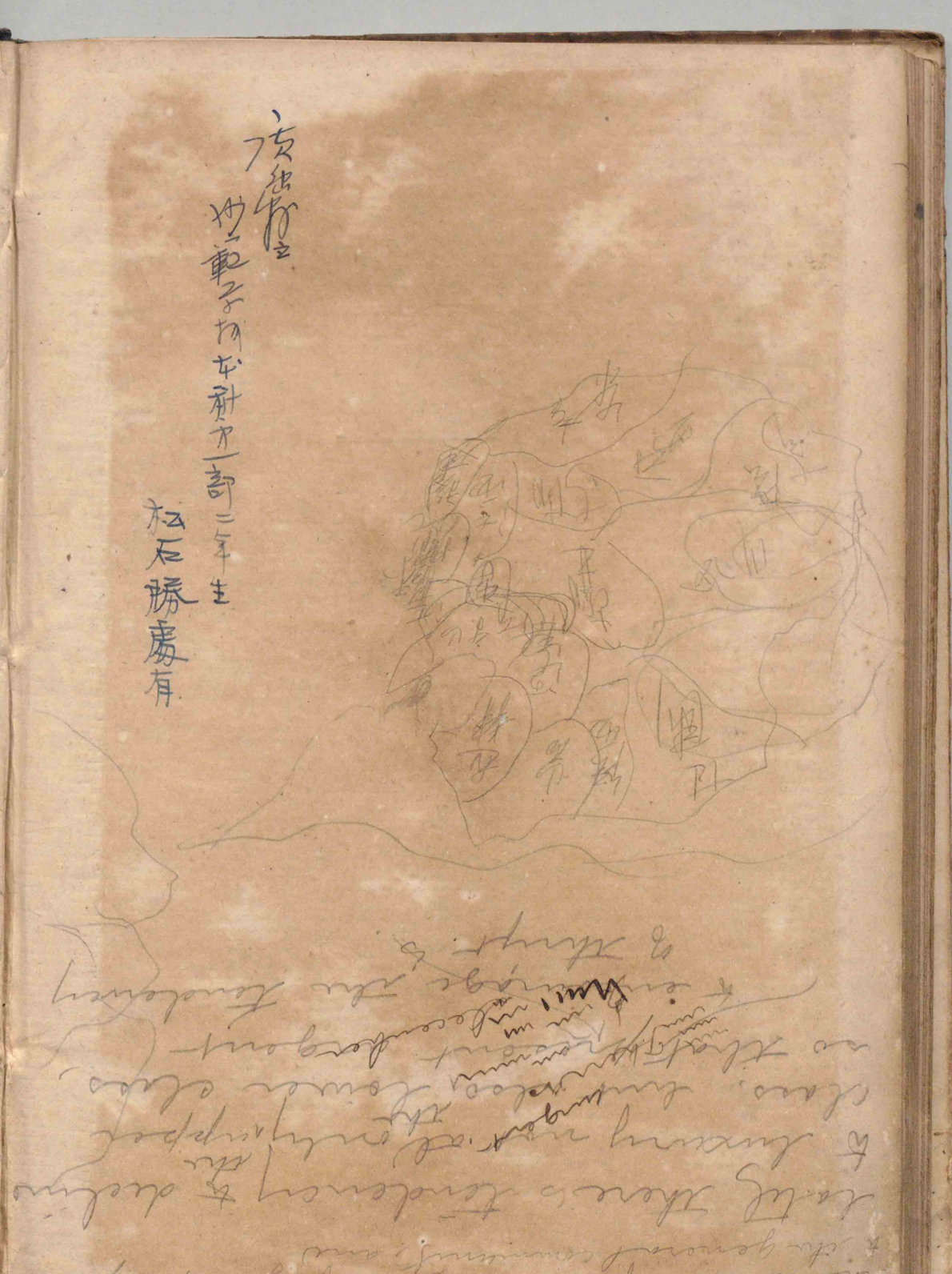
東京市日本橋區鐵砲町 電話神田一三一三番 振替口座東京三〇九〇番 榊原書店

東京市日本橋區本石町二丁目 電話本局一六九八番 振替口座東京五六一三番 杉本書店

長岡市表四ノ町 電話長岡一八番 振替口座東京三六一九番 目黑十郎

長野市大門町 電話長野一二四番 振替口座東京一〇七〇番 西澤本店





広島大学図書
2000074178